
Angel Beats ~ Heaven Stair ~

袴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats \ Heaven Stair \

【Nコード】

N71130

【作者名】

袴

【あらすじ】

舞台は死後の世界。

凄惨な人生を生き、若くして命を落とした少年少女は、生前の未練を清算するための学園で出会い、神への復讐を誓った。

Prologue

……痛いな。

土砂降りの雨がアスファルトに横たわった身体を打ち付ける中、少年は思った。

霞む視界の中で捉えられた両手……正確には両手だったものをみて、彼は何処が痛いのかようやく認識する。

指はへし折れ所々折れた骨が皮膚を突き破っている。

(……これじゃあ、飯を食うのにも苦労しそうだな)

自らの両手が潰された状況でそんな感想を持つのは、彼が激痛で混濁しているからだろう。

しばらくの間そのままの体制でいると、額から垂れて来た血液が目に入ってきた。

(そうか、頭も殴られたのか)

ようやく自分の置かれた状況に気付くと、少年は肩の力で何とか身体の向きを変え、仰向けになって空を見つめた。

分厚い雨雲からは、太陽の日は一切差し込んでこない。

(……俺、死ぬのかな?)

ふと少年は考える。

(……………いいことなんて、何にもなかったなあ。

何でこんなことになってんだろ？

俺、何か悪いことしたかな？)

朦朧とする意識の中、少年はただただ空を見上げていた。

第1話『Fall to heaven』

目を覚ました時、空には既に星が瞬いていた。

少年は上半身を起こすと、間の抜けた表情を浮かべる。

両手を見ると、先程まで感覚すらなかった骨と肉の塊は、死にそんなほどの痛さを忘れさせるほどに綺麗な手の形をしていた。

「……………動く」

二三度拳を握って開くことを繰り返すと、そんな呟きをもらした。

「ん……………何で俺、こんな格好してんだ？」

自分が学生服を着ていることに気付くと、彼は小首を傾げる。

地面に手をついて立ち上がると、彼は自分の置かれた状況を把握しようとして周囲を見渡した。

三角屋根の近代的な建物に団地の如く建ち並ぶ棟、さらには運動場、サッカーグラウンド、テニスコートに野球場と、とんでもない広さの学校だ。

「……………何だよ此処。」

「一体何処の学校だ？」

そんな疑問に答える相手はなく、少年はとりあえず学校を出ようと

考えるが…………。

「…………外に建物が全然見えねえ」

校外にはただ鬱蒼とした森が広がり、その先は薄く靄がかかっていて視認できない。

途方に暮れて近くにあったベンチに座り込んでいると、

「ん？」

不意に後ろから肩を叩かれる。

振り向くと、そこにはきらびやかな銀髪の無表情な少女の姿があった。

彼女を見ると、少年は安堵の表情で小さくため息をつく。

「…………はあ…人がいた。」

キミ、ちょっと聞きたいんだけど」

「……………」

無言で見つめられ、少年は戸惑うが、何とか続ける。

「この格好でこんなこと聞いて変な奴だと思っても知れないが、此処はどこなのか教えてくれないか？」

尋ねられると、少女はぼそりと呟くように言う。

「……………学校」

「見りゃ分かるよ。」

……………出来れば地名で答えてくれればたすかるんだけどさ」

苦笑混じりの笑顔で少年が言うと、

「……………」

少女は再び無言で返す。

(……………まずい相手と関わってしまった)

現状の酷さに頭を抱えると、少年はしばし考え込む。

(……………とりあえずは深入りせずに済ませるか)

そう考えて少女と向き合つと、少年は彼女に声をかけた。

「えっと、とりあえず人のいるところに案内して欲しいんだけど」

「……………学生寮はこっち」

短く答えると、少女は少年の手を引く。

そうしてしばらく歩いていると、

「……………」

何処からともなく響いてきたメロディーが、二人の耳に入った。

「この学校の軽音部か？」

少年が尋ねると、

「……こんな時間にライブをするなんて、聞いていないわ」

少女は彼の手を引いたまま、音のする方へ向かい歩き出した。

同時刻、学生寮の前では仮設されたステージの上で、他の生徒とは違う制服を着た四人の女子が演奏をしていた。

それを聴いた生徒達は次々と寮から外に出る。

しばらく演奏を続けて盛り上がりが最高潮に達すると、裏方で待機していたステージ上の女子と同じく他の生徒とは違う制服を着ている学生達が、仕切に周囲を警戒し始めた。

そんな中、小柄で無表情な女子が口を開く。

「天使、現れました」

彼女の言葉を聞くと、一同は慌ただしく動き出す。

先程までかなりの盛り上がりを見せていた生徒達はしんと静まり返り、まるでモーゼの起こした奇跡のように道を空けて二人の生徒をステージに通す。

通された生徒……先程少年と合流した少女は、少年を連れのままステージに上がる。

すると、ギターを演奏していた髪の短い女生徒は、

「天使……と、誰？」

「誰と言われても困るんだが……そろそろ離してもらえるか？」

少年が尋ねると、少女はふと思い出したかのように振り向き、ぺこりと頭を下げる。

「……忘れてたわ、ごめんなさい」

手を離されると、少年は顔を引き攣らせて成り行きを見守る。

「無許可でのライブ活動は禁止よ。」

楽器を没収させてもらうわ」

言うと、少女は立てかけられていた古いアコースティックギターに手を伸ばした。

途端、先程まで冷静だったギターの女生徒が声をあげる。

「っ！？それに、触るなあ！！」

決死の形相で女生徒はマイクスタンドを振り上げる。

「な！？（あんなもんで殴ったら、頭かち割れるぞ！？）まっ」

少年は取り乱しながらもなんとか『待て』と叫ぼうとするが、

「ガードスキル『ハンドソニック』」

少女が呟いた次の瞬間、それは起きた。

少女の袖からは両刃の剣が生え、瞬時にマイクスタンドを両断する。

「っ！？」

驚く女生徒に対し、少女は刃を振り上げるが、

「待て！」

咄嗟に少年が割って入った。

「何だか知らんが刃物はやめろ。

命に関わるぞ」

その言葉に、少女は一瞬動きを止めるが、女生徒が両断され作り出されたマイクスタンドの鋭利な切断面を見ると、再び刃を振り上げる。

「……………そこをどいて」

「くそっ！聞く耳なしかよ（……しかたねえ）！」

刃を振り下ろそうとする少女に対し、少年は拳を構えた。

そして、刃が振り下ろされた瞬間、少年はそれを紙一重で避け、カウスターに放った左ストレートが、少女の顔面を捉えた。

「ヤバ！？つい本気で殴っちゃった」

弾き飛ばされてステージから落下した少女を見ると、少年は直ぐに駆け寄ろうとするが、

「アンタも一緒に来な！」

リードギターを担当していたポニーテールの女子が、少年の手を引いた。

ライブ活動をしていた他の生徒も、殴り飛ばされた少女を気にかけることもなく、楽器を持ってその場を去ろうとしている。

「お、おい！あの娘ほっといいていいのかよ！」

「心配して戻ったところで、後悔するだけだよ」

ポニーテールの女子に言われると、少年は訝しげな顔をして振り向く。

すると、少女は先程の打撃などなかったかのように、無傷で立ち上がっていた。

「……………嘘だろ」

「とにかく走りな。」

話はアレから逃げ切っただよ」

そんなやり取りをすると、少年はバンドのメンバーと同じ方向に走り出した。

第2話 『d e t e r m i n a t i o n』

ライブを解散してしばらくすると、バンドのメンバーに連れられ、少年は校舎内の一室に隠れていた。

「一体何だつてんだよ」

そんなぼやきを聞くと、髪の毛の短い女子が、

「……つい勢いに任せて連れてきちゃったけど、もしかして新しくこの世界に来た人？」

少年に尋ねる。

対して少年は、顔を小首を傾げて尋ね返す。

「この世界？」

「そ、この死後の世界」

ポニーテールの女子が言うと、少年は顔を引き攣らた。

「……勘弁してくれよ。」

いきなり刃傷沙汰に遭遇したと思ったら、今度は死後の世界だとか、此処にまとも奴はいないのか？」

「……いきなり受け入れるのは難しいと思うけど、自分でも死ぬ瞬間を覚えてるでしょ？」

「……………」

髪の短い女子に問い掛けられた途端、少年は目覚める前の光景を思い出し黙り込んだ。

そんな彼に対し彼女は言った。

「この世界に来た人は皆、不幸な人生を生きて、納得出来ない死に方をしているんだ」

「……………それじゃあ、お前らもか？」

尋ねられると、バンドのメンバー四人は揃って頷く。

すると少年は、小さくため息をついて顔をあげた。

「……………なるほど、つまりここは前世に未練タラタラのどうしようもない人生を送った奴らを詰め込んだ檻ってことか。」

……………それで、これから俺はどうすればいいんだ？」

「『何』って、そんなの決まってるじゃん」

「戦うんだよ。私達に不幸な人生を辿らせた神って奴とね」

ベースの軽そうな女子の言葉をポニーテールの女子が補完した。

「……………神って……………いるのか、そんなの？」

「少なくとも、私達のリーダーはいると考えてる」

「……なるほど神か」

髪の毛の短い女子が言うと、少年はそう呟いて自分の手に視線を落としました。

(もし……もし本当に俺にあんな人生を生きさせた神がいるなら、そいつの顔面に一発叩き込めれば、相当スカッとするだろうな………)

ふと考えて、少年は拳を握った。

彼のそんな行動を見ると、

「……覚悟は決まったみたいだね。」

自己紹介しとくよ。私は岩沢、死んでたまるか戦線の陽動部隊、ガールズデッドモンスター、略して『ガルデモ』のリーダー」

髪の毛の短い女子が自己紹介して手を差し延べる

対して少年はその手を握り握手した。

すると、岩沢は続けて他のメンバーを紹介する。

「リードギターを弾いてたのが、ひさ子」

「よろしく」

ポニーテールの女子が反応する。

「それから、ベースの関根とドラムの入江」

「よろしく」

「よろしくお願ひします」

関根と入江が挨拶すると、次に岩沢は少年に尋ねる。

「それで、あんたの名前は？」

「相楽だ。相楽さがら 七瀬ななせ。

「一応は元ボクサーだ」

言われると、関根が関心した様子で声をあげる。

「へー、だからあんな風に天使をやっつけられたんだ」

「天使？」

関根の口にした言葉に七瀬は小首を傾げる。

対して入江が、関根に代わって回答する。

「さっきの手から剣を出した女の子ですよ」

それを聞くと、七瀬は納得した様子で頷いた。

確かにライブ会場でのあの少女の行動は、些か人間離れしている。

「成る程な。」

神と戦うには、まず天使を倒す必要があるってことか。

……それにしても、何で天使の目の前でライブなんてやってたんだ？」

「陽動だよ。注意を私達に向けているうちに、他の仲間が天使の住家に侵入して、神への手掛かりを探してるんだ」

ひさ子が応えると、七瀬は納得した様子で頷いていた。

「……さてと、そろそろ天使も引き上げたかな？」

ふと呟くと、岩沢は教室の扉に手を掛ける。

途端に小さな足音が彼等の耳に入った。

「っ！？」

「もしかして天使？」

驚く岩沢に続き、関根が声をあげる。

すると、七瀬は親密な面持ちで他の面子を見渡した。

教室内に武器になりそうな物はなく、七瀬以外は全員が女子。

マイクスタンドを両断した天使の戦闘力からして、勝ち目は皆無だ。

(……戦えるのは……俺しかないよな)

戦況を分析すると、彼は小さくため息をついた。

「……まったく、いきなり貧乏くじかよ。俺が時間を稼ぐ、お前らは逃げて仲間を呼んでこい」

言われると、岩沢達は一瞬間の抜けた表情を見せ、

「……いいの？」

「女の子残して逃げねえだろうよ」

岩沢の問い掛けに応えると、七瀬は扉の取っ手に手をかけた。

「それじゃ、俺がドアを開けたら、足音と逆方向に走れよ？」

その言葉にガルデモのメンバー全員が頷いて応えると、七瀬は勢い良くドアを開け、足音の方向を向いて拳を構える。

「絶対に助けに来るから、それまで頑張って」

岩沢に言われると、七瀬は振り向くこともなく言葉を返す。

「精々期待させてもらうよ」

そして、ガルデモが逃げてから十秒程経つと、透き通るような銀髪をなびかせ、彼らが天使と呼ぶその少女は現れる。

途端、七瀬は睨みつける様な視線を向け、

「こっから先は、通行止めだ！」

啖呵を切って駆け出した。

「ガードスキル『ハンドソニック』」

天使は直ぐさま刃を展開するが、既に七瀬の拳は眼前に迫っていた。

「おせえ!!!」

力強い右ストレートが、天使の小柄な身体を軽々と弾き飛ばす。

しかし、硬い廊下に叩き付けられても、天使はまったくダメージなどない様子で立ち上がり、スカートについた埃を払った。

次の瞬間、今度は天使が駆け出す。

「っ!?!」

人間離れた走力に驚く七瀬に対し、天使は容赦なく刃を突き出す
が、

「シッ！」

それを簡単に避け、七瀬は彼女の顔面に左のジャブを打ち込む。

そして、天使が怯んだ瞬間、右ストレートが彼女の腹部を捉え、再び天使は弾かれる。

(……確かに運動能力は化け物だが、動きはド素人だな。

「これなら、いける！」

勝利を確信し、拳を構えると、七瀬は再び天使に向かい駆け出した。

「っ！」

迎撃のために天使は刃を突き出すが、巧みなフットワークで躲され、七瀬は右の拳を突き出す。

しかし、

「……ガードスキル『ディレイ』」

呟いた瞬間、天使の姿は七瀬の視界から消えた。

同時に背後に気配を感じ振り向くと、そこには刃を振り上げる天使の姿があった。

「っ！？（ヤバい、避けられねえ）」

混乱し、七瀬が足を止めた次の瞬間、

「っ！？」

『パンツ！』という枯れた破裂音が響くのと同時に窓ガラスと天使の側頭部が爆ぜ、鮮血を撒き散らして天使が倒れた。

第3話『Welcome to Posthumous World』

校長室（対天使対策本部）

「私はゆり、この死んでたまるか戦線のリーダーよ」

リボンのついたヘアバンドを付けた少女は、そう言って握手を求め
る。

それに応えると、七瀬は神妙な面持ちで、

「相楽だ」

「ガルデモの皆から聞いてるわ。

元ボクサーらしいわね。

さっきも単純な接近戦なら天使を圧倒してたし、頼りにしてるわよ

」

「…………『頼り』って…………天使はもう殺したろ？」

ゆりの言葉を聞き、七瀬は小首を傾げる。

するとゆりは、先程天使を撃ち抜いた物だと思われるライフルを持
ち、

「この世界に死なんて概念はないのよ。

いくら頭を撃ち抜いても、明日になれば何事もなかったかのように現れるわ。

……なんだったら、試してみる？」

からかうような笑顔で銃口を向けられると、七瀬は顔を引き攣らせる。

そんな彼に対して、校長室に集まっていた死んでたまるか戦線のメンバーは声をかけていく。

「天使相手に素手で戦えるなんて、お前すげえよ」

馴れ馴れしく肩を組むと、軽そうな男子は言った。

「俺は日向、一応戦線では一番の古株だから、分からないことがあれば何でも聞いてくれよ」

すると彼に続き、小柄なこれと言った特徴のない男子が、七瀬の前に出た。

「僕は大山、よろしくね相楽くん」

大山に握手を求められ、それに応じていると、続いてがっしりとした体格の男子が、

「松下だ。よろしく」

更に続いてドスを持った柄のわるい男子が前に出る。

「藤巻だ」

「……目付きわりいな」

「あゝ？お互い様だろうが」

そんなやり取りをすると、七瀬と藤巻はしばしの間睨み合う。

二人が揃って目付きが悪いこともあり、他の面子が止めに入れずにいると、仕方なさそうに岩沢が止めに入った。

「まあ、二人とも落ち着きなよ。」

まだ戦線メンバーの自己紹介が途中だろ？」

「チツ……」

悪態をつきながら藤巻が下がると、今度は眼鏡の男子が咳ばらいしながら前に出た。

「参謀の高松です。よろしく。」

「ああ、よろし」Hey! easy do dance!」

七瀬が応えようとした瞬間、バンダナで顔を隠した男子が割り込んだ。

「いや、踊らないけど」

七瀬が明らかに顔を引き攣らせていると、すかさず日向がフォロ―

に入る。

「こいつはTK。」

本名は分からない謎の男だが、まあ頼れる仲間だ。よろしくしてやってくれ」

「ああ、分かった。

……ところで、さっきからそこに立ってる女の子は？」

部屋の隅で壁に寄り掛かっている長髪の女子を指差し、七瀬は尋ねる。

すると、日向が応える前に、その女子はぼそりと声を発した。

「……………椎名だ」

「え？……………あ、ああ、よろしく(……………この集団、変わった奴多いな)」

崩れた笑顔で言うと、七瀬はこの集団に関わったことを多少後悔していた。

そんな中、突然彼の目の前に斧刃の付いた槍ハルバートが突き出された。

七瀬がその柄の先に視線を向けると、それを持っていた男子は、不機嫌そうに口を開く。

「相楽とか言っただな？」

他の奴はどうか知らんが、俺はまだお前を認めていない」

「おい野田、お前なあ」

日向が野田と呼ばれた男子を止めに入るが、

「日向くん、やめときなさいよ。」

野田くんが止めるだけ無駄な相手だって分かってるでしょ？」

ゆりが日向を諭す。

対して日向は、納得出来ない様子でいるが、ゆりはそんなことは気にかけず、七瀬に声をかけた。

「相楽くん。これ使いなさい」

そう言ってゆりが投げ渡したのは、二つのメリケンサックだ。

「槍相手にこれはないだろ」

もちろん七瀬は不満気な様子だが、

「あら？元とはいえボクサーのくせに、自分の拳に自信がないの？」

ゆりは敢えて彼を挑発する。

途端、七瀬はムツとした様子で、メリケンサックを両の拳に装着した。

「上等だ。」

野田とかいったな？

……お望み通りぶっ飛ばしてやる。
表へ出る」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるっ」

七瀬の挑発に野田が応えると、二人は校長室を後にした。

すると、その経緯を見ていた岩沢は、呆れた様子でぼやきを漏らした。

「……二人とも血の気が多いなあ」

一方でゆりは、屈託のない笑顔で、

「退屈してたところだし、丁度いい見世物ね」

「……仲間同士の決闘を見世物にするなよ」

呆れ果てた様子で日向が言うが、ゆりはまったく気にかけない。

「ほら、日向くんも行くわよ？」

新しい仲間の実力を、とくと拝見させてもらいましょう。

あ、岩沢さん、ついでだからガルデモの皆も見物に連れて来てもら

える？」

「……分かった。一応呼んどくよ」

そんなやり取りをしてゆりが校長室を後にすると、他の面子もそれに続いていった。

第一連絡橋

天空に輝く銀月の下、橋の中腹で七瀬と野田は睨み合っていた。

すると、

「さっさーっん！」

「ん？」

突然背後から響いた声に七瀬が振り向くと、そこにはガルデモのメソンの姿があった。

「さっさんって……何勝手にアダ名つけてんだよー！」

言われると、七瀬を呼んだ相手である関根が元気よく手を振って応

える。

「えー、さっさん呼び易くていいじゃん」

「それじゃあ、佐藤や斎藤でもさっさんになっちまうだろ？」

そんなやり取りをすると、七瀬は興が冷めた様子でため息をついた。

すると、今度は岩沢、ひさ子、入江の三人が、

「頑張りなよ、さっさん」

「気合い入れていけよ？」

「頑張つて下さいね」

「だから、さっさん言つな！」

声援に対し、七瀬が声を荒げると、ガルデモのメンバーはクスクスと笑っていた。

第4話 『Embarrassment and adaptation』

ガルデモとの雑談を終えると、七瀬は改めて野田と向き合った。

「……さてと、そろそろ始めるか？」

七瀬が言うと、野田はハルバートを振り上げる。

「上等だ！百回死ねっ！」

咆哮と同時に駆け出し、野田はハルバートを突き出すが、七瀬の優れた動体視力は、完全にそれを捉えていた。

余裕を持って刃を避けると、七瀬はカウンターとして野田の顔面に、左のジャブを打ち込んだ。

「がつ！？」

「ほれほれ、次はストレートで顔面砕くぞ？」

「貴様あー！！」

逆上して野田がハルバートを振り回すが、それでは七瀬に当てることは出来ない。

大振りでフルスイングした途端、七瀬は上体を低くして懐に飛び込み、フックで脇腹を叩いた。

「しがつ！？」

途端、野田は脇腹と口元を抑え、橋の隅に寄り、

「オ、エエエエ」

橋の下の川に吐瀉物を吐き落とした。

それを見ると、日向が気分を害した様子を見せる。

「野田の奴、晩飯をリバーズしやがった……」

「ちょっと野田くん、全然相手になってないわよ」

ゆりは言うが、七瀬はそれを否定する。

「いや、こいつ運動神経は結構凄いぞ。」

ただ、ぶん回してるだけなら、避けやすい」

対して野田は、

「今度こそぶった切ってやる！」

早くも立ち直り、再びハルバートを振り上げた。

すると、七瀬は呆れた様子で振り向く。

「タフだなあ。もう立ち上がったか」

そして、野田の攻撃を躲すのと同時に、今度はその顎に強烈なアッ

パークットを打ち込んだ。

「ぐおっ!?!」

予想外の威力に踏み止まることも出来ず、野田は橋から川へと落下していく。

「白兵戦は我流でやらん方がいいぞ？
無駄な動きが多くなるからな。」

……つて、忠告してももう遅いか」

川を流れていく野田を見ると、七瀬は後頭部を掻きながら言った。

そんなとき、不意に見物していたSSSのメンバーの中からゆりが拍手をしながら七瀬の前に出る。

「やるじゃない」

「一応元プロだからな」

称賛に対して差して興味もない様子で応えたと、彼は小さく欠伸をする。

「……そういえば、お前らどこで寝泊まりしてんだ？」

「普通に寮でしてるわよ。」

安心しなさい、この世界に来た時点で部屋は用意されてるし、普通に生活しているときに天使が襲ってくることはないから」

「……まあ、ベッドで寝れるなら不満はないな」

「順応性があってよろしい。」

日向くん、相楽くんを案内してあげて」

「あいよ」

ゆりの言葉に應えると、日向は七瀬に歩み寄った。

寮に到着し自分の部屋に案内されると、七瀬は脇目も振らずにベッドに寝転がる。

「……ふう」

ふと今夜の出来事を振り返ってみた。

自分は既に死んでいると教えられ、天使と戦い、神への反抗を目的とした集団に加えられた……。

(……いくらなんでも、唐突過ぎだ)

ぼやいてはみるが、それに覚えてくれる相手は何処にもいない。

(……とりあえず、今はゆっくりと休もう)

考えるのをやめて瞼を下ろすと、しばらくして彼は安らかに寝息をたて始めた。

翌日、目を覚ますと、七瀬は寝ぼけ眼で部屋の中を見回した。

(……夢じゃないわけか)

とりあえずベッドから下りると、手早く身支度を済ませ、彼は昨夜戦線のメンバーの集まっていた校長室に向かう。

どうにも登校時間にはまだ少し早いようで、寮の外では生徒の数は疎らだ。

(……戦線の奴らとは違う制服きてるけど、こいつら何なんだ?)

そんなことを考えながら登校風景を眺めていると、七瀬は自分もその生徒達と同じ制服を着ていることを思い出し、

「……そうか、あいつらの方が特別なのか」

ようやく気付いた様子で呟くと、足速に校長室のある教員棟へと歩

き出した。

教員棟、校長室前

扉の前で足を止めると、七瀬はドアノブに手をかける。

その瞬間、

「っ!？」

突如天井が開き、直径1m程のハンマーが、振り子のように落下してきた。

(この高さじゃ屈んでも避けられねえ!?)

……こうなったら)

瞬時に状況を判断すると、彼は咄嗟に腹ばいになり、その数cm上空をハンマーが通過した。

「……せ、セーフ」

そんな呟きを漏らし、七瀬は小さくため息をつく。

「あれ?さっさん何やってるの?」

声に反応して見上げると、そこには関根の姿がある。

「…………今さっき、命を落としかけたところだ」

回答を聞くと、関根は一瞬小首を傾げるが、七瀬のいる場所を見て思い当たる節があるらしく、

「……………そっか、アレか」

「アレ？」

七瀬が小首を傾げると、関根は校長室の扉の前に出た。

「神も仏も天使もなし」

彼女が言うつと、しばらくして天井からカチャリという音が響き、今度はすんなりと扉が開いた。

「畏を解除してもらった為の合言葉があったんだけど……………言われなかった？」

「聞いてねえよ」

大きなため息をつくつと、七瀬はのっそりと立ち上がり、服についた埃を払った。

すると関根は苦笑を深め、二人は校長室に足を踏み入れる。

「あら、相楽くんに関根さん。」

「こんな朝早くからどうしたの？」

「まだ聞いてなかったことがあったから来たんだが……入り口の畏
のことくらい伝えて欲しかったな」

呆れながら七瀬が言つと、ゆりは全く罪悪感のない様子で、

「細かいことは気にしない気にしない。

それで、何を聞きに来たの？」

「この世界のことと、お前らの着てる制服のことに天使のこと、聞
きたいことは山ほどある」

「山ほどは答えられないわね。

めんどくさいし」

「おい」

「ただ、この世界についての説明は必要よねえ。

……つと、その前に、関根さんは何の用があったの？

手早く済むようなら、そつちから終わらせるから」

問い掛けられると、関根は小さく頷き話し始める。

「アンプが一つ壊れちゃったから、新しいのを発注しに来ただけだ
よ」

「分かったわギルドに伝えとく。

……そうだ。ついでだから、この世界の説明がてら、相楽くんに校内を案内してくれる？」

「了解 それじゃついて来て、さっさん」

ゆりの提案を了承し、関根が校長室を出ると、七瀬はそれに続いて行った。

第5話『Explanation』

大食堂

「……つまりだ。」

今までの説明を総合すると、この世界は悲劇的な人生を送った俺達と同年代の人間の魂が、死を受け入れるための場所で、満足したりまともに学校の授業を受けたりしたら成仏してしまうと」

「はいよくできました」

からかうように関根が撫でると、七瀬は小さくため息をつき、

「馬鹿にしてんのか？」

問い掛けられると、関根はおどけた態度で回答する。

「そんなことないって、ただ生前ボクサーだったっていうから、殴られ過ぎて多少脳の機能が多少衰退してるかなあ』」と黙ってさ」

「……お前なあ」

「冗談だよ冗談」

もうノリが悪いなあ。ちょっとテンションを上げようとしただけなのに」

「こちとら死んだばかりでナーバスになってんだよ。」

もうちょっと空気読め」

そんなやり取りをしていると、不意に七瀬の後ろから関根に声がかかった。

「あ、いたいた。

こら、関根」

その声に関根がビクリと肩を震わせたのを見て七瀬が振り向くと、そこには不機嫌そうなひさ子と、その後ろで苦笑する入江と岩沢の姿があった。

「アンプのこと連絡したら直ぐに戻って来たっていったらどうが」

「あ、あはは……まあ色々ありまして」

「ゆりから七瀬の案内をしてもらってるってのは聞いたけど、それならそれで一回戻ってくればいいだろ」

ひさ子に詰め寄られると、関根は顔は徐々に引き攣っていく。

すると七瀬は、多少のフォローをしようと割って入った。

「まあ落ち着け。

関根は俺の案内を優先してくれたわけだし、そう責めないでおいでくれ」

それを聞くと、ひさ子は押し黙るが、

「そうそう さっさんナイスフォロー」

関根が一切の反省を感じとれない声をあげると、途端にひさ子は再び目を吊り上げ、関根の頭を寮の拳で挟み、グリグリと圧迫する。

「ちょっとは反省しろ！」

「いたたたた!？」

そんな二人を放置し、岩沢は七瀬に尋ねる。

「それで、七瀬は何処まで案内してもらったの？」

「何処までって……まだ事務室で俺の奨学金受け取って、食堂で駄弁ってただけだが」

七瀬が答えた途端、ひさ子の怒りは頂点に達する。

「結局、食い物奢らせたただけだろ！」

「ひいーっ!？痛いです、ひさ子先輩!！」

ひさ子が関根を罰しているその状況を気にかけることもなく、入江と岩沢は話を進めていく。

「しおりんはあんな状態で案内出来そうにありませんし、ここから私達が案内しましょうか？」

「……うん、アンプが届かないとセッションも出来ないし、丁度い

い暇つぶしになるしね」

すると、七瀬は小さく頷き、

「それじゃ、よろしく頼む」

二人に言った。

対して入江と岩沢は微笑んで応えた。

学習棟、音楽室

一時間程で校内をあらかじめ案内し終わると、岩沢達はひさ子達の待つ音楽室へと足を運んだ。

「あ、お帰り」

ひさ子に言われると、岩沢と入江は笑顔で応える。

「ただいま」

「ひさ子先輩、ただいま」

そして、岩沢は振り返って七瀬に手招きし、

「ここが私達が練習に使ってる音楽室。

残念ながら、今は練習をみせられないけどね」

「……ふーん」

適当な相槌を打つと、七瀬は窓辺に寄り、そこから見える景色を見下ろす。

「……学校って、こんな場所だったんだな」

そんな呟きを漏らすと彼は振り返って窓に寄り掛かる。

一方でひさ子にこっそりと絞られた様子で寝ていた関根が、ふと思い出した様子で声を上げる。

「あ、そういえば。

さっさん、さっきゆりっぺ先輩が呼んでたよ」

「ん？……そうか、分かった」

「岩沢、入江、ガルデモにも呼び出しがかかっているから、私達も行くよ」

ひさ子に促されると、岩沢と入江は小さく頷き、七瀬に続いて音楽室を後にしようとしているひさ子と関根に続いた。

校長室（対天使作戦本部）

偉そうに校長の机に乗せていた足を下ろすと、ゆりは七瀬達の前に立つ。

「これからあなた達をここに呼んだ理由を説明するけど、その前に相楽くんに渡しておくものがあるわ」

他の戦線の男子が着ているものと同じ制服を取出すと、ゆりはそれを七瀬に渡す。

「これで相楽くんは制服正式に戦線メンバーの仲間入りよ」

「ああ、ありがとう」

七瀬が礼を言うと、ゆりは小さく頷き、天井からスクリーンを下ろして話を続ける。

「あなた達をここに呼んだ理由は他でもないわ。

あなた達には、次の代々のオペレーションを行う為に必要なもの

を、ギルドから調達してきてもらっわ」

「『オペレーションに必要なもの』って……もしかしてアンプのこと?」

「ええ、次のオペレーションでは岩沢さんたちのライブが重要になるからアンプは必要になる。」

ギルドからアンプを運んでくる為の男手として、相楽くんには活躍してもらっわ」

岩沢の問い掛けにゆりが答えると、その言葉を聞いた七瀬は小首を傾げる。

「……それで、そのギルドってのはなんなんだ?」

尋ねられるとゆりは、

「ギルドって言うのは、言うなれば戦線の武器製造よ。」

私達の持っている銃器はそこで作られているし、頼めばアンプみたいな機械も作ってくれるわ。

今回あなた達に課すオペレーションは、そこからアンプと相楽くんの武器を受け取ってくるよ」

「俺の武器?」

「そうよ。流石にメリケンサックだけじゃ頼りないし、あなたにも銃器を装備してもらっわ」

その意見に七瀬が納得した様子を見せると、ゆりは声をあげた。

「今回のオペレーションは、小規模のギルド降下作戦。
決行は本日の放課後よ」

第6話『Pain』

体育館

「せーのっ!」

松下とTKの二人がステージの下に収納されている椅子を引き出すと、ぼつかりと間収納スペースの床には、分かり易い取っ手が取り付けられていた。

「……あれか？」

「ええ、あれよ」

七瀬が取っ手を指差して尋ねると、ゆりは頷いて肯定した。

それを確認すると、七瀬は身を屈めてステージの下に入って行く。

ガルデモもそれに続き、七瀬が取っ手を掴むと、五人は一度顔を見合わせて頷き合う。

「それじゃあ、開けるぞ」

確認すると、七瀬は取っ手を上に引き、床にあった扉を開いた。

すると、

「相楽くん」

不意にゆりに呼ばれ、七瀬が振り向くと、通信機を投げ付けられ、彼はキヤツチする。

「あなた達が戻って来たらまたここを開けるから、それで連絡しなさい」

「ああ、行ってくる」

応えると、七瀬はすでに下に下りていたガルデモに続き、梯子を下りながら扉を閉じた。

ギルド連絡通路B1

「すげえな。こんな洞窟、一体どれだけの時間をかけて作ったんだ？」

地下に広がる巖谷を見ると、七瀬は多少驚いた様子で声をあげる。

「正確には、私達が掘ったわけじゃないんですよ」

入江が言うと、七瀬は小首を傾げた。

すると、関根が入江の言葉を補完する。

「ゆりっぺ先輩達がこの世界に来たときには、もう作られてたんだってさ」

「……なるほど……つまりは俺達よりずっと前にこの世界に来て、同じようなことをしてた奴らがいたってことか」

そんなやり取りをしながら、しばらく歩いていると、ふと七瀬が声をあげた。

「……結構歩くな……ギルドって一体どこら辺にあるんだ？」

「ここよりずっと下だよ」

「ずっとって何階ぐらいだ？」

「……さあ？正確に数えたことなんて無いし」

ひさ子の回答を岩沢が補完すると、七瀬は微妙な表情で、

「……ふーん……ずっと下ねえ」

そんな呟きを漏らしていた。

ギルド連絡通路B7

「ホントに深いな。」

……あとどれくらいなんだ？」

「ここで中腹くらいだから、まだまだ先だよ。」

問い掛けにひさ子が応えると、七瀬は不意に足を止めて振り返る。

すると、それに気付いた岩沢とひさ子が振り向き、

「どづかした？」

岩沢が尋ねると、七瀬は後方をフラフラと歩いている関根と入江を指差した。

「アレはほつといていいのか？」

「……仕方ない。」

少し休むか」

少々呆れた様子で言うと、ひさ子は小さくため息をついていた。

すると、七瀬は苦笑気味の微笑を見せ、ひさ子の言葉を聞いてへたり込んだ関根達に歩み寄っていく。

「おい、二人共大丈夫か？」

「……ハア……ハア……皆、体力ありすぎだよ。」

と言うか、か弱い女の子なんだから、こっちの体力も考えてよ」

関根が言うと、七瀬は後頭部をかきながら、申し訳なさそうに返す。

「悪い、バンドやってる人間って結構体力あると思っただが、ちよっと偏見だったな」

対して関根は、不満げに声をあげた。

「もう、私はちゃんとした女の子なんだから、ひさ子先輩達と一緒にしないでよ」

それを聞いた途端、ひさ子は彼女の両頬をつねる。

「人をまともな女の子じゃないみたいに言うのはこの口か！」

「ひいーっ！？いふあいれす、ひさこせんふあい！？」

二人のそんな掛け合いを見ると、七瀬は楽しげに笑っていた。

すると、ふと岩沢が彼に声をかける。

「ボクシングやってただけあって、さっさんは全然疲れてないね」

「まあな。プロが素人に体力で劣るわけにもいかないしな」

「あの天使をやっつけちゃうくらいだし、相当強かったんだよね？」

関根に問い掛けられると、七瀬は一瞬動揺を見せるが、気付く間もない程に素早く微笑みを作りごまかす。

「……ああ、自分では強かったと思ってるぜ？」

8戦8勝8KO、その年の新人中最強のハードパンチャーなんて言われてた」

「ふーん、でもさ、じゃあ何で酷い人生を送った人しかいない筈のこの世界に来たの？」

「……その8勝目で、対戦相手を殺しちゃったんだよ」

彼の回答を聞くと、関根は思わず七瀬から目を逸らす。

「……あう……その……ごめん」

対して、七瀬は関根の頭を優しく撫で、

「俺も気にしないから、気にすんな。」

……まあ、それだけならただの事故だったんだが、どこぞの評論家がテレビ番組で『あのパンチには殺意が込められていたとしか思えない』なんて口走ってな。

所属してたジムに非難の電話が殺到、嫌がらせや抗議の行列が出来

て、ジムの会長にもう来ないでくれって言われて追い出された。

その後はバイトクビになって借りてた部屋にもいられなくなってな。フラフラと歩いてたら、唐突に硬い物で殴られたから相手を見てみると、ジムに抗議に来てた殺しちまった相手の親だった」

そんな七瀬の生涯を聞くと、ガルデモのメンバーは黙り込んだ。

しばらくの間沈黙が続くと、関根が恐る恐るといった様子で静寂を破る。

「……さっさんはさ、そんなにボクシングが好きだったの？」

「いや、好きというか……それしかなかったって感じだったんだよ。

俺、親から虐待受けて、小さい時から養護施設暮らしでさ。

気付いたら喧嘩ばっかやってて、腕っ節の強さぐらいしか誇れるものがなくて、頼れる人もいなくて……」

苦虫を噛み殺したような表情で言うと、彼は自分の手を眺め、ギョッと拳を握りしめる。

「……だからこそ、神って奴がいるなら、そいつを全力でぶん殴る」

そんな彼の姿を見ると、ガルデモのメンバーの表情は、多少の明るさを取り戻していた。

ギルド最深部

巨大な装置が幾つも立ち並ぶ広大な空間を見ると、七瀬は感嘆の声をあげる。

「……………すげえ」

そうしていると、彼とその周りにいたガルデモに、不意に声がかけられた。

「やっと来たか」

「ん？」

振り向くと、そこには髭面の男の姿があった。

「……………これも、俺らと同年代か？」

「まあ普通は驚くだろうね」

七瀬の言葉にひさ子が言うと、ガルデモのメンバーは苦笑していた。すると、髭面の男はゲラゲラと豪快に笑い

「皆俺を見ると最初に言うからな。段々と馴れてきちまったぜ。」

……それで、新人の戦闘員ってのはお前だな？」

「ああ」

「俺はチャー、ギルドのリーダーだ」

「相楽だ。よろしく」

自己紹介をし合って握手すると、チャーはギルドのメンバーに何かを持って来させる。

「ゆりに頼まれた通りに作ったお前の武器だ」

差し出されたそれを受け取ると、七瀬は小首を傾げる。

渡されたものは、所謂ライフルなのだが、角張ったデザインでバレルが短いのにスコープが取り付けられている。

「これ、ちゃんとした銃なのか？」

「G36K、ドイツ軍でも正式採用されてる銃だ」

「……そうか……ふむ、有り難く使わせてもらう」

「それから、こいつも頼まれてたものだ」

言つと、チャーは七瀬にあるものを投げ渡した。

第7話『Operation tornado(前編)』

体育館

深夜の体育館で、ゆり達はステージ下に収納された椅子を引き出し、その収納スペースに足を踏み入れる。

床に設置されていたレバーを取ってを掴むと、日向がギルドへの連絡通路の入り口を開いた。

「あらよっと!」

すると、しばらくして七瀬が顔を出した。

「……………ふう……………ちょっと荷物を取りに行くだけでこれか」

流石に疲労を隠せない様子で言うと、彼に続き同じように疲れ果てた様子のガルデモのメンバーが出て来る。

それを確認すると、七瀬は岩沢からロープの切れ端を受け取り、

「何人か手を貸してもらえるか?」

戦線の男性メンバーに尋ねる。

対して松下とTKが名乗り出た。

そのロープの先を見下ろすと、そこには台車に詰まれた二つの大きなアンブがあった。

「あれ、七瀬一人で運んで来たのか？」

日向が尋ねると、七瀬は苦笑しながら応える。

「いや、一応はガルデモの皆にも手を貸して貰った……正直、体的にはもう限界だ」

それを聞くと、日向は七瀬を適当に労い、アンプの引き上げに参加していった。

一方でそれに参加していないゆりは、ニコリと微笑みながら、七瀬に問い掛ける。

「それで、用意した相楽くん用の武器はどうだった？」

対して七瀬は、呆れ果てた様子で背負っていたライフルと、チャイムから受けとったそれを見せた。

オープンフィンガーグローブに金属の取り付けられたそれは、所謂手甲だ。

「銃は分かるが、手甲はいくらなんでも酷くないか？」

「だってあなた、銃の扱いに慣れてないでしょ？」

銃器の取り扱いに慣れるまでは、そっちで戦ってもらおうわ」

「また天使と殴り合いかよ……」

そんなぼやきに対し、ゆりは不敵な笑みを浮かべていた。

校長室

戦線メンバーが集まると、窓には暗幕が下ろされ、校長の椅子に座るゆりの後ろにはスクリーンが展開された。

「それじゃあ、役者も揃ったところで、今回の作戦を説明するわ」
ゆりが言つと、一同の間に緊張がはしる。

「名付けて『オペレーション・トルネード』よ！」
発声とほぼ同時に、スクリーンには『Operation tornado』の文字が写し出された。

「……オペレーション・トルネード……嵐か……一体どんな作戦なんだ？」

七瀬が尋ねると、ゆりは力強く拳を握りしめ、

「NPCから、食券を巻き上げる！」

それを聞いた途端、校長室にはしばしの静寂が訪れた。

「……下らねえ」

沈黙を破り七瀬が悪態をつくど、他の面子は彼に注目する。

「銃まで持ち出しといて、やることはカツアゲか？」

見下げた根性だな。

俺は下りさせてもらっぜ？」

彼が背を向けて校長室を去ろうとすると、ゆりは呼び止める。

「待ちなさい。」

何か勘違いしてるみたいだけど、別に銃で脅してカツアゲしようってわけじゃないわよ」

「……じゃあ、巻き上げるってのはどういう意味だよ？」

尋ねられると、ゆりは悪戯な笑みを浮かべ、

「先ずはこれを見て」

彼女の言葉に続き、今回はスクリーンに大食堂の見取り図が展開された。

「ガルデモのメンバーにはここでライブを開いてもらっわ」

大食堂中央の階段の中部が、赤くマーキングされた。

「ガルデモの皆がNPCの観客を盛り上げている間、天使を食堂に近付けないために、戦闘員の皆は足止をして。

そして、盛り上がりが最高潮に達したら……………」

ゆりがもったいぶると、一同は生唾を飲んで神妙な面持ちを見せる。

「一階に設置した数台の巨大扇風機を作動させる」

「…………つまり、言葉通りに食券を『巻き上げる』と」

「そういつこと」

七瀬の言葉にゆりが屈託のない笑顔で応えると、七瀬達は感心した様子でいる。

そして、

「それじゃあ、各自の持ち場を説明するわよ」

「……………スコープで照準を合わすときはセミオートで、ある程度の距離まで接近されたらフルオートで連射と」

他の戦線メンバーから参考程度にアドバイスされたライフルでの戦い方を復唱すると、七瀬は銃の感触を確かめる。

「……………ふむ……………こんなんで本当に大丈夫か？」

そんなぼやきを漏らしていると、不意に大食堂の方からライブの演奏が聞こえてくる。

「ん？……………始まったか……………」

一度大食堂に視線を向けると、七瀬はぼそりと呟き、連絡橋へと向き直った。

すると、

「……………来たか」

連絡橋の向こう側では、月明かりに照らされたきらびやかな銀髪が、夜風に揺引きキラキラと光を反射していた。

「……………まずは、スコープで見てセミオート」

ライフルを構えると、七瀬はスコープを覗き込み、照準に天使の姿を捉える。

(……………化け物って分かってても、女の子を撃つのは気が引けるな………
………だったら)

咄嗟に天使のそのか細い足に照準を合わせ、彼は引き金を引いた。

途端、「パンツ！」という乾いた破裂音と同時に、天使の足に風穴が空き、そこから血が吹き出して、彼女は地に膝を付いた。

しかし、その傷を気に止めることもなく、天使は立ち上がり傷は一瞬で消滅する。

それを見ると、七瀬はライフルをセミオートからフルオートに切り替え、引き金に指を掛けた。

対して天使は、

「……………ガードスキル『ディストーション』」

ぼそりと呟き、その瞬間一瞬の閃光が彼女を包んだ。

「これでどうだー!!」

叫び、七瀬が引き金を引くと、今度は連続した破裂音が続き、ライフルの銃口から次々と弾丸が吐き出されていく。

しかしその弾丸は、どれも天使を捉えることなく、彼女に当たる直前で何かに弾かれたように見当違いな方向に飛んでいった。

「っ!?!?……………そんなのありかよ」

七瀬が驚きを隠せない様子で言うが、天使はお構い無しに歩みを進めていく。

対して七瀬は、意を決した様子でライフルを起き、

「…………結局、頼れるのはコイツだけってことかよ」

ぼやくと手甲を付けた拳でファイティングポーズをとった。

第8話『Operation tornado（後編）』

「……………ガードスキル『ハンドソニック』」

天使が呟いた途端、彼女の袖から刃が現れるのと同時に、七瀬は飛び出した。

対して天使は迎撃に右手の刃を突き出すが、七瀬はそれを左の拳でいなすと、同時に腹部に右ストレートを叩き込む。

当然ながら天使の小柄な身体は弾き飛ばされるが、数m後ろで踏み止まり、瞬時に七瀬に飛び掛かり、今度は左の刃を突き出した。

対して七瀬は、

「……………見た目可憐なくせに、野田以上に丈夫だな」

ぼやきと同時に姿勢を低くして避けると、次の瞬間には左のモーシヨンの小さいアッパーで、天使の顎を打ち上げる。

衝撃で僅かに天使の身体が浮いた途端、右のストレートでとどめを狙うが、彼女はぼそりと呟く。

「ガードスキル『デイレイ』」

同時に、彼女の姿は七瀬の視界から消え、拳は空を切るが、

「なめんなあ!!!」

瞬時に踵を返し、彼は先程まで後ろだった方向に拳を振るう。

刹那、天使は拳の前に現れ、腹部を殴られて弾き飛ばさ、地面を転がった。

「…………同じ轍は踏まねえよ」

流星に多少は驚いた様子の天使に対し言うと、七瀬は再び彼女に接近する。

すると、天使は刃を構え、

「…………『ハンドソニック・バージョン2』」

呟くと、一気に七瀬との距離を縮めた。

(懲りずにまた突いてくる気か?)

少々疑問に思いながらも、七瀬は天使の刃を躲そうとするが、

「っ!?!?」

先程まで完全に避けることが出来ていた天使の刃が頬を霞めると、彼は驚きを隠せない様子で跳び退いて距離をとる。

そして、警戒しながらその刃を見ると、七瀬はその変化に気付いた。

(明らかに、さっきから刃が薄く鋭くなってる…………武器の形や質量の操作が出来るって、そんなのありかよ)

苦虫を噛み殺したような表情を見せると、七瀬は構えるが、天使は既に彼に接近していた。

「くっ!?!」

突き出された右の刃を、辛うじて上体を反らして避けるが、

「……ハンドソニック・バージョン3」

呟きと同時に三又のスピアーのような形に変貌し、長さを延長されたそれは、七瀬の肩を貫いた。

「うぐっ!?!」

短く呻き方膝をつくとき、七瀬は天使の腕を掴み、肩に突き刺さったそれを抜こうとするが、天使は容赦なく左手の刃で七瀬を狙う。

その瞬間、七瀬は咄嗟に手元に落ちていた自分のライフルを拾い上げ、天使の腹部に突き付けて、連射する。

連続で響く破裂音に合わせ、天使の華奢な身体は震動していき弾を撃ちつくした瞬間、七瀬は彼女を蹴り飛ばし、その反動で肩に突き刺ったハンドソニックが引き抜けた。

「ぐあ!?!」

再びはしった肩の痛みには悲鳴を上げると、七瀬は負傷した左の肩を押さえながら立ち上がり天使の様子を伺う。

すると、流石の彼女も腹部に数発の弾丸を受ければ回復が追い付か

ない様子で、まだ腹部からは赤い鮮血が滴っていたが、それでも無表情で天使は立ち上がった。

しかし、

「ん？」

突如『ドン』という花火を打ち上げたような音が響き、七瀬が小首を傾げると、次の瞬間には天使に向かい何かが飛来し、それは衝動と同時に爆発して轟音を響かせた。

「!?!?.....何だ？」

驚きながらも七瀬がその飛んで来た方向に振り向くと、

「おーい！大丈夫か？」

日向を筆頭とし、他の場所の警備に当たっていた面々が、七瀬のもとに駆け付けていた。

その中でも、先程の攻撃に用いられたと思われる四角い筒状の物を持っていた松下は、彼に駆け寄り。

「怪我をしているようだが大丈夫か？」

心配そうに声をかけられると、

「.....あ、ああ.....肩を刺されただけだ」

間の抜けた表情をしながらも応えて、七瀬は今だ黒煙の中から姿を

見せない天使の方に視線を向けた。

「……………今度こそやったか？」

呟いた次の瞬間、黒煙を切り裂き天使は姿を現す。

途端、日向達はそれぞれ銃を構える。

しかし、同時に椎名が声を上げた。

「……………始まったぞ」

それを聞いて一同が振り返ると、そこには大食堂から舞い上がる紙吹雪が見えた。

大食堂、フードコート

「……………まさか、時間稼ぎだけでここまで過酷だとは」

疲れきった様子でため息をつく、七瀬はカウンターで受け取ったカレーを片手で持ち、空いている席を探す。

そうしているよ、

「さっさーん！」

他のガルデモのメンバーとテーブルに付いていた関根が、彼に声をかけた。

「こっち来て一緒に食べよ？」

手招きされると、七は歩み寄り、隣の席に腰掛けてテーブルにカレーを下ろした。

「あ、肩怪我してるじゃん」

「ああ、さっき天使にやられた」

左肩の怪我に気付いた関根が声をあげると、七瀬はさして気にも止めていない様子でいう。

するとひさ子が、

「手当てしなくて大丈夫なの？」

「この世界だと怪我したときに治療せずとも、生きてたときより早く治るんだろ？」

応えると、七瀬は食事を始めた。

対して岩沢が労いの言葉をかける。

「……相当頑張ってたみたいだね。
ご苦労様」

「お前らこそ、頑張って観客盛り上げてたろ？」

別に戦闘要員だけが苦労してるわけじゃないって」

「お、さっさん分かってるじゃん」

関根は茶々を入れると、屈託のない笑顔を見せた。

対して、ひさ子が珍しく彼女の意見に同意した様子で口を開く。

「私達が皆の為に演奏してる間、さっさん達は皆の為に戦ってる。ようはお互いに頑張ってるってことだね」

「おいおい、演奏はともかく、戦いが皆のためって」

七瀬は引き攣った表情で言うが、

「皆の為じゃん。」

天使の足止めってことは、私達を守ってくれてるんだし」

関根が言った。

それを聞くと、七瀬は一瞬間の抜けた表情を浮かべ、自分の拳を見つける。

（……皆のため……誰かを守る……そうか、これからは、『壊す』

ためじゃなくて『守る』ために使うのか)

かつて人を危めたこの拳で、今度は人を守ることが出来る。

それに気付くと、彼は微笑しながら強く拳を握った。

第9話『horror mountain(前編)』

校長室

「相楽くんという強力な仲間が入ったことだし、歓迎会として『ア
レ』をやるわよ」

ゆりが言つと、戦線のメンバー達はそれぞれで声をあげる。

「まさか、『アレ』をやるのか!?!」

「絶望のカーニバル」

松下とTKが声をあげると、七瀬は多少不安げな表情を見せる。

「何なんだ、『アレ』って?」

尋ねられると、ゆりは少し勿体振りながら、

「フフツ 流石の相楽くんも不安なようね。」

今回の作戦は、『オペレーション・ホラーマウンテン』よ!」

作戦名を聞くと、七瀬は親密な面持ちで固唾を呑む。

「……………ホラーマウンテン……………恐怖の山か。」

「一体どんな作戦なんだ?」

「山で植物の採取よ！」

「……ようは山菜取りか」

七瀬が呆れた様子で言うと、ゆりは頷いて応えた。

音楽室

「ほらほら、さっさんの歓迎会なんだから、もっと楽しそうにしよう」

「……そんなこと言われてもな。」

このクソ寒いのに野山で山菜取りなんて、正直勘弁して欲しいんだが」

関根の言葉に対し、七瀬は呆れた様子で応え、

「大体、『ホラー』って何だよ？

ただの山菜取りに、恐怖もクソもないだろ」

そんな風に悪態をつく。

すると、関根は不敵な笑みを浮かべて彼に言う。

「まあ、恐怖の意味は行けば分かるよ」

対して七瀬が訝しむような視線を向けると、関根は悪戯な笑顔を見せている。

一方で、他の面子もクスクスと微笑し、七瀬をからかうような仕種を見せていた。

学園校外（山中）

「それじゃあ、手分けして山菜を取ってくるわよ」

ゆりが言うが、七瀬は訝しむような顔で拳手する。

「ちょっといいか？」

「ん？何、相楽くん？」

「俺、山菜やらキノコやらの知識なんて全くないんだが」

「そんなの私だってないわよ」

「取ってきたのがヤバいもんだつたらどうするんだよ？」

「大丈夫よ。この世界じゃ私は死なないんだから、毒で倒れても、ちゃんと生き返るわ」

そんなやり取りをすると、七瀬は呆れ果てた様子でため息をついた。

「『恐怖』ってのはこういうことかよ。」

……わざわざ危険を冒してそんなもん取らなくても、魚でも釣ったりや食料には困らないだろ？」

問い掛けられると、ゆりは小さくため息をつき、

「まあ、前は釣りをしてたんだけどね。」

少々危険が伴うから、今回はこっちにしたのよ」

「危険？」

「……まあ、いずれ川釣りの方もしようと思うし、その時になれば分かるわよ」

言われると、七瀬はイマイチ納得していない様子でした。

対してゆりは、彼に問い掛ける。

「ところであなた、武器は持ってるの？」

「いや、手甲なら一応あるが、銃は持ってねえな」

そんな回答を聞くと、ゆりは七瀬に一丁の拳銃を渡した。

「……………山菜取りに拳銃か？」

「念のためよ。」

この山にも、完全に危険がないとは言い切れないの

「……………成る程な。」

結局、この世界を知り尽くしてるとって訳じゃないのな

受け取った銃を仕舞うと、七瀬は小さく頷いて生い茂る木々へと視線を向ける。

「とりあえず、どうしたもんかな……………」

そんな呟きを聞くと、日向が七瀬に声をかける。

「山菜やキノコの知識も無くて困り果ててるって顔だな」

「それ意外に困ることもねえだろうよ」

「そんなお前に、経験者としてアドバイスしてやろう」

得意げに言つと、日向は徐に近くの木の根元に生えたキノコを取り、それを七瀬に見せる。

「このキノコは食えるから、同じものだけをとれば、失敗はない筈だぜ？」

「……それ、本当に食えるのか？」

疑うような顔で言われると、日向は笑顔を引き攣らせ、

「何だよ、疑つてんのか？」

七瀬の目の前で、それをかじって見せる。

「ほらな？大丈夫だって」

そう言つて微笑んだ次の瞬間、日向の腹部からギョルギョルと深いな音が響く。

「……おい、日向」

内股で腹を押さえて声にならない悲鳴をあげる日向を見ると、七瀬は呆れ果てた様子を見せる。

「思いつ切り当たってるじゃねえか」

日向とそんなやり取りをして、七瀬が大きくため息をついていると、

「やっさーん！こっちで一緒にやる？」

少し離れた場所にいた関根が声をかけると、七瀬はすぐに応える。

「おう、分かった」

関根に駆け寄ると、周りにいた他のガルデモのメンバーも、七瀬に声をかけた。

「前にも行ったことあるし、少しなら分かるから、食べれそうなもの見つけたらあたし達に声かけなよ?」

「変な物食べて、日向みたいにお腹壊さないようにね」

「一緒に頑張りましょうね」

ひさ子、岩沢、入江の順で言われると、七瀬は多少は安心した様子で彼女達に同行した。

第10話『horror mountain(後編)』

「このキノコって食べられるんだっけ？」

「えーと……確か食べれるのだったと思うよ」

入江が答えると、関根は拾い上げたキノコを袋に入れる。

「ニユフフ 今頃さっさんは、困り果ててるかな？」

嫌らしく笑みを浮かべると、関根は七瀬の向かった方向を向く。

すると、丁度彼女達の方に駆け寄ってくる七瀬が視界に入った。

「あ、さっさん。」

何かとれた？」

尋ねられると、七瀬は持っていた袋から何かを取り出し、

「……俺も驚いたんだが……バジルとマッシュルームだ」

「……既に日本のものでもないね」

引き變った顔で関根が言うと、七瀬も微妙な表情を見せていた。

そんなやり取りをしていると、不意に岩沢とひさ子が七瀬を呼んだ。

「さっさん、ちょっと来て」

「あんななら、あれ取れないかな？」

言うと、二人は崖の下を指差す。

対して、七瀬が崖の下を覗き込んで見ると、

「……………あれって、あの鳥の巣のことか？」

そこには、足元から1m程下に作られた鳥の巣に卵が入ったものがあった。

「取れないこともないけど、有精卵はオススメしないぞ」

「え？どうして？」

ひさ子が問い掛けると、七瀬は多少抵抗のある様子で、その質問に答えた。

「無精卵と違って有精卵の中では黄身はヒヨコに変わっていつてるわけだ。

だから、運が悪いと卵を割った途端に皮膚が出来かけの赤いヒヨコがデロツと」

彼の話聞いた途端、ガルデモのメンバーはそれを想像してしまったらしく口元を抑える。

「……………やめとこっつ」

「……賛成」

「そうですね。山菜とキノコだけでやめときましようか」

ひさ子の言葉に岩沢と入江が同意すると、彼女達は崖から離れようとすが、

「……どうにかして、中身を見ずに黄身かヒヨコか確認出来ないかな？」

関根が名残惜しそうに鳥の巣を覗き込む。

すると、他の面子と同じく崖を離れようとしていた七瀬は、呆れながら彼女に言う。

「置いてくぞ？」

そんな時、不意に関根の背後の草村から、ガサガサと音が響く。

「ん？誰かいるのか？」

七瀬が問い掛けると、その草村から黒い巨体が飛び出した。

それを見た途端、一同は一斉にその名前を口にした。

『熊あ！？』

声があがった次の瞬間、それは関根に向かい歩みを進める。

それを見ると、関根は怯えきった様子で尻餅をついた。

途端、七瀬は懐から手甲を取り出し、装着して走り出す。

「関根っ!?!」

熊と関根の間に割って入ると、七瀬は拳を構える。

それに反応して熊が駆け出そうとすると、その瞬間に七瀬は熊の鼻に右ストレートを叩き込む。

グシャリという不快な音と同時に、七瀬の手には嫌な肉を潰し骨を砕く嫌な感触が伝わった。

当然ながら熊は悲鳴を上げ、立ち上がって鼻を押さえるような仕種を見せる。

「これでもくらえっ!!」

熊が怯んだ瞬間、七瀬はゆりから借りた拳銃を取り出し、熊の頭部を連続して射撃した。

そして、熊はゆっくりと前のめりに倒れる。

「……………ふう」

倒れた熊が動きを止めたことを確認すると、七瀬は大きなため息をついて肩を落とす。

しかし、次の瞬間、

「「!?」」

熊の体重も加わったことにより、七瀬と関根がいる辺りの地面が、一気に崩れたのだ。

「ひっ!?!」

「掴まれ!」

尻餅をついていた関根が咄嗟に対応できず、崖から落ちそうになると、七瀬手を差し延べて彼女の手を掴むが、

(……ダメだ、足場が悪くて力がはいらねえ。

……こうなったら)

関根と共に落下し始めると、七瀬は咄嗟に彼女の身体を抱き寄せた。

グチャリと、肉が肉を潰す音が響いた。

「「あ!?!」」

弾かれたようにアスファルトに倒れ込むと、ジャージ姿の男は鼻血

を吹き出しながら、焦点のあっていない目で空を見上げる。

対してその男を殴った人物……今より少し幼い容姿の七瀬は、少し腫れた頬を撫でる。

「……………いつてえ」

そんなぼやきを漏らした次の瞬間には後方で何かが駆け、不意に足を止めた。

「ん？」

振り返って見ると、そこには肩で息をしながら七瀬達を見る初老の男性の姿があった。

(……………まずいな、見られちゃった。

もし通報なんてされて警察の世話になったら、完全に退学だぞ)

そんなことを考えながら、七瀬がどう言い訳しようか思考を巡らせていると、

「……………す、素晴らしい」

「……………は？」

突然の言葉に、七瀬は間の抜けた様子でいた。

先程の騒動から数分後、七瀬は初老の男性に連れられ、ボクシングのジムを訪れていた。

「…………ボクシング？…………俺が？」

訝しげな表情を浮かべる七瀬に対し、男性はうんうんと頷いて応える。

「君がさっき喧嘩したのは、一応はプロのライセンスを持つボクサーだ。」

それを何の格闘技の経験も無しに倒すなんて、まさに天才だよ！」

「え、あ…いや…………腕っ節が強いのだが、唯一の長所ですから」

「ボクシング界じゃ、そういう人間が成功するのは珍しい話じゃない。」

君の拳は、世界を狙えるよ！！」

言われると、七瀬は戸惑いを隠せない様子を見せていた。

…………当然だろう。

親もおらず、誰かに甘えることもできなかった彼は、物心ついた時には既に喧嘩の毎日だった。

相手が集団であろうと個人であろうと、降り懸かる火の粉には拳で対応する。

口下手な彼にはそれしかなかった。

しかし、それをする度に周囲の大人の目は侮蔑の色を強め、それしかなかった彼を讃える人間など、まずいなかったのだ。

(……人殴って褒められるなんて、初めてだ。

……ボクシング……か)

ギョツと拳を握ると、七瀬は何かを決意した様子で、自分の拳を見つめていた。

そんな彼が、ボクシングを始めみると、ことは予想以上に順調に運んだ。

ライセンスには一度で合格し、プロになってからは負けることもKOを逃すことも一度もない。

一勝毎に巻き起こる喝采は、彼の才能を順調に伸ばしていった。

………そんな時だ。

その事件が起きたのは、

いつものように強烈なパンチで相手をKOすると、その相手は二度と立ち上がることはなかった。

『ボクシングではたまにあることだ』 『今回は相手の運が悪かった』
そう言つてトレーナーは彼に気にしないよう諭した。

七瀬もなるべく気にかけないよう心掛け、翌日もいつものようにジムを訪れる。

しかし、そこには窓ガラスは割られ、外装に人殺しなどと落書きされた、変わり果てたジムめ姿があった。

「……………あの、これって一体」

ジムの前で立ち尽くしていたトレーナーの男性に、七瀬は恐る恐る声をかける。

すると、

「……………相楽くん、悪いんだが、もうジムには来ないでくれ」

「え？それってどういづ……………」

「……………すまない」

ただそれだけ言つて、男性は背を向ける。

(……………何でだよ……………家族がいなくて、学校にも居場所なんてなくて、ようやく……………ようやく見つけた居場所だったのに)

ギュツと握りしめた手から、血が滴る。

「だったら俺は……俺は、何処にいればいいんだよ!!」

怒号をあげると、七瀬は力任せに拳を振り、残っていた一枚の窓ガラスを叩き割った。

「はっ!?!」

目覚めると、七瀬の視界に入ったのは、見慣れない白い天井だ。

「あ、やっと起きた」

声をあげると、保健室のベッドで横になっていた七瀬の顔を関根が覗き込む。

すると、彼女に続いて他のガルデモのメンバーも、彼の顔を覗き込んだ。

「もう、熊にパンチしたり、自分の身体をクッション代わりに使って私を助けようとしたり、目茶苦茶過ぎだよ」

「あ……すまん、いきなりだったもんで動揺して」

呆れた様子の関根に対し、七瀬は多少間の抜けた表情で応えるが、

「でもまあ……その…ありがとね、助けてくれて」

照れ臭そうに関根が言った。

すると、彼女に続き他のメンバーも、

「まあ、さっさんがいなかったら、私達熊にやられてただらうしね」

「確かにね。」

………つてことは、私達もさっさんに守られたわけだ」

「ありがとございます、相楽さん」

岩沢、ひさ子、入江に言われると、七瀬はしばらくほづけた後、ハッとして我に返る。

対して関根が、いつものような軽いテンションで言った。

「これからも私達のこと、ちゃんと守ってよ?」

それを聞くと、七瀬は自分の拳に視線を向ける。

（『守る』か………ここなら………ここならもしかして、俺の居場所も）

彼がそんなことを考えていると、いつものようにひさ子が関根の頭

をぐりぐりと両手の拳で挟む。

「調子に乗らない」

「いたたたたっ！？痛いです、ひさ子先輩！？」

それを見ると、七瀬はクスクスと優しげに微笑していた。

第11話『Suite prize（前編）』

校長室

「……………校内レクリエーション？」

「この学園では年に二度程、レクリエーションとして任意で参加できるイベントを開催するのよ」

七瀬の疑問の声に答えると、ゆりは不敵な笑みを浮かべる。

「このイベントではそれぞれ、ドッジボール、卓球、ソフトボールの三種目でトーナメントの大会を開くのよ。」

各種目の優勝者達には、賞品が贈呈されるわ」

「……………賞品？」

「そう、それは購買で伝説の賞品とされているあの名品。

その名もハーモニーロールよ！」

「……………帰っていいか？」

問い掛けられると、ゆりは一度咳ばらいした。

「コホン……………まあ、待ちなさい。」

別に私が食べたいからあなた達を出場させる訳じゃないのよ?」

「お前の私欲意外見えないが」

「ここで私達が優勝することによって、少しでも天使の動揺を誘うのよ」

「そうか、勝手にやってくれ」

言いつつ、七瀬は校長室を後にした。

音楽室

「ねえねえ、さっさん。

ちょっとお願いがあるんだけど」

「断る」

関根の言葉に対して間髪入れずに拒否で答えると、七瀬はプイッと

顔を逸らした。

「俺はな。この世界に来て戦線に入隊してからの数日で、一つだけ理解した。」

……お前の話を聞いてやっていると、ろくなことがない」

言われると、関根は声を荒げる。

「ちょっと、それはいくらなんでも酷くない!？」

対して七瀬は、さして気にかける様子もなく、

「実際にこの前は崖から落ちたじゃねえか。」

それに、どうせそのお願いってやつも、例のロールケーキ絡みだろ？」

問い掛けると、彼女は意外そうな表情を見せる。

「景品のこと知ってたんだ」

「ゆりから聞いた。」

残念ながら、俺は女共と違って甘いものがそれ程好きな訳じゃない。だからそれを取っても俺になんの得もない」

「そう硬いこと言わずに、頼みますぞ旦那」

「いつの時代の下っ端だ」

二人がそんなやり取りをしていると、ひさ子と入江が仄かに頬を赤らめながら、彼に言った。

「そ、その……さっさん」

「私達もハーモニーロールのことで、相楽さんに協力して欲しいんですけど」

すると、七瀬は呆れ果てた様子でため息をついた。

「……どうして女ってのは、こつも菓子に目がないんだかな」

そんなぼやきを聞くと、関根達は苦笑していた。

しかし、三人とは对象的に岩沢は至って冷静に作曲活動に勤しんでいる。

「岩沢はケーキとかに興味ないのか？」

七瀬が尋ねると、彼女はのっそりと反応した。

「ん？ケーキ？」

「……まあ好みは人それぞれなんじゃない？」

『……………お…音楽キチ』

他の女子との明らかな温度差を見ると、七瀬、関根、入江、ひさ子の心の声は、見事に重なり合っていた。

「ドッジボール？」

「そうそう、プロボクサーだったさっさんなら、ボールなんて全然遅いでしょ？」

関根が言うと、七瀬は頷き、

「まあ確かに素人の球ならほぼ確実に取れるだろうが、俺一人でどうにかなる競技でもないだろ？」

呆れた様子で言った。

対して関根は、心配ないと言いたげな態度で応える。

「大丈夫だよ。ひさ子先輩もいるんだし」

「そりゃあ、ひさ子だって運動神経はいいが………ん？まてよ。

そもそもその競技って、参加人数は何人なんだ？」

「七人だつてさ」

「ガルデモと俺合わせて五人、既に規定の人数に足りてねえじゃねえか」

そんな七瀬の意見に対して、関根は動揺する様子も見せない。

「それだったら全然平気」

言って、彼女がドアを開くと、小悪魔をモチーフとしたらしき珍妙な改造制服の小柄な少女が倒れ込んで来た。

「……何だコイツ？」

珍獣でも見たかのような表情で七瀬が言うと、

「私、ユイっていいいます！」

この世界に来たときから、岩沢さんのファンやってますっ!!」

素早く立ち上がって敬礼すると、その少女ユイは声をあげる。

(……また、おかしな奴が出て来やがったな)

七瀬がそんなことを考えていると、ユイに続き、同じく小柄だが無表情な少女が入室した。

「……昨日発注されたギターとベースの件で連絡をしに来たのです
が」

室内の状況を気にかけることもなく、少女はガルデモのメンバーに言う。

すると、関根が彼女を示しながら、

「ほら、これで全員そろった」

イマイチ事情の飲み込めておらず小首を傾げる少女を無視し、関根は胸を張ってそう口にした。

第12話『Suite prize（後編）』

体育館（ドッジボール大会会場）

「うおーりゃー!」

叫ぶと、日向が全力で投球し、それは相手コートの中に一人残っていたNPCに当たり、ボールは弾かれてコートの外に出た。

途端、審判として立っていた教師のNPCはホイッスルの音を響かせる。

「よっしゃああ!」

歓声をあげると、日向は振り返ってチームメイトと向き合う。

彼がチームを組んでいたのは、松下、大山、高松、藤巻、TK、の主要戦闘員の五人と、余り目立たない戦線メンバーが一人だ。

「ついに準決勝まで来たな」

松下が言うと、他の面子は頷く。

「次の相手はどんなやつらだ？」

藤巻が言うと、彼等に敗退したチームと入れ代わりに、次の相手チームがコートに入った。

その面子を見ると、日向達は顔を引き攣らせる。

「あ、相手は先輩達じゃん」

相手チームで最初に声をあげたのは関根だ。

彼女の周囲には、七瀬、入江、岩沢、ひさ子、ユイ、遊佐の六人の姿があつた。

「あつちの方は、かなり楽な試合だったんだろうなあ」

日向が言うと、他の面子も相手チームを羨ましげに見つめる。

「戦力になりそうなのは相楽にひさ子、それと岩沢くらいだな。

あれで今まで勝ってこれているのは、ある意味奇跡だ」

「確かに、今回は戦力になりそうな三人に警戒しておけば、難無く勝利できそうですね」

松下と高松が言うと、他の面子も同意していた。

試合が始まると、日向は速攻でボールを取り、

「まずは楽そうな相手から！」

そう言っつて、ある程度力を抜いた投球で、入江を狙う。

しかし、それが当たる前に七瀬が割って入った。

「うっしー！」

難無くキャッチすると、瞬時に一番近い位置にいた大山へとボールは投げ返された。

「うわあ！？」

反応出来ずにいる大山にヒットすると、ボールは弾かれて外野にいたひさ子にキャッチされた。

途端にひさ子は一番近くにいた男子生徒モブキャラの足にボールを当てる。

「なっ！？いきなり2人アウト？」

日向が驚きを隠せない様子で言うと、高松が冷静に分析しながら、

「成る程、相楽くんの優れた動体視力を最大限活用した攻撃で、相手の攻撃に対してのカウンターを狙う……意外に侮れませんね」

言っつて眼鏡を押し上げる。

そうこうしている内にも、最初から外野にいた松下とTKが、アウ

トになった2人と入れ代わりにコートに戻り、試合が再開される。

「うっし!!今度は油断しねえ!」

威勢良く声をあげると、日向は再び投球の体勢に入り、今度は七瀬から一番離れた場所にいた遊佐を狙い、全力でボールを投げる。

しかし、それも七瀬は難無く受け止めた。

「あんまりボクサー舐めんな!」

叫ぶと、七瀬は瞬時に藤巻を狙い投球する。

「ぬお!?!」

「……あの距離を一瞬で……そんなのありかよ」

対応しきれずに藤巻がボールを弾いてしまうと、日向は間の抜けた表情を浮かべていた。

試合開始から10分程すると、日向チームは最後の一人もアウトとなり、準決勝での敗退となった。

「ほら見る、やっぱりこのメンバーで優勝狙えるじゃん」

「お前は何もしてないけどな」

胸を張る関根に対し、七瀬は呆れた様子で言う。

すると、ひさ子も同意し、

「確かに、言い出しっぺの癖に、あたしとさっさんに頼りすぎだね。

取り分少なくするからな」

「ちょ!?!それは酷くない!?!」

「働きに見合った報酬だろうが」

関根とひさ子がそんな口論をしていると、七瀬がふと何かに気付く。

「ん?」

次の瞬間、彼らの眼前を超高速のボールが通過し、壁に減り込んだ。

「……………何、今の」

「ボールだな」

七瀬が関根の言葉に答え、チームメイト達がその飛来した方向を見ると、そこにはコートに立つ天使と、彼女と相對するゆり、椎名、チャーの三人の姿があった。

しばらくしてゆり達が敗退すると、七瀬達は入れ代わりにコートに入る。

「言つとくけど、あんなボール当たったら俺でも死ぬからな。お前らちゃんと避けるよ」

七瀬が言つと、彼と遊佐以外の内野、関根、入江、ユイの三人は、先程の兵器並の球威を思い出し、緊張した面持ちでいる。

(……これは、優勝は狙えないか)

そんなことを考えて、七瀬が天使と向き合つと、試合開始のホイッスルは響いた。

先攻は七瀬チーム。

七瀬はボールを持つと、迷わずに奏を狙う。

(流石の天使も足に当てれば……)

淡い期待を持ち、七瀬がボールを投げるが、天使はさした動揺も見せずに片手でキャッチした。

「な!？」

多少驚いた様子を見せると、七瀬は声をあげる。

「逃げる!!」

それを聞くと、内野の面々は散り散りになるが、

「ひい!?!」

天使の目はまず関根を捉え、彼女に向かい剛速球が放たれる。

「関根っ!?!」

咄嗟に駆け寄ると、七瀬は彼女を抱えて跳んで、球を回避する。

「……せ……セーフ」

見事に声を重ねると、二人は大きくため息をついた。

「……あんな殺人魔球投げてくるうえに、こっちがボール投げてても片手でキャッチって、反則じゃね?」

「……だな。」

あんな風に片手でキャッチされたら……『片手』

口にすると、七瀬は何かを思い付いた様子で、

「お前ら、ただ落ちてくるボールだったら取れるか?」

尋ねられると、内野陣は少し考えた後に頷く。

「よし……喜べ、ひよっとしたら勝てるかもしれねえぞ」

言われると彼女達は小首を傾げるが、その間にも外野からの山なりの軌道を描く投球で、ボールは再び天使の手に戻る。

すると七瀬は、躊躇せずにその前に立った。

「さっさん、アレ取れるの？」

関根に尋ねられると、七瀬はただ天使だけを見据えて、

「取れるわけではないが……まあ見てろ」

答えて、戦闘時のように拳を構えた。

そして、天使がボールを投げた瞬間、

「うおおおー!!」

雄叫び同時に、七瀬はモーシヨンの小さいショートアップで、ボールを打ち上げた。

それを見ると、関根達は自然に落下を始めるボールを見て、その落下予測地点へと集まる。

「よっどー!」

何とかキャッチすると、関根は直ぐに七瀬に駆け寄った。

「もう、打ち上げるなら打ち上げるって言ってよ」

「バレたらまずいだろうよ」

頬を膨らませて拗ねる関根からボールを受け取ると、七瀬は神妙な面持ちで天使の方を見る。

「今度はこっちの番だ！」

威勢良く声をあげると、七瀬はボールを振り上げ、全力で天使に投げつけた。

対して天使は、躊躇なく片手で受けようとするが、

「っ!？」

ボールは弾かれ、床に落下した。

「流石にバックスピんかけた球は、片手じゃキャッチできないだろう」

得意げに言うと、七瀬は不敵な笑みを浮かべていた。

音楽室

無事に優勝し、賞品のロールケーキを受け取ると、切り分けられたそれは、チームメート全員に配られる。

「はづう〜」

ふんわりとしたスポンジに、爽やかな甘さのクリーム……まさに天国」

「命懸けで取る程の物でもない気がするがな」

至福の表情の関根に対し、七瀬は言う。

すると関根は、

「皆喜んでるんだから、そういうこと言わないの」

言っつて、呆れた様子を見せる。

それを聞くと、七瀬は笑顔でロールケーキを食す面子を見て、多少表情を緩める。

（……………自分の頑張りで、誰かを幸せにできる……か。

……………案外悪くないかもな）

第13話『Departure（前編）』

この世界に来てから、もうどれ程の月日が経ったのだろうか？

ふとそんな事を考えながら、七瀬は銃器を手に夜の校舎内を徘徊する。

そうしていると、

「ん？」

不意に音楽室から僅かにベースの音が耳に入り、彼は足を止めた。

「…………ガルデモの奴ら、まだ練習してるのか？」

…………いや、ベースの音だけだな…ということは「

呟くと、七瀬は音楽室のドアを開いた。

すると、

「っ！？」

一人ベースを弾いていた関根が、驚きを隠せない様子で指を止め、七瀬を見る。

「……………はぁ……………何ださっさんが「

気の抜けた様子で尻餅をつく、彼女は小さくため息をついた。

「『何だ』じゃねえよ。」

こんな時間に一人で練習しやがって、危ないだろうが」

「いや、だつてさ。」

私、学園祭でベースやってただけだし、ガルデモに入ったのも一番後だし、こつやって頑張らないと、皆についていけないからさ」

後頭部を掻きながら、苦笑混じりに漏らすと、関根は枯れた笑いを浮かべる。

すると、七瀬はばつの悪い様子で顔を逸らした。

「いや、まあ……頑張ってるのに文句はないけどよ……深夜に校舎入っていると、校則違反で天使がくるし、女の子一人でいさせるわけにはいかないだろ？」

言うと、七瀬はポンと彼女の頭に手を乗せた。

「今度からは、残って練習する時は俺を呼んどけ。」

お前一人くらい、守ってやるよ」

恥じらうように顔を逸らしながら言うと、関根も仄かに頬を赤らめて顔を逸らす。

そうしていると、二人の間にしばしの間沈黙が走った。

……言葉を交わしたくても、何を言っているかわからない。そんなむず痒い空気に耐え切れず、七瀬は口を開く。

「と、とりあえず、寮まで送つといてやるから、今日はこのくらいにして帰つとけよ」

「う、うん……」

頷いて応えると、関根は七瀬の後に続き、音楽室を後にした。

「あ、相楽くん。」

「丁度いいところに来たわね」

七瀬と関根がグラウンドから少し階段を上がったところにある道を通り過ぎようとしたとき、植え込みから何かを覗き込んでいたゆりが、声をかける。

それを聞いて二人が足を止めると、ゆりの隣に立っていた日向が、

「見てみるよ」

グラウンドを指差して言う。

すると、七瀬と関根は植え込みの上からグラウンドを覗き込んだ。

「「……………天使？」」

そこに立つ銀髪の少女の姿を見ると、二人は思わず呟く。

そして、七瀬が天使の足元に倒れる。「それ」に気がつく。

「あれ？何か倒れてんぞ。」

暗くてよく見えねえけど、血流してるな」

「さっきこの世界に来た人よ」

ゆりが応えると、七瀬達は哀れむような視線をグラウンドに倒れる男子生徒に向けた。

「早速やられたのかよ……………」

「うっわあゝ、悲惨だね」

そんな七瀬に対し、ゆりは肩を叩いて振り向かせる。

「そこで、あれを相楽くんに回収して来て欲しいのよ」

「俺かよ。」

つつか、天使が何処か行くまで待てばいいだろ？」

「それは無理よ。あのバカが私達がここから狙ってたってばらしちやっただもの」

「何処までも足を引つ張る奴だな」

面倒そうに言うと、七瀬は銃を関根に渡す。

「こんなことで銃壊されちゃ、たまんねえからな。持っといてくれ。」

ゆり、日向、関根のこと頼んだぞ」

言い残すと、七瀬は手甲の装備だけで階段を下りて行った。

「？」

ふと階段を下りてくる足音に気付くと、天使はその人物、七瀬を見上げた。

すると七瀬は、拳を構えながらジリジリと距離を詰め始める。

「……この人を拾いに来たの？」

尋ねられると、七瀬は一瞬間の抜けた表情を浮かべるが、直ぐに表情を引き締め、

「……だったらどうするんだ？」

警戒しながら尋ね返した。

対して天使は、無表情のまま既に展開していたハンドソニックを解除し、さして興味もない様子でいる。

「……そう」

それだけ言って背を向けると、彼女は歩き出してしまった。

七瀬はそれを見ると、再び間の抜けた表情を浮かべる。

「……おい」

彼が思わず呼び止めると、天使は振り返って小首を傾げる。

「……まだ何か用？」

「あ、いや……その……いつもみたいに、それで切り付けてきたりしないのか？」

「……どうして？」

「いや、どうしてって……いつもやってるじゃねえか」

「……いつもはあなた達から仕掛けて来てるじゃない？」

「……それもそうか……って、お前いつも自衛の為に戦って

たのか？」

「……………気付かなかった？」

「だったら、そこに倒れてる奴は何だよ？」

「まだ武器も持ってないし、あんたを襲った訳でもないだろ？」

「……………この世界のことを説明したら、『死んでるから死なないんだ』だったら、それを証明してくれ』って言われたから刺したのだけど……………ダメだったかしら？」

そんな天然丸出しの回答を聞くと七瀬は、

(……………て、天然だ)

そんなことを考えながら、しばらくの間放心状態でいた。

第14話『Departure（後編）』

音楽室

昼間の音楽室で、七瀬はガルデモの奏でる曲を聴きながら、有意義な一時を過ごしていた。

すると、

「ん？」

不意にドアが開けられ、七瀬が振り向くと、ワントempo遅れて演奏が止まる。

すると、ドアを開けた人物、遊佐が彼らの反応をさして気に止める様子もなく口を開いた。

「……………相楽さん、岩沢さん、ゆりっぺさんからの呼び出しです」

それを聞くと、二人は顔を見合わせ、

「何でまた俺と岩沢を？」

七瀬が尋ねると、遊佐は淡々と応える。

「……………作戦会議で、戦闘員は全員集合、ガルデモのリーダーである岩沢さんも参加するようにとのことですよ」

言われると、七瀬は納得した様子で頷く。

「そうか、分かった。」

岩沢、行くぞ」

「……………うん。」

皆、直ぐに終わらせてくるから、続きは後でやるっ?」

七瀬に比べると、岩沢はガルデモのメンバーに向き直る。

対して彼女達は、頷いて了承していた。

校長室

戦線の主要メンバーが集まる校長室で、不意に扉がノックされる。

「神も仏も天使もなし」

二、三秒して七瀬の声が響くと、ゆりが畏解除のスイッチを押し、天井から「カタツ」という音が響く。

すると、扉を開いて七瀬と岩沢が入室した。

「さてと、これで全員揃ったわね」

ゆりが言うと、七瀬達はそれぞれ、七瀬は壁に寄り掛かり、岩沢はテーブルに腰掛ける。

それを確認すると、ゆりは彼らに言った。

「今日集まって貰ったのは他でもないわ。

皆には、『死んでたまるか戦線』に代わる、新しい戦線名を考えてもらおう」

「……………は？」

七瀬が訝しむような表情で言うと、ゆりは胸を張って続ける。

「私達『死んでたまるか戦線』は、つい先日『生きた心地がしない戦線』に改名したものの、明らかなネタだったため再び『死んでたまるか戦線』に戻ってしまったわ。

ここは戦線メンバーの指揮をあげる為にも、个性的かつネタにはしり過ぎない新たな戦線名を考えるべきよ」

ゆりの発言に対して、一部の面子は呆れた様子を見せていた。

そんな時、不意に扉の方から、畏の作動音とガラスの割れる音、さらには男性の悲鳴が響く。

すると、一同の間には一時的に沈黙がはしり、彼らを代表して七瀬が様子を見に行く。

扉を開けて壊れた窓から下を覗き込むと、七瀬は声をあげた。

「……………あれは……………昨日の奴だな」

「そーだな、じゃあこれはどうだ？

“死ぬのはお前だ戦線”」

藤巻が自信作と言いたげな顔で言うと、ゆりはすかさず却下する。

「私が殺されるみたいじゃない」

「いやあ、勿論相手はあの女だ」

藤巻が補完すると、ゆりは彼を睨みつけ、

「じゃあこつち見なさいよ。」

……死ぬのはお前だ戦線」

「うゝ！？確かに俺が殺されそうだ」

藤巻が引き下がると、ゆりは小さくため息をつく。

「ふう……他には？何か案はないの？」

偉そうに机の上で足を組んで言われると、日向が口を開いた。

「これ格好良くねえ？“走馬灯戦線”！」

「それ死ぬ寸前じゃない」

「じゃあこれでどうだ？“決死隊戦線”」

日向に続き松下が言う。

するとゆりは、呆れ果てた様子で、

「死ぬのを覚悟してるじゃない」

ツッコミを入れる。

続いて今度は岩沢が案をだすが、

「“絶対絶命戦線”」

「絶対絶命じゃない！」

すると七瀬が、

「道連れ戦線」

「やられること前提にしてるじゃない」

「じゃあ“無敵艦隊”」

「今度は戦線じゃなくなってる」

ついに大山がボケ出した途端、事態は悪化の一途を辿る。

「“玉碎戦隊”！」

「殴るわよ」

「“ライト兄弟”！」

「大喜利か！」

藤巻に続き日向の二度目の発言を効いた途端、彼の顔面にゆりの手刀がはしった。

「んもう、最後は戦線なのよ。これは譲れないわ。

あたし達はこの戦場の第一線にいるのよ？

もっとマシな案はないの？」

そんな時、大山が何かに気付いた様子で声をあげる。

「ねえ、その人もう起きてるんじゃない？」

彼が示した先には、ソファで横になる先日天使に刺されていた少年の姿があった。

「え？ああ、気がついた？」

そうだ、コイツにも考えさせてあったのよ。

時間はたっぷりあったわ、聞かせてもらいましょうか？」

ゆりが歩み寄ると、少年は訝し気な表情を浮かべていた。

「何を？」

少年が不愉快そうに尋ねるとゆりは、

「死んでたまるか戦線に代わる、新しい部隊名よ」

「勝手にやってる戦線」

そんな返答が帰ってくると、藤巻が反応する。

「ほお、ゆりっぺに刃向かうとはいい度胸じゃねえか」

「勝手にやってるって言うてんだよ！」

怒鳴りながら立ち上がると、少年は戦線メンバーを睨みつけた。

「何だと？」

「何なんだよお前らは！」

俺を巻き込むなよ！」

俺はとつと消えるんだ！」

「消えたい？今ここに存在しているのにですか？」

音無の言葉を聞くと、高松が尋ねる。

「ああそうだよ！」

「その説明はしたわ」

「抗いもせず消されることを望むと？」

「ああ」

「……抗いもせずミジンコになると？」

「ああ…あ？」

「ミジンコ？」

予想外の名称に少年が間の抜けた表現を浮かべていると、

「は、魂が人間だけに宿るもんとでも思ってたのかよテムエ？」

「浅はかなり」

藤巻の言葉に続き、ひっそりと部屋の片隅に立っていた椎名が言う。

「次はふじつぼかもしれん。」

「ヤドカリかもしれん。フナムシであるかもしれん」

「クリオネかもしれないし、磯巾着かもしれないな」

松下に続き、七瀬が言った。

「はあ？そんなまさか？」

「何故浜辺に集中してるのかと突っ込む余裕もなさそうな顔ですね。」

「因みに意味なんてありません」

「ほおら、とつとどこから出ていけよ。」

「天使のいいなりになって無事成仏するんだろ？」

「ふじつぼになって人間に食われでもすんだな。」

「幸せな来世じゃねえか」

高松と藤巻に言われると、少年は考え込む。

「…………ふじつぼ？」

「一方で戦線メンバーの方は、」

「ええ！？ふじつぼって食べれるの？」

「食用のものもあります。」

「栄養価は高いらしいぜ」

「知らなかったぜ」

「浅はかなり」

勝手に不毛なやり取りをしている。

そんな中、ゆりが彼等を諫めた。

「まあまあ皆、そんな追い出すような真似はしないであげなさい。可哀相に、」

この我が……あゝ……今何だっけ？」

「ふじつぼ戦線」

「そうそう ふじつぼ……」

次の瞬間、室内には打撃音が響き、木刀の男子の顔面に足跡がつく。

「もとに戻す。死んだ世界戦線！」

「いい蹴りだったぜ」

「……ドMかよ」

七瀬が嫌な顔をすることも気にせず、話は続く。

「この戦線の本部にいる間は安全なんだから、彼はそれを知って逃げ込んで来たんでしょ？」

「いやぁ知らないし、入ろうとした途端吹っ飛ばされたし、

て言うか、来世があったとして人間じゃないかもしれないなんて冗談だろ？」

「冗談ではない」

少年の問い掛けに、松下が答えた。

「だって、そんなの確かめられないじゃないか。誰が見てきたのかよ」

「そりゃあ確かめられないわよ。」

でも仏教では人に生まれ変わるとは限らないと考えられてるわ」

「人にだけ生まれ変わるってのは、よく考えればおかしな理屈だしな」

ゆりと七瀬が言うと、少年は取り乱していた。

「まあ宗教なんて人間の考えたものなんだけど、

でもね、良く聞きなさい。ここが大事よ。」

あたし達がかつて生きてきた世界では、人の死は無差別に無作為に訪れるものだった。

だから抗いようもなかった。

でもこの世界は違うのよ。

天使にさえ抵抗し続ければ、存在し続けられる。

抗えるのよ」

「でも待て、その先にあるのは何なんだ？

お前らは、何をしたいんだ？」

「私達の目的は天使を消し去ること、そしてこの世界を手に入れる。

まだ来て間もないから、混乱するのも無理ないわ。

順応性を高めなさい。そしてあるがままを受け止めなさい」

「そして、戦うのか？天使と」

「そうよ。共にね」

「え？

……………」

ゆりに差し出された手を少年が握ろうとした瞬間、

「早まるな！ゆりっぺあああ！？」

ドアを蹴り開けた野田は、一瞬にして降り懸かったハンマーに弾き飛ばされた。

「……あの罨、あいつが仕掛けたって聞いたんだが」

七瀬が言うと、他の面子は呆れ果てた様子でいた。

先程の珍事からしばらくすると、ゆり達は改めて少年を戦線に受け入れる。

「私はゆり、この戦線のリーダーよ。」

で、彼が日向くん。

見た目通りちゃらんぼらんだけど、やるときはたまにやるわ」

紹介されると、日向は誇らしげな表情をするが、

「って、フォローになってないぜ！」

直ぐに気付いて突っ込む。

「そっちの多少ガラが悪いのが相楽くん。」

ウチの切り込み隊長よ。

頼りになるから、危ない時は頼りなさい。

彼は松下くん。柔道五段だから、敬意を持って皆は松下五段と呼ぶわ」

紹介されると、七瀬と松下が少年に握手を求める。

彼がそれに応えようと、今度は大山が続いた。

「彼は大山くん。特徴がないのが特徴よ」

そんな中、メンバーの一人が音無に絡む。

「Come on, let's dance!」

「いや、踊らねえけど」

「この人なりの挨拶よ。」

皆TKと呼んでいるわ。

本名はだれも知らない謎の男よ。

眼鏡を一々持ち上げて知的に話すのが高松くん。

本当はバカよ」

そんな紹介を否定することもなく、高松は眼鏡持ち上げる。

続いて、今度は藤巻が紹介され、

「後彼が藤巻くん。」

で、さつき飛んでったのが野田くん。

影で浅はかなりって言い続けているのが椎名さん。

こっちに座ってるのが岩沢さん。

陽動部隊のリーダー。

後、ここにいないだけで、戦線のメンバーはまだ何十人も校内に潜伏してるわ。

……そう言えば、あなた名前は？」

一通り紹介し終えてゆりは尋ねる。

すると、少年はしばらく考え込み、

「ああ…えっと、お……おと…音無。」

「下は？」

「思い出せねえ。」

「記憶のないパターンか」

日向が言うと、七瀬は小首を傾げる。

「なあ岩沢」

「ん？何？」

「記憶がない奴が来ることって、結構あるのか？」

「まあ珍しいけど、あることはあるみたいだよ」

岩沢とそんなやり取りをすると、七瀬は多少は興味を持った様子で音無を見ていた。

作戦が行われたのはその日の夜だ。

ガルデモのライブが始まり、食堂に集まっていた生徒達は総立ちで沸き立つ。

その歓声が耳に届くと、外で待機していた七瀬は、大食堂に向き直った。

「……………始まったな」

そんな呟きを聞くと、日向が緊張感のない声をあげる。

「今日は何食おうかなあ」

「油断して天使にやられても、拾ってやらんぞ」

「分かってるって。」

それより」

日向が言いかけたとき、唐突に銃声が響いた。

「連絡橋の方だな」

「まずい、あつちは音無だけだ」

顔を見合わせると、二人は銃声の方向に走り出した。

他の面子も考えることは同じなようで、野田や藤巻等も彼らに続き走り出す。

すると、前方からこちらに向かい駆けてくる音無が視界に入った。

それを追うようにして天使が歩いて来ると、次の瞬間、野田がハルバートを投げつける。

しかし、天使は簡単に弾き飛ばした。

「!?!?」

驚きを隠せない様子で音無が振り向くと、直ぐさま日向達が駆けよった。

「待たせたな!」

「後は俺達に任せな！」

日向と七瀬に続き、藤巻、TK、松下も前が出る。

そして、ライフルによる射撃が始まった。

大食堂内

同時刻、大食堂ではライブの盛り上がりが最高潮に達していた。

「宴もたけなわだな。」

「……回せ。」

『……回して下さい。』

ゆりの命令を聞き、遊佐が連絡すると、待機していた隊員達は設置していた数台の大型扇風機を起動した。

発せられた風が食堂館の中心でぶつかり合い、一般生徒達の持った食券を上空に巻き上げる。

「相楽、今だ！」

マガジンの装填の為に一時的に銃声が止むと、日向が声をあげ七瀬が天使に向かい突貫する。

「シッ！！」

ジャブで牽制されると、天使はそれを刃で受けるが、次の瞬間にはその華奢な身体に鋭いストレートが突き刺さる。

それでも天使は直ぐに立ち上がるが、途端に食堂館から颯爽と駆け降りた椎名のクナイでの強襲を受け、一瞬動きを止めた。

刹那、松下の放ったロケット砲が天使を捉えた。

ロケット砲が命中した場所から黒煙があがる中、それでも天使は歩みを止めない。

そんな時、

「始まった！」

まるで雪のように降り注ぐ食券に気付き、七瀬が呼びかける。

すると、それまで天使に向かい銃撃を行っていたメンバーは一斉にその場を放棄し、それぞれ食券を掴んで食堂へと向かう。

途中、食券の一枚を手の平に乗せ音無が呆然としていたが、

「それでいいのか？行くぞ！」

日向が声を駆け、彼に食堂へ向かうことを促す。

それに従いながらも音無が振り向くと、先程まで彼等と激闘を繰り広げていた天使は、食券の降り注ぐなか、ただ寂しげに立ち尽くしていた。

第15話 『A first meeting』

大食堂、ランチコート

「さっさんお疲れ」

七瀬が上がって来ると、関根が早々に声をかける。

「お疲れ」

「今日の成果は？」

「いきなりかよ」

呆れた様子で言うと、七瀬はポケットから大量の食券を取り出して見せた。

すると、関根は現金な対応を見せる。

「流石さっさんカツコイイ」

「あゝはいはい、それより岩沢達は？」

適当にあしらわれて尋ねられると、関根は振り返って手を振った。

「皆あゝ！さっさんの今日の成果も上々だったさー！」

それを聞くと、既にテーブルについていたガルデモのメンバーが歩み寄ってくる。

「うどんはある？」

「あたしはカツ丼がいいな」

「お疲れ様です」

岩沢、ひさ子、入江の三人が言うと、七瀬は入江の頭を撫でる。

「入江はいい娘だな。」

ちゃんと労ってくれてる。

それに比べて何だお前らは？

俺を券売機だとも思ってたのか？」

すると、入江はほんのりと頬を朱に染める。

「あう……………さ、相楽さん……………」

「見るこの奥ゆかしい姿を、これこそ女性だ」

言った途端、七瀬の頬はひさ子に抓られる。

「いだだだ！？ほら見ろ、いきなり暴力だ」

「……………人の性別を勝手に否定すんな」

二人がそんなやり取りをしていると、関根がポコリと七瀬の頭を叩

く。

「女の子がグーで人を殴るな」

「珍しいね、関根がひさ子に加勢するなんて？」

七瀬と岩沢が言つと、彼女は一瞬間の抜けた顔を見せた後、

「へ？……あ！さ、流石に女の子扱いされなかつたら、私だつて叩くよ」

ごまかすように言つて、引き攣つた笑顔を見せていた。

すると七瀬は、イマイチ納得出来ない様子ながらも、とりあえず食券を配り出す。

「とりあえず、さつさと飯を取ってくるか。」

岩沢はうどんで、ひさ子はカツ丼だよな。

関根と入江はどうする？」

尋ねられると、二人は少し考え込み、

「んじゃ、私オムライス」

「私はカレーをお願いします」

七瀬に答えた。

彼はそれを聞くと、ガルデモのメンバーに指定された食券を配つて

いく。

そうしていると、ふと関根がある疑問を口にする。

「それにしても、さっさんはよくヒラヒラ落ちてくる食券を、こんなにキャッチ出来るよね?」

対して七瀬は、自慢げに鼻を鳴らす。

「昔、虐められっ子がボクシングを始めて強くなるっていうアニメがあつてな。

それでジャブの練習で、木を揺らして落ちてくる木葉を十枚キャッチするっていうのがあつたんだよ」

「……それに影響されて、さっさんもその練習したの?」

「まあな」

そんなやり取りをすると、関根は呆れ果てた様子で七瀬を見る。

「男の子は馬鹿だねえ」

「女だってそういうことあるだろ?」

「まあ無いことも無いけど、それだって精々小学校低学年ぐらいまでだよ」

「うーん……性別が違うだけで、子供時代が大分違うもんなんだな」

関心した様子で言うと、七瀬は関根に続いてカウンターに向かった。

しばらくして食事を終えると、七瀬達は大食堂を後にしようとする。すると、出入り口の前で立ち尽くす音無に気づき、七瀬は足を止めた。

「よお」

「ん？……ああ、確か…相楽だっけ？」

七瀬が声をかけると、音無は一瞬間の抜けた表情を浮かべた後、ハッと我に返る。

「こんなところで何やってんだ？」

尋ねられると、音無は七瀬の後ろにいるガルデモのメンバーを見て、
（……硬派なのかと思ったけど、意外と女の子連れたりしてるんだな）

ふとそんなことを考えながらも、適当な答えを返す。

「あ、いや……今日一日で色々なことがあったからさ……」

「まあ初日は戸惑うよな。」

とりあえず習うより慣れるだ。

頑張って慣れる」

全く為にならないアドバイスを聞くと、音無は苦笑を浮かべていた。そんなやり取りをしていると、音無はふと先程の天使との戦闘を思い出し、彼に問い掛ける。

「……ボクシング……やってるんだよな」

「ん？……正確に言うと、この世界にはリングも相手もないから、『やってる』じゃなくて、『やってた』なんだろうな」

「じゃあ、生きてた時はボクサーだったのか？」

「……まあな」

「あんなに凄い戦いが出来るんだし、相当強かったんだろ？もしかしてチャンピオンだったとか？」

「いや、全然。」

中途半端なところで止めて、勝手に死んだただのバカだよ」

答えて七瀬が枯れた笑いを浮かべると、その得も言われぬ雰囲気、

音無は思わず顔を逸らした。

「あ、ああ（……何かまずいこと言っちゃったか？）」

そんな微妙な空気が流れると、七瀬はそれを振り払うように明るく振る舞う。

「……まああれだ。

生きてた時のことなんて、この世界じゃ関係ないんだよ。

どんな間違いを犯していても、どんな不幸を背負っていても、どんな心の傷があっても、この世界じゃ虐げられることも、突き放されることもない。

ここはそういう場所なんだよ」

「……………」

「とりあえず、お前の記憶が戻るまでは、戦線の奴らに頼っていいと思っぜ？」

ここにいる奴らは、皆いい奴だから、きつと力になってくれる」

「……………そうか……うん、ありがとう」

音無が言うと、七瀬は優しいげな微笑を浮かべ、彼の肩を叩く。

「それじゃ、俺はもう行くけど……頑張れよ、新人くん」

言い残すと、七瀬はガルデモのメンバーを連れて、大食堂を後にし

た。

第16話『One's daily life(前編)』

寮自室で目を覚ますと、音無は軽く頭を掻きながら、しばらくの間その見慣れぬ部屋の内装を眺める。

(……………夢じゃ、ないんだよな)

そんなことを考えて小さくため息をつくと、彼は手早く身支度を済ませ、部屋を後にした。

通学路

「ん？」

既に登校時刻も過ぎ、NPCの人影のなくなった通学路で、音無は十人程の戦線メンバーが集まっていることに気付く。

「……………何やってんだろ？」

何かを囲んで時折歓声をあげる彼らを見ると、音無は興味を持った様子で輪の中を覗く。

すると、ここではジャージ姿の七瀬と、柔道着姿の松下が向き合う光景があった。

「うおおおおー!!」

咆哮と同時に、松下は姿勢を落とし突貫する。

対して七瀬は、ジャブで牽制し、松下の足を止めようとするが、

「シッ!」

松下は戸惑うこともなく、片手でガードしながらタックルし、七瀬はそれを咄嗟に躲す。

「……やっぱり止まらないか」

「牽制のジャブではさしたダメージを受けんからな。

投げ技ありのルールなら、タックルは組み付くにはもってこいだ」

「うーん……総合格闘技って難しいな」

二人がそんな掛け合いをすると、端で野次馬に混じって見ていた音無は、訝しむような表情を見せる。

「……昼間から何やってるんだ?」

「スパーリングだよ」

その声に音無が振り向くと、声の主は日向だ。

「スパーリングって……柔道とボクシングだろ？」

「ここにはあの二人みたいに格闘技やってる奴は、他にいないしな。だからああやって、投げ、打撃、寝技、何でもありのルールで、試合してるんだよ」

「……物好きな奴らだな」

音無達がそんなやり取りをしている間にも、試合は展開していく。

「ぬおおおお！」

再度のタツクルの際に七瀬の袖を掴むと、松下は彼に背負い投げをかける。

「な!?!」

流石の七瀬も投げへの対応策がない様子で簡単に背負われるが、

「なーんてな」

上手く足をついて着地すると、七瀬は瞬時に反撃の体勢に入ると、松下の腹部へと全力でアッパーを打ち込んだ。

「ぐおお!?!」

短く呻くと、松下は腹を押さえて膝をついた。

「ま……まいった……」

松下が降参すると、七瀬は拳を引き大きくため息をつく。

「はあ………背負い投げかけられたときは、どうしようかと思っただぜ」

「流石に投げ技への対策を講じてきたか。」

今までは俺が掴むのが先か、打撃でダウンするのが先かの勝負だったが、これからは俺も打撃対策を考えなければな」

「おいおい、あの技のキレで打撃まで使われたら、流石に勝てないぜ？」

そんな掛け合いをして、七瀬は松下に手を差し延べ、彼を立ち上げさせた。

二人が爽やかにお互いの健闘えるが、その一方で野次馬達は、

「おらおら、松下五段に賭けてた奴らは食券出せよ」

「ラッキー 相楽に賭けといてよかったぜ」

藤巻や日向を中心とした一部の面子が、堂々と友人を賭博に利用していた。

「……お前ら、最低だな」

呟くと、音無は呆れ果てた様子を見せていた。

すると、七瀬が彼の存在に気付き、声をかけてくる。

「あ、音無じゃねえか。」

昨日はよく眠れたか？」

「ああ、おかげでぐっすり眠れたよ。」

「そうか、良かったな。」

そんなやり取りをしていると、

「さっさーん！」

七瀬を呼びながら、関根が駆け寄って来た。

「お疲れ。」

言うと、彼女は七瀬に缶ジュースを渡す。

「サンキュー。」

受け取ると、七瀬は礼を言って缶を開けるが、瞬時に関根を捕まえ、彼女に無理矢理そのジュースを飲ませた。

「ぶはっ!?!?。」

唐突な行動に、関根は驚きを隠せない様子を見せ、次の瞬間、

「苦っ!?!の、喉がああ!?!」

「お前の考えること何て、簡単に予想出来るんだよ。」

何だこのジュース? 『苦汁ゴーヤ』って、苦味意外存在しねえじゃねえか」

喉を押さえてのた打ち回る関根に対し、七瀬は少々不機嫌そうに言った。

対して関根は、しばらくしてようやく立ち上がると、辛そうに口を押さえながら、

「うう………さっさんに無理矢理苦いの飲まされた」

「下ネタみたいな言い方すんな」

関根の額に軽くチョップを入れながら言うと、七瀬は呆れ果てた様子でいた。

一方で関根は、不満げに口を尖らせる。

「そっちが勝手に下ネタ扱いしてるだけじゃん。」

人を勝手におかずにするなあ」

「だから、女の子がそういうこと言っな」

そんな掛け合いをして、七瀬は関根の両頬を抓る。

二人のやり取りを端で見ていた音無が、呆然と立ち尽くしていると日向が苦笑しながら彼に声をかける。

「ああいう痴話喧嘩はいつものことだから、ほっといた方がいいぜ？」

「いつもあんな感じなのか？」

「ああ、最近じゃ毎日のようにやってんだよ」

音無の問い掛けに日向が答えると、音無は笑顔を引き攣らせていた。

彼らにそんな話をされていることも知らずに、七瀬と関根の掛け合いは続く。

「お前はもうちょっとおしとやかに出来ないのか？」

「男女差別反対！女の子だからおしとやかかって言うのは偏見だあ！」

二人の声が響く中、音無は多少呆れた様子でその掛け合いを眺めていた。

第17話 『One's daily life (後編)』

大食堂

「ん？……関根、お前うどんなのになんで納豆も買ってんだ？」

七瀬が尋ねると、関根は手元にあったパックの納豆を取り、

「ああ、これは一緒に食べる訳じゃないよ。
持ち帰り用」

そう答える。

途端に七瀬、ひさ子、入江の三人は立ち上がり、ひさ子が関根にチ
ョークスリーパーをかける。

「今度はどんなイタズラする気だ？」

「いだだだ！？痛いです、ひさ子先輩！」

「言うか、信用ゼロですか！？」

「自分の普段の行いを考えろ！」

ひさ子と関根がそんなやり取りをしている間にも、七瀬が納豆を没
収した。

すると入江が、呆れた様子で関根に言う。

「しおりん、納豆そんなに好きじゃないのに持ち帰ろうとしてたら、それは疑われるよ」

「仮に納豆が好きだったとしても、臭いとかの問題で、部屋に持ち込む女の子は少ないと思うぞ」

七瀬が言うと、関根は何とかひさ子の腕から抜け出し、

「臭いとか気にしないかもしれないだろうがあ！
体臭自体が納豆に近いのかもしれないじゃん！」

「少なくとも、お前の身体から納豆の臭いはしてない気がするが」

「キツチリ嗅いだことあんのか！」

言われると、七瀬は彼女に歩み寄り、スツと関根の首筋に顔を近付ける。

「ひゃうっ！？」

「……………うっん……………多少甘ったるい匂いはするが、納豆っぽくはないな」

取り乱す関根に七瀬が言うと、彼女は顔を赤くして拳を振り回した。

「近すぎ！…！」

「おっど」

余裕をもって七瀬が避けると、関根はブンブンと拳を振り回しながら追いかけるが、

「あ」

「おっと」

テーブルの足に躓き転びそうになる関根を、七瀬は受け止める。

「大丈夫か？」

「あう……あ、ありがとう」

礼を言っ七瀬から離れると、彼女は赤くなった顔を俯いて隠していた。

「あ、さっさん」

食事を終えて一同が食堂を後にしようとする時、ふと関根が七瀬を呼び止めた。

「ん？どうした？」

「今夜もあれやるから、寮の方まで一緒に来て」

「あれって何だ？」

尋ねられると、関根は少し不機嫌気味に七瀬の頬を抓る。

「昨日自分で言った癖に、何で忘れるかな？」

「一昨日？（……ああ、ベースの練習か）……そういえばそうだったな」

応えると、七瀬は頷いて了承した。

そんなやり取りをしていると、

「二人共何やってるの？」

掛け合いを見ていた岩沢に尋ねられる。

すると関根は、いつもの調子で笑ってごまかす。

「あはは、な、何でもないですよ」

「……そう？」

訝しむような表情を見せながらも、岩沢が引き下がると、関根は安堵した様子で、小さくため息をついていた。

音楽室

小気味よいリズムを刻むベースの音に耳を傾けながら、七瀬は関根を見守る。

細くしなやかな指が、四本の弦を軽快に弾き、それと呼応するように、時折振り上げられた繊細な髪が月の光を反射し、きらびやかに煌めいた。

しばらくして曲を演奏し終わると、関根は小さくため息をつく。

「…………お疲れさん」

「疲れたあ…………」

気の抜けた声をあげると、関根は七瀬の隣に座る。

「お前もよくやるよなあ。

汗だくじゃねえか」

「へ?」

七瀬に言われて間の抜けた表情を浮かべると、関根はハッと我に返り、咄嗟に胸を隠す。

「ブラ透ける！？って言うか臭いとかあるし！」

唐突に声をあげると、彼女は七瀬と距離を置いた。

対して七瀬はにこやかな表情で、グツと親指を立て、

「いい目の保養になつたぜ」

それを聞いた途端、関根は拳を振り上げる。

「ウガアー！？」

ポコポコと叩かれるが、七瀬はさして怯む様子もなく余裕の表情だ。

「このスケベ！ヘンタイ！」

「冗談だよ、流石に電気もついてない暗がりじゃ、俺の視力でも透けたブラは見えん」

「うう……私としたことが、こんなにあっさりと遊ばれた」

そんな掛け合いをすると、関根は座った時についたスカートのホコリを叩く。

「ちょっと待ってて」

「ん？何処行くんだ？」

「お花を摘みに」

「ああ（……なんだトイレか）」

七瀬が応えると、関根は音楽室を後にした。

それを見送り、七瀬が軽く伸びをすると、不意に音楽室のドアが開かれる。

「ん？………岩沢」

呼ばれると入室した人物、岩沢は微笑で応える。

「何だよ、あいつの練習のこと知ってたのか？」

尋ねられると、彼女は七瀬の隣に座り、

「関根は飄々としてるようで、頑張ってる娘だからね」

「知ってたなら、声ぐらいかけてやれよ」

「………何て声をかけていいか、分からないんだ」

「簡単な話だろ？『よく頑張ったな。』

今度からは一緒に練習しよう』とでも言ってみれば、あいつの不安も多少は取り除けるさ」

「妙に手慣れた感じだね？」

「……似てるからな」

「……『似てる』って関根が相楽に？」

「……ああ……俺も生きてたときはあんな感じでがむしゃらに練習してたんだよ。」

同じジムに目茶苦茶強い先輩がいてな。

入門してから二度目のスパarringで、簡単にKOされちゃった。

そしたら、急に不安になって来てさ。

俺が自分を強いと思ってたのは、ただの自惚れだったんじゃないか？
結局、ボクシングすら俺には向いてないんじゃないか？

そんな不安を打ち払おうとして、毎日死ぬほど練習してた」

そんな話を聞くと、岩沢は優しげに微笑む。

「だったら、私も相楽に似てるのかも」

「は？」

「相楽にボクシングしかなかったみたいにな、私にも歌しかなかったんだよ。」

歌いたい歌が歌えなかった……それだけ……。

私の両親は、いつも喧嘩ばかりしていた。

自分の部屋もなく、その怒鳴り声中、隅で縮こまって耳を塞いでいた。

自分の殻に籠るしかかなかった……どこにも、休まる場所はなかった。

そんな時、『SAD MACHINE』っていうバンドに出会ったんだ。

すべて吹き飛んでいくようだった。

ヴォーカルが私の代わりに叫んでくれる。訴えてくれる。

常識ぶってる奴こそが間違っていて、泣いてる奴こそが正しいんだと……孤独なあたし達こそが、人間らしいんだと……。

理不尽を叫んで、叩き付けてくれた……私を、救い出してくれた。

ギターと出会ったのは、ある雨の日のゴミ捨て場だった。それで歌いはじめた。

……何も無いと思ってた私には、歌があったんだ。

それから、バイトをしながらレコード会社のオーディションを受ける日々……高校を卒業したら、あの家を出て上京して、音楽で生きて行こうと思った……そんなある日、私はバイト先で倒れた……目覚めた時、私は言葉を話せなかった。

頭部打撲、脳梗塞による失語症……原因は親の喧嘩のとばっちりだった。

……ね？相楽のと似てるだろ？」

岩沢の人生を聞くと、七瀬は俯いて視線を逸らす。

「……全然違うさ……お前の歌は、酷い日常の中で見付けた、お前にとってかけがえのないものだ。」

でも、俺のボクシングは違う……自棄になって喧嘩ばかりして、結局は自分が持つてるものが、腕っ節の強さくらいしか見付からなかっただけだ。

自分で夢を見付けたお前の人生と比べるのもおこがましい」

「……さっさん」

「……所詮俺はどうしようもないクズなんだよ」

「……」

七瀬の言葉に岩沢は黙り込む。

すると七瀬は、のっそりと立ち上がり、

「まあでも、此処に来てからは、結構ましになったんだぜ？」

……生きてたときと違って、自分のためじゃなく誰かの為に戦えるんだ。

人を殺めちまったこの拳で、守ってやる事が出来ている」

それを聞くと、岩沢は微笑む。

「そっか……」

対して七瀬も、にこやかに微笑を返していた。

第18話『Guild（前編）』

音楽室

「ん？……そろそろ作戦会議の時間か」

ガルデモが練習をする中、七瀬はふと呟くと立ち上がる。すると、ガルデモは急に演奏を止めた。

「ん？……あ、悪い、気を散らしちゃったか？」

謝られると、彼女達は苦笑して首を振るう。

「いや、そうじゃなくてさ。

校長室に行くなら、ついでだからそろそろギターが足りなくなってきたから、ギルドの方に連絡しとくように伝えといて」

岩沢が言つと、同意するように関根も声をあげる。

「あ、ベースの弦もそろそろヤバそうだから、そっちも伝えといて」

「了解。それじゃ、言って来るわ」

「んじゃ、頑張ってねえ〜」

関根に手を振って見送られると、七瀬は音楽室を後にした。

校長室

「……全員揃ったみたいね……皆、これより作戦会議を始めるわ！」

その声を聞き七瀬達が彼女に注目すると部屋の明かりは落とされ、ゆりの背後にスクリーンが展開する。

「高松くん報告お願い」

「はい。」

武器庫からの報告によると、弾薬の備蓄が尽きるそうです。次一戦交える前には、補充しておく必要があります」

「新入りも入ったことだし、新しい銃もいるんじゃないの？」

高松の報告を聞き大山が付け足す。

すると、七瀬も挙手し、

「ガルデモの方も、ギターとベースの弦が足りなくなってきたって
言ってたぞ」

それを聞くと、ゆりはしばし考え込み、意を決した様子で口を開く。

「そうね……分かったわ。」

本日のオペレーションは、ギルド降下作戦といきましょう」

作戦名を聞くと、音無が何かを想像したらしく身震いし、七瀬は小
首を傾げた。

「どつした音無？」

日向が尋ねると、

「高いのは、得意じゃないつつつか……………」

そんな音無の台詞を聞くと、ゆりが呆れた様子で言った。

「何言ってるのよ。」

空から降下じゃないわ。此处から地下に降下よ」

「なんだ、地下か…って地下!？」

「あたし達はギルドと呼んでる。」

地下の奥深くよ。」

そこでは、仲間達が武器を作ってるの」

「じゃあ、天使にバレないようにってことか」

「そうね。ギルドを押しさえられたら武器支援がなくなり、私達に勝ち目はなくなるわ」

説明すると、彼女は何処かに通信を繋ぐ。

『へーいつ』

軽い印象の男が出ると、ゆりは口を開く。

「私だ、今夜そちらに向かう。」

トラップの解除を頼む」

『了解、今晚だな。』

待ってるぜ』

「よしっ。今回はこのメンバーでいきましょう」

通信を切ってゆりが室内のメンバーに呼び掛ける。

「あれ？ねえ、野田くんはいいの？」

「あのバカはどうせまた単独行動してんだろ？」

「All right let's go」

大山の言葉に日向とTKが応えると、彼らは校長室を後にした。

ステージ下の収納スペースから椅子を引き出すとその奥に地下へと続く入り口があった。

七瀬と音無が他のメンバーに続き地下に下りると、藤巻が声をあげる。

「おい、誰がいるぜ！」

そして彼が懐中電灯で通路を照らすと、そこには何故か野田の姿があった。

「うわーバカがいた。」

日向が呆れながら言うと、野田は音無にハルバートを向ける。

「音無とか言ったな。」

俺はお前をまだ認めていない」

「わざわざこんなところで待ち構えてる意味がわかんないよな？」

「野田くんは、シチュエーションを重要視するみたいだよ」

日向の疑問に大山が応えた。

「意味不明ね」

「気持ちは分からなくてもないが、実行するのは完全にバカだな」

ゆりと七瀬まで呆れた様子を見せるが、それでも野田は揺るがない。

そして、当の音無も野田を相手にする気はない様子で、

「別に認められたくもない」

「貴様、今度は千回死なせどあ！？」

言い終わる前に突然横から襲い掛かったハンマーに弾き飛ばされ、野田の手足は通常曲がるはずのない角度を作る。

刹那、ゆりが声をあげた。

「臨戦体勢！」

「トラップが解除されてねえのか！」

藤巻が声を荒げた瞬間には、音無以外の全員が武器を手に四方を警戒していた。

「うわつと!?!何事だ?」

「見ての通りだ」

肩を引かれて腰を落とした音無が尋ねると、日向が応える。

通常ならばゆりが連絡をつけた時点でトラップは解除されるはず。

「トラップの解除忘れかな?」

「まさか俺達を全滅させる気かよ?」

大山と藤巻が言うと、ゆりはそれを否定する。

「いいえ、ギルドの独断でトラップが再起動されたのよ」

「何故?」

「答えは一つしかない。」

天使が現れたのよ」

その言葉に、一同は困惑した様子を見せていた。

「ギルドの判断は正しい」

「確かにな。」

呆気なくやられるよりはましだ」

ゆりの意見に同意すると、七瀬は手甲を装備し完全な戦闘体制に入った。

すると日向が、

「天使を追うか？」

ゆりに問い掛ける。

途端に藤巻と音無が反対意見を述べた。

「トラップが解除されてねえ中をかよ？」

「天使はそのトラップで何とかなるだろ？
戻ろうぜ？」

対してゆりは、数秒の間考え込み、意を決した様子で口を開く。

「トラップはあくまで一時的な足止めにしかならないわ。」

……追うわ。進軍よ」

それを聞くと、しばしの間沈黙するが、

「……俺達は素手じゃ天使に立ち向かえねえ。
武器がなければ、何一つ守れねえ」

不意に口を開き、七瀬が前に出た。

「だったら、やることは一つだ。」

……俺は行くぜ。

ただ、道は一つじゃない。

進むか戻るか、それぞれで考えてついてこい」

その言葉を聞くと、他のメンバーは小さく頷き、彼らは進軍を開始した。

第19話『Guild（後編）』

ギルド連絡通路B3

先頭にゆり、殿に椎名を配置し、戦線のメンバーはギルドを目指して前進していた。

「そついや、どんなトラップがあるんだよ」

「……そついえば、俺も可動してるとこ見たことないな」

音無と七瀬が言うと、

「色んなものがあるぜー。」

楽しみにしてな」

日向がいつも通りの軽いノリで答える。

そんなとき、

「っ！？まずい、くるぞ！」

突如、椎名が声をあげた。

すると、数秒後に一同の後方の天井が崩れ、巨大な鉄球が現れる。

「な!?!」

「走れっ!!」

叫んで、彼女が走り抜けると、ワントempo遅れて他のメンバーも走り出す。

「こっちだ!」

一足先に一番近い横道に駆け込むと、椎名が叫ぶと、七瀬、ゆり、藤巻、松下、TK、大山と、日向と音無、高松以外のメンバーは、なんとか通路に駆け込むが、

「うおお!?!」

日向が音無を抱え通路の隅に倒れ込むと、二人はなんとか鉄球を避け、高松だけがそれから逃げ続けていた。

「……高松くん以外は無事なようね」

「……こんな罠が、この下にもわんさかあるのか?」

ゆりの言葉を聞くと、七瀬は引き攣った顔で言う。

「そりゃあ沢山あるわよ。」

なんてっ たって、自慢の対天使用トラップだからね」

ゆりが皮肉げに応えた。

「行きましょ」

言われると、一同は頷いて進軍を再開した。

ギルド連絡通路B9

「……………何で対天使用のトラップを、誰も覚えてないんだよ」

呆れた用に言うと、七瀬は現状を確認する。

ここまでの間に高松、松下、TK、大山の四名を失った一同は、この階でも見事に罠にかかり、崩れる床から命からがら逃げのびていた。

しかし、七瀬と椎名以外は落ちる寸前の状態であり、椎名にロープで吊される藤巻に、ゆり、日向、音無の順に掴まって辛うじて落下を免れている。

まずは一番下にいた音無が、何とか登って来ると、七瀬は彼に手を差し延べた。

「……………ありがとう」

「ああ…次、日向上がって」

七瀬がそう言いかけた次の瞬間、

「あー！？そんなところもてる訳ないでしょ！」

突如ゆりの黄色い悲鳴が響くと、次の瞬間には打撃音が響き、日向の悲鳴が下方へと遠ざかっていった。

「……あー…次ゆりっぺな」

日向の落下を華麗にスルーすると、七瀬はゆりに言う。

そんな彼等を呆れた様子で見ながらも、音無は登って来たゆりを引っ張り上げた。

「ありがとう」

「ああ、」

「藤巻、引っ張り上げるぞ？」

「ああ、頼む」

藤巻が応えると、七瀬は音無とゆりと協力してロープを引き上げ、椎名は自力で登る。

「……えーと…日向の奴は」

「尊い犠牲となった」

「……そう」

ゆりの回答を聞くと、音無は顔を引き攣らせている。

「ふう、ついに五人になっちゃったわね」

「まだ俺と椎名もいるんだ。」

そこまで酷い戦力じゃないだろ？」

ゆりの言葉に比べると、七瀬は励ますように微笑する。

そんな中、藤巻が音無に言った。

「はっ、よくまあ、新入りのためえが生き残ってるもんだな」

「……まあな」

「……次はためえの番だ」

数分後、

ギルド連絡通路 B 13

「……水責めね」

「ホント、嫌に成る程にレパトリーが豊富だな」

「……こいつ、かなずちだったのか」

半分以上浸水した部屋の中で、ゆり、七瀬、音無の三人は言う。

その側には、どざえもん（藤巻）の姿があった。

そうしていると、潜っていた椎名が、水面から顔を出す。

「出口はこっちだ。こい！」

それを聞くと、七瀬達は彼女に続いて潜水し、椎名に続いてその部屋を脱出した。

しばらく進み地下水路に出ると、椎名が七瀬、ゆり、音無の三人とは、対岸へとあがる。

「ゆり、こっちだ」

彼女が呼びかけると、ゆりは小さく頷き、

「……行きましょう」

音無を先導し、進み出した。

次の瞬間、椎名は何かに気付いた様子で振り向く。

すると、地下水路を犬のぬいぐるみの入った段ボールが流れて来た。

「あぁー！」

突如声をあげると椎名は走り出す。

「子犬が流されているうー！」

とっつー！」

「ええー！？」

「椎名さん駄目え！」

「……………」

椎名の突発的な行動を見ると、音無は驚きゆりは声をあげるが、既に手遅れと判断した七瀬は呆れた様子で顔を押しさえていた。

「残ったのはあなただけね」

「……そうみたいだな」

「まあ、犠牲の一部はただのアホだけだな」

ゆりの言葉に二人が反応すると、彼女は壁を叩く。

「本当の軍隊なら、みんな死んで全滅じゃない。」

酷いリーダーね」

戦線のリーダーである責任感からかゆりは自責する。

一方で音無は彼女を慰めようとし、

「仕方ないだろ？ 対天使用のトラップだ、これぐらいじゃなきや意味ねえよ。」

言葉を投げかける。

しかし、ゆりは無言のままだ。

そんなやり取りをしている間にも、直ぐ側で発動したトラップのも
のと思われる轟音が響き、七瀬は無言のまま拳を握りしめる。

「……もう近くまで来てるみたいだな」

言って、彼が音の方向に歩き出すと、音無は直ぐに呼び止めた。

「おい、どうするつもり何だよ？」

「どうするもこうするも、時間を稼ぐしかないだろ？」

あ、そうだ。

ギターとベースの弦、ギルドの奴らから受け取っておいてくれ」

そんな台詞を口にするのと、七瀬は再び歩みを進め出すが、

「あ、それと。」

ゆり……お前が頭だとすれば俺達は手足、頭を守ることは当然だし、お前が俺達の希望だ。

そんなお前だからこそ俺は信頼してる……後、頼んだぜ」

それだけ言い残して三度歩き出した。

粉塵の舞う通路を抜けると、そこに立つ七瀬を見て、天使は歩みを止める。

「……こっから先は通行止めだ」

そんな言葉を口にする七瀬に対し、天使は再び歩み出す。

「そう来るなら、遠慮なく行かせてもらおう！」

天使の挑発的な態度に、七瀬は駆け出すが、

「……………ガードスキル『ハーモニクス』」

眩かれた刹那、拳を振り上げた七瀬の眼前に、突如天使が現れた。

「っ!？」

咄嗟に七瀬はバックステップで距離をとる。

(デイレイと同じ瞬間移動? ……いや、違う)

彼の目の前だけでなく、先程眩いた地点に立つ二人の天使を見ると、七瀬は驚愕する。

「分身って、そんなのありかよ……」

ぼやくように言う彼に対し、本体の天使は分身を残して七瀬の横を通り抜けようとした。

途端に七瀬は攻撃体勢に入るが、

「……あなたの相手は私よ」

分身が本体と七瀬の間に割って入る。

一方で本体は、七瀬のことを気にかける様子もなく、歩みを進めて行った。

七瀬が天使の分身との戦いを繰り返り広げ始めてからしばらくすると、ゆりと音無は、ギルドのメンバーと共に天使と対峙し、戦闘を繰り返していた。

「天使が起きるぞ！」

「お前達、これで何とかしろ！」

音無が続いてチャーが声をあげると、一同は大量の手投げ弾を天使に投げつけて攻撃する。

「シエルターへ急げ！」

ギルドのメンバー達が次々と避難していくと、チャーはゆりに呼びかけた。

「よし、ギルドを爆破する。
いいな？」

「やって」

「爆破！！」

ゆりの即答に対し、チャーは即座に発破をかけ、次の瞬間には連絡通路全体に振動が響いた。

「…………ハア…ハア…………何だ、今の揺れ？」

ポロポロの姿で息も絶え絶えながらも疑問の声をあげると、七瀬は目の前で気絶する天使の分身を見下ろす。

すると、唐突に分身の身体は光りの粒子のような物に分解されていき、七瀬の前から姿を消した。

「…………まあ、とりあえず…………勝ったあ！」

叫ぶと七瀬は後ろ向きに倒れ込む。

そんな時、通路に設置されていたスピーカーから、ゆりの声が響いた。

『馬鹿共、お目覚め？』

ギルドを破棄、天使ごと爆破したわ。

総員につぐ、至急オールドギルドへ。

武器の補充はそこで急ピッチで行われてる。

天使が復活する前に、総員、オールドギルドへ！

繰り返す。急げ、馬鹿共』

「……………何だ、ゆりの奴、元気そうじゃねえか」

放送を聞くと、七瀬は多少安心した様子で呟き、しばらくの間通路の天井を眺めていた。

第20話『Misunderstanding(前編)』

「ええー!？」

「じゃあ、ギルド全部爆破しちゃったの?」

驚きを隠せない様子で関根が言うと、七瀬は頷いて肯定する。

「ああ、だからこれからは、銃や弾薬だけでなく、ギターやベースの弦や、ピック、ドラムのスティックみたいな消耗品は、出来るだけ節約しないといけない訳なんだが………」

「……それはちょっと難しいね」

ひさ子が応えると、岩沢、関根、入江の三人は同意する。

「練習してる限りは消費量は減らないし、かと言って練習を減らす訳にもいかないからね」

「言ってる。練習サボって人气が落ち込んだら、陽動どころじゃないじゃん」

「そうですね。ガルデモは今まで皆で練習を頑張ってきたから、NPCの人達が聴きに来てくれてるんです」

「……それは、俺だって分かってるよ。」

まあ、そこで提案があるんだが」

不満な様子のガルデモに対して言うと、彼女達は七瀬に注目する。

「ちょっと待っててくれ」

そう言い残すと、七瀬は一度音楽室を後にし、しばらくしてそれぞれ土と水の入った二つのバケツを持ってくる。

「もしかして、自分で作れって言うんじゃないだろうね？」

問い掛けると、ひさ子は少々呆れた様子を見せる。

「ギルドの奴らに言われなかった？」

確かに土くれから物を作ることは出来るけど、それはかなり難しいんだよ？」

「分かってるよ。」

物体を作るには、その物体を事細かにイメージしなくちゃならない……確かに普通にやれば難しいが、こういうやり方ならどうだ？」

応えると、七瀬は右手で土を握り、左手でギターの弦に触れる。

そして、瞳を閉じてしばらくすると、七瀬は右手の土くれを水で洗い流し、

「ほら、このやり方ならそれ程労力はいらぬ。」

細かくて複雑なパーツならともかく、こういう単純な形の物なら、片手で実物を触りながらやれば、簡単に精製できるだろ？」

泥の中から出てきた弦を見ると、一同は感心した様子を見せていた。

校舎内、自販機前

ガルデモの練習に一段落がつくと、七瀬と関根は自販機で全員分の飲料を購入していた。

「そつえばさ、さっさんはどうしてあんな方法思い付いたの？」

「ん？」

尋ねられると、七瀬は自販機のボタンを押しながら反応する。

「まあ、ちょっと物を作ろうと思って挑戦したんだが、上手くないかななくてな。」

俺なりに色々と試行錯誤した結果だよ」

それを聞くと、関根は小首を傾げて七瀬の顔を見上げた。

対して七瀬は、ポケットからある物を取り出す。

「……指輪？」

「正確に言つと、金の指輪だ。」

本当なら金の延べ棒を造りたかつたんだけど……造れる量はこれで限界だった」

「何で金造ろうとしたの？」

「一度でいいから金持ちの気分を味わいたかった」

「……うわぁ…アホっぽいなぁ」

「うるせえ」

そんなやり取りをすると、七瀬は関根の額にデコピンをする。
すると、

「いて！？……うう、暴力反対」

涙目で上目遣いに七瀬の顔を見上げ、関根は不満げに言った。

「と言うか、その指輪は明らかに男物のサイズじゃないよね？」

「言つたろ？このサイズが限界だつて」

「……身に付けられる物すら造れなかったの？」

呆れ果てた様子で関根が尋ねると、七瀬は微妙な表情を浮かべ顔を逸らす。

しばらくの間、そんな掛け合いをしていると、

「おーいつ相楽あー！」

不意に日向が声をかけてきた。

「ん？日向、何か用か？」

「ゆりつぺが、戦闘要員は校長室に集まってるさ」

「何だ？昨日ギルドをやられたばかりなのに、直ぐまたオペレーションか？」

「さあな、行けば分かるんじゃないか？」

「それもそうだな」

そんな会話をして、日向と苦笑し合うと、七瀬は一度関根に振り返る。

「んじゃ、行ってくる。」

……あ、そうだ」

その場を去ろうとした時、彼はふと振り返り、先程の指輪に関根に

向かって投げた。

「わっと!?!」

関根が指輪をキャッチすると、

「俺が持つててもしょうがねえからな。
お前にやるよ」

「え……あ……ありがとう」

「それじゃ、またな」

言い残すと、七瀬は日向と共に校長室に向かって行った。

その後ろ姿を見送ると、関根はしばらくの間、七瀬に渡された指輪をぼんやりとした表情で眺める。

「……………指輪かあ」

呟くと、彼女は指輪を左手の薬指にはめてみる。

「……………ぴつたりだし」

次の瞬間、ふと我に返ると、彼女はカッと一気に顔を赤らめる。

「あう……………何やってんだろっ……………」

ぶんぶんと首を振るって雑念を振り払い、関根は気を落ち着けて指輪を外してポケットに入れた。

「ああもう、今の無し、リセット！」

自分に言い聞かせると、関根はまだ仄かに赤らんだ顔のまま、その場を後にする。

しかしその時、廊下の隅には物影から彼女の様子を観察する遊佐の姿があった。

「……青春？」

小首を傾げて呟くと、彼女はその無表情な顔を崩すことなく、関根の後ろ姿を見送っていた。

音楽室

関根が音楽室に戻りガルデモの練習が再開されると、一曲を演奏し終えた時、ふと岩沢が声をあげる。

「……関根、何か調子いいみたいだけど、どうかした？」

尋ねられると、関根は途端に取り乱し、

「な、何でもないよ!？」

気のせい気のせい」

「そうか？あたしにもテンションが上がってるように思えたけど」

「しおりん、何かうれしいことでもあったの？」

ひさ子と入江も岩沢と同じ感想を抱いた様子で尋ねるが、関根はそれに対してもごまかすように否定した。

「ホントに何も無いから。」

それよりほら、次のライブに向けて練習しないと」

そんな彼女の対応を見ると、岩沢達は訝しむような表情で顔を見合わせていた。

第21話『Misunderstanding(後編)』

「……つまり、今後はなるべく弾薬の消費の起きないオペレーションを中心に動く」と

高松が言つと、ゆりは不機嫌そうに頷く。

「ええ、ギルドが破壊されて、しばらくは大規模の弾薬補充は出来そうにないからね。」

銃無しで天使と渡り合える人間なんて、うちには相楽くんと椎名さんくらいしかないしね」

それを聞いて、他のメンバーは頷いて了解する。

「まあな。まともにやり合ったらこっちの被害がデカすぎるからな」

「そうだな。銃ありでも時間稼ぎが精一杯なんだし、白兵戦じゃ勝ちようがねえよ」

七瀬と日向が言つと、ゆりは不満そうな表情を浮かべていた。

ガルデモが練習を終えて休憩していると、ドアを開いて遊佐が入室した。

「ん？どうした遊佐？」

ひさ子が尋ねると、彼女は無表情な顔付きを崩すことなく、

「……………先程の会議で決定された戦線の今後の方針の報告です。

これからしばらくは、なるべく弾薬の消費を避けるように動くそう
で、大掛かりなライブで天使の目をガルデモに向けた状態にしても
らうために、頑張ってもらおうそうです」

淡々と話すと、しばらくの間ガルデモの様子を伺っていた。

すると、岩沢が声をあげる。

「大掛かりなライブか……………派手なライブ出来るなら、こっちとして
も、嬉しい提案だね」

「確かに……………最近トルネードばかりだったしね」

「ひっさびさに燃えてきたあ」

「しおりんの調子もいいし、本当にいいタイミングですね」

岩沢に続いてひさ子、関根、入江の三人が言っと、遊佐は小さく頷いた。

「……………そうですか。」

では、ゆりっぺさんにはそう伝えておきます」

そう言っつて、彼女がその場を去ろうとするふとひさ子が遊佐を呼び止める。

「あ、遊佐。」

あんたもこの後昼飯だろ？

食堂で一緒に食べない？」

「……………それじゃあ、お言葉に甘えて」

遊佐が了承すると、彼女達は揃って音楽室を後にした。

「あ、さっさん」

「よう、お前らも昼飯か？」

食堂で日向達と駄弁っていた七瀬を見つけると、関根は直ぐに駆け寄っていく。

それを見ると、岩沢達は訝しむような表情を浮かべた。

「でも、何で関根はあんなに機嫌がいいんだろう？」

ふと漏れた疑問に対し、遊佐が口を開いた。

「………そういえば、会議が始まる少し前に自販機の前で関根さんを見かけたのですが。」

何やら左手の薬指に指輪をはめて、それを眺めながらニヤついていたよ

それを聞いた途端、彼女達の間に一瞬沈黙がはしる。

「………左手の薬指に指輪」

「それって、婚約指輪とか結婚指輪ですよね？」

「相手は誰なんだ？」

「自販機の前にはいた時というと、直前まで一緒にいたのは相楽さん

ですよね」

ひさ子と入江はそんなやり取りをすると、いつものように七瀬とじやれ合っている関根に視線を向けた。

すると、岩沢がとくに取り乱す様子もなく言う。

「相手がさっさんなら安心なんじゃない？」

いつも私達のこと守ってくれてるし、現に関根と仲良くしてるじゃん」

対してひさ子達は、

「……でも、あれに恋愛感情があるとは思えないよな」

「そうですね。」

どちらかと言うと、恋人同士というより、仲の良い兄妹って感じですよね」

「……でしたら、直接聞いてみましようか？」

遊佐はそんな提案をすると、立ち上がって七瀬の方に向かって歩き出す。

「……相楽さん」

「ん？なんだ遊佐？」

尋ねられると、遊佐は表情を変えることもなく、

「関根さんの指輪のことなのですが」

「ん？何だよ関根から聞いたのか？」

「……………（関根さんに対しての気持ち）真剣なんですか？」

「ああ、（金を造ることに）真剣だよ」

「……………（関根さんのことが）好きなんですか？」

「（金が好きなのは）当たり前だ」

そんな噛み合っているようで噛み合っていない会話をする、遊佐は岩沢達の元に戻って行った。

関根を除いたガルデモのメンバーと向き合つと、彼女は口を開く。

「……………関根さんへの想いは真剣だそうです」

すると三人は、驚きを隠せない様子を見せていた。

一方で七瀬達は、

「遊佐は何て言ったの？」

「何だか知らんがお前にやった指輪の話を出してきてさ」

二人がそんな話をしていると、

「相楽さん、しおりん」

不意に入江から声をかけられ、七瀬と関根は振り向いた。

「何で言ってくれなかったんですか？」

「「？」」

二人が混乱していると、入江は言う。

「相楽さん、しおりんを幸せにしてあげて下さいね？」

「へ？」

「ち、ちよっとみさきち！？」

いきなり何言ってるの？」

入江の言葉に、七瀬は小首を傾げ関根が取り乱していると、ひさ子と岩沢も二人に声をかけてくる。

「水臭いなあ。」

言ってくれれば私達だって喜んで祝ってあげたのに」

「仲間の幸せは、私達の幸せだからね」

そんな台詞を聞くと、七瀬はまったく話が見えていない様子で呆けていた。

それとは反対に関根は、

「私とさっさんは、全然そんなのじゃないから」

声を荒げて必死に否定していた。

すると、

「……なら、自販機の前で左手の薬指に付けていた指輪は何なんですか？」

ひさ子や岩沢と一緒に近付いていた遊佐が問い掛ける。

対して関根は、それを途端に関根は顔を赤くして俯いていた。

「あう……そ、それはその……その場のノリというか……出来心というか……」

もじもじと呟くように言う関根を見ると、七瀬は首を傾げたまま、しばらくの間混乱していた。

第22話『My song(前編)』

校長室

バラード調の曲が演奏されると、校長室に集まっていた戦線の主要メンバーは、それに聴き入る。

「何故新曲がバラード？」

ゆりが尋ねると、それを演奏した岩沢は、真顔で尋ね返す。

「いけない？」

「陽動にはね」

ゆりが答えると、今度は音無が声をあげた。

「その…陽動つてのは何なんだ？」

「トルネードの時に聞いてなかったの？」

彼女は校内でロックバンドを組んでいて、生徒の人気を勝ち得ている。

私達は直接彼らに危害は加えないけど、時には利用したり、妨げになるときはその場から排除しなくてはならない。
そういう時、彼女達は陽動をするわ」

それを聞くと、音無は少々呆れた様子を見せる。

「NPCのクセにミーハーな奴らだな」

すると、日向と七瀬が、

「つまり、彼女達のバンドにはそれだけの実力と魅力があるってことだ」

「実際に戦線の中にもファンは結構いるしな」

「へー」

適当な相槌を打つと、音無はそれなりに納得した様子でいた。

そんな中、岩沢がゆりに問い掛ける。

「……で、ダメなの？」

「……うん…バードはちょっとね。

しんみり聴き入っちゃったら、私達が派手に立ち振る舞えないじゃない」

「……そう、じゃあボツね」

言っでギターをしまう岩沢に、少しの違和感を持つと、七瀬は小首を傾げる。

(……自信作だったのか？

何か少し憂鬱そうだな)

一方で、ゆりは直ぐに作戦会議を始めた。

「気を取り直して、総員に通達する。」

音無くん、カーテン閉めて」

音無がカーテンを閉めると、暗い室内でプロジェクターが動き出した。

「今回のオペレーションは、天使エリア侵入作戦のリベンジを行う。」

決行は三日後。」

カーテンが締め切られスクリーンが展開された校長室にゆりの声が響く。

すると、その場にいたSSSのメンバー達は歓声をあげる。

一方で高松が問題点を挙げようとするが、ゆりはそれを手で制する。

「今回は、彼が作戦に同行する」

そう言ってゆりが椅子を回すと、後ろに隠れていたオカッパ頭で度のキツイ眼鏡の小柄な男子が前に出た。

「よろしく」

挨拶されると、一部のメンバーは訝しむような表情を見せる。

「ゆりっぺ、何の冗談だ？」

「そんな青瓢箪が使いもんになるのかよ？」

対してゆりは、

「まあまあ、そう言わないでくれる？」

その言葉と同時に、男子生徒がゆりの前に立つと、途端に野田がハルバートを向けた。

「はっ！ならっ、試してやろう」

「……お前、友達いないだろ？」

「……音無、みなまで言うな」

音無と七瀬が呆れた様子で話すが、それを気に止めることなく、男子生徒は口を開いた。

「3・1415926535……」

男子生徒が円周率を口にすると、途端に野田は苦しみ出し、他のメンバーは同様に隠せない様子を見せる。

一方で、それを端で見る音無は、呆れ果てた様子でいた。

「そう、あたし達の弱点はアホなこと」

「リーダーが言うなよ」

ゆりの遠慮のない発言に音無がいうが、彼女はそれを気に止めもしない。

「前回の侵入作戦では、我々の頭脳の至らなさを露呈してしまった。

しかし！今回は天才ハッカーの名を欲しいままにした彼、ハンドルネーム竹山くんを作戦チームに登用、エリアの調査を綿密に行う」

「今のは本名なのでは？」

高松が当然の疑問をあげると、

「……そりゃあ、ハンドルネームで他人の苗字なのる奴はいないだろっ」

七瀬が呆れながら言った。

しかし、竹山は躊躇なく指を突き出し、彼らに言った。

「僕のことは、クライストと及び下さい」

「ってことで、一度目の侵入で警戒心の強まった天使の注意を逸らすために、ガルデモには派手なライブをやらせてもらおうそうだ」

七瀬が次のオペレーションのことを伝えたと、ガルデモのメンバーは一気に沸き立つ。

「よっしゃー テンション上がったきたあ

へヴィーかつ軽快でポップでロックなリズムを刻むよあ」

「言っとくけど、『へヴィーで軽快』と『ポップでロック』は思いつ切り矛盾してるからな」

関根の言葉に対して、ひさは子は呆れた様子で言う。

すると関根は、ニヤニヤと笑みを浮かべ、

「そう言っておいて、ひさ子先輩も結構疼いてるんじゃないですか？」

ひさに尋ねた。

対して彼女は、多少ばつが悪そうに顔を逸らす。

「いや、その……それは否定できないけどさ」

「結局は皆やる気満々なんだろう？」

……当日にライブ行けねえのが惜しいなあ」

七瀬はそんな言葉を漏らすと、少々残念そうな表情を見せていた。

それを聞くと、関根が不満げに声をあげる。

「えー、さっさん見に来てくれないの？」

「仕方ないだろ、俺は前線で戦う作戦チームの人員なわけだし。

まあもしもの事があつたら、直ぐにでも駆け付けて守ってやるから、安心して演奏してていいぞ」

ポンと頭を撫でられると、関根は不服そうな様子ながらも、大人しく引き下がっていた。

彼らがそんなやり取りをしていると、

「そついえば、大規模なライブって、一体どんなことをすればいいんですかね？」

ふと入江が疑問をあげる。

すると、一同はしばしの間考え込む。

「学習棟の屋上でライブするのはどうかな？」

ひさ子がそんな意見をあげるが、

「屋上だと入れる人数が限られるし、大規模にはならないんじゃない？
い？」

岩沢が冷静に否定する。

途端に、今後は関根が案を出そうと挙手した。

しかし、他の面子はスルーする。

「ひどっ!？」

そんな叫びも虚しく、一同のやり取りは続く。

だが、良案は中々あがらず、しばらくすると、あがる意見も少なくなっていた。

そんな中、ふと七瀬が思い付いたように声をあげる。

「そういえば、今までののは全部ゲリラライブだったんだよな。」

……だったら、いつそのこと告知してみるのはどうだ？」

「「「「「.....」」」」」

七瀬の口から予想外の案があがると、ガルデモのメンバーは、しばしの間沈黙していた。

第23話『M Y s o n g (後編)』

校長室

「告知ライブねえ……いいじゃない、いつものゲリラライブよりずっと多くのNPCを集められそうだし、今回の陽動にはピッタリよ」

七瀬とガルデモの提案に対し、ゆりが賞賛すると、七瀬達は安堵の表情を浮かべた。

「それじゃ、チラシの作成とかはこっちでやっつくから、当日は頼むわよ?」

言われると、ガルデモのメンバーは頷いて了解していた。

ライブを夜に控え、熱気の入った練習をするガルデモの演奏に耳を傾けながら、七瀬は廊下に警戒する。

(……今までにないくらいの規模ってこともあって、大分熱入ってるな)

七瀬がそんなことを考えていると、

「おっと」

不意に、ひさ子のギターの弦が切れた。

「悪い、直ぐ張り直す」

「ふう……じゃあ休憩」

岩沢が言うと、一同は小さくため息をつき、それぞれ楽な体勢をとる。

一方で岩沢は、廊下の方を見て何かに気付いた様子でそちらに歩き出した。

「ちょっと抜けるから、ひさ子が弦張り終わったら教えて」

「分かった」

七瀬が頷くと、岩沢は教室を出る。

それを見送ると、七瀬は他のメンバーと向き合った。

「いつも以上に熱入ってるな」

「そりゃあ、ガルデモ結成してから初めての告知ライブだからね。熱も入るよ」

ひさ子が応えると、七瀬は苦笑する。

「まあ気持ちはわかるけどな。」

俺も、ライセンス取ってから初めての試合の前は、必死にトレーニングしてたしな」

そんなやり取りをしていると、今度は関根も声をあげる。

「でもさ、やっぱり一番熱入ってるのは、岩沢先輩だよな」

すると、七瀬は相槌を打ち、

「それだけアイツが、音楽が好きってことだな」

「音楽キチだからね」

ひさ子が言うと、一同はしばしの間苦笑していた。

そうしていると、ふと七瀬は思う。

（生きてた時なら、こんな音楽漬けの毎日、絶対に送れないからな。

岩沢からすると、これ以上ない程に充実した毎日で、もう未練なん

て……無くなったら、あいつはどくなるんだ？

「ん？どうしたのさっさん？」

不意に脳裏を過ぎった不安で神妙な面持ちになる七瀬に、関根が尋ねる。

すると彼は、ハッと我に返り、

「……いや……何でもない」

ごまかすように言って、彼は微笑を作っていた。

『いい？今回は最小限の人数で作戦を行う。
作戦決行は本日1900。』

オペレーション、スタート！』

ゆりからの通信を確認すると、遊佐は幕の閉じられたステージから体育館の中を見回す。

「少ない……」

疎らな人影を見ると遊佐はそんな眩きを漏らしていた。

一方で、その頃実動班では、

「……や、これって、単なる女子の部屋荒らしじゃないかよ！

犯罪じゃないか！」

「おい！騒ぐんじゃねえ！」

「貴様何をする！」

女子寮だぞ、電気を消せ！」

天使の部屋を荒らす一同に対して声を荒げる音無が、七瀬、松下、野田の三人に取り押さえられていた。

一曲目の演奏が終わるが、体育館の集客率は以前として上がらず、岩沢に焦りの色が見え始めている。

二曲目からいきなり勢いのあるナンバーが流れると、演奏に聴き入っていた遊佐がリズムをとり始める。

そんな中、

「こら！お前達！」

騒ぎを聞き付けた教室達が、体育館に入ってきた。

その後ろについて入館する天使を見ると、遊佐は反応する。

「……天使が出現しました」

『了解』

『何か問題が起きたら、直ぐに呼べよ？』

ゆりと七瀬が無線で応えると、遊佐は小さく頷き、相槌を打っていた。

教師がステージの上に踏み込むと、女子達は取り押さえられていた。

そんな中、がっしりした体躯の体育教師と思われる教師が、声を荒げる。

「今までは大目に見てやってただけだ！
頭にのるなっ！」

生徒達を威嚇するように怒声を散らすと、体育教師は岩沢のギターを掴んだ。

一方その頃天使の部屋では、

「おい、まだなのか？」

「そんなに早くは終わりませんよ！」

ガルデモが拘束されたことを聞き焦る七瀬に対し、竹山が応える。

すると、七瀬はゆりに向き直り、

「ゆり」

「……はあ…分かったわよ。」

好きにきなさい」

「ありがとう、恩に着る」

ゆりの言葉を聞いて、七瀬は部屋を後にする。

その後ろ姿を見ると、ゆりは再びため息をついた。

「……仲がいいのは分かるけど、ちょっと必死すぎね……教師を殴り倒さなきゃいいけど」

彼女のぼやきを聞くと、日向や音無などは思わず苦笑していた。

「これは捨ててもかまわない？」

「…触るな」

「はあん？」

ぼそりと聞こえた岩沢の言葉に、教師は顔をしかめた。

「……………それに…それに触るなあ！」

叫び声をあげると、岩沢は押さ付けていた教師を振り払い、体育教師からギターを奪い取る。

それに合わせ、ひさ子も教師を振り払いステージ裏へと走り出し、それを追いかけようとする教師に対し、遊佐が足を掴んで転ばせた。

そして、追い詰められた岩沢がギターの弦を弾くと、その音はスピーカーを通じ学校全体に響き渡った。

演奏が始まると、全校生徒がその曲に聴き入る。

「はあ……………はあ……………」

肩で息をしながら体育館へ向かい走ると、七瀬は足を止めることなく、その放送に聴き入る。

歌いたい歌を歌えなかった彼女の生涯を載せた歌詞。
それは聴く者の心に響き渡る。

(今、岩沢は歌いたい歌を歌えてる……なら、これを歌い終えたら、アイツは……)

そんな不安を振り払うように、彼は走り続ける。

そして、七瀬が体育館の扉を潜ったとき、同時に岩沢は歌い終えた。

「……………」

ゴトツと音をたて、岩沢のギターが床に落ちた。

「……………岩沢？」

ひさ子のその言葉に、応える者は既にいない。

ステージ上に横たわるギターを見ると、七瀬はただ、その場で立ち尽くしていた。

第24話『Girls Dead Monster（前編）』

音楽室

夜の校舎に、重低音のリズムが響く。

音の本には繊細な髪を振りながらベースを演奏する女生徒と、床に腰を下ろしてそれを見守る男子生徒の姿があった。

「……いつまでそうしてるつもりだ？」

不意に男子生徒……七瀬が声をかけると、関根は手を止めた。

「過度の練習でお前が倒れたら、ひさ子や入江が心配するぞ」

「ありゃ？もうこんな時間か。」

いやー、時間の経過を体感出来なくなる程の、自分の集中力に驚きだよ」

いつものようにケラケラと笑い、関根は言うが、七瀬の表情には笑顔を見えない。

「……お前、やっぱり無理してないか？」

問い掛けられると関根は、

「そんなことないって。」

ほら、いつも通りの笑顔がキュートな、しおりんだよ。」

「……キャラ崩れかかってねえか？」

ぶりっ子を彷彿とさせる関根の行動に、七瀬は苦笑しながらツッコミを入れた。

すると彼女は苦笑しながら後頭部を搔く。

「あはは……ぶりっ子はちょっと無理があつたね」

「まあ似合わないわけじゃないが、普段と掛け離れすぎだな」

そんなやり取りをすると、七瀬は立ち上がって裾についたホコリを掃う。

「泣きたいなら泣いとけよ。」

入江だつてわんわん泣いてたんだ。

お前が泣いたつて、文句言うやつはいねえよ」

その言葉を聞いた途端、関根は俯いて表情を隠す。

「……やだなあ、さっさん。」

ひょうきん者の私が泣くわけないじゃん。

考え過ぎ」

「……………そう言うのなら、何で泣きそうな顔してんだよ」

目尻に浮かんだ涙を俯いて隠す関根に言うと、七瀬は彼女の頭にポンと手を乗せた。

「お前が笑ってないと、こっちが調子狂うからな。」

泣きたいだけ泣いて、またいつも見たいに笑えよ」

優しく微笑すると、七瀬は彼女の頭を撫でる。

すると関根は、彼の胸に顔を埋め、ギュッと服を握りしめた。

決壊したように嗚咽混じりの泣き声をあげる彼女の髪を優しく撫でる。

これまで溜めてきた思いを溢れさせるように、関根は止めどなく涙を溢れさせた。

「……………まったく、こんなになるまで我慢するくらいなら、最初から泣いとけばよかったろ？」

そんな七瀬の言葉に、啜り泣く声が返ってくる。

(……………まあいいか……………こうやって俺が支えてやればいい話だしな)

女子寮玄関前

泣き疲れて眠ってしまった関根を背負い、七瀬は女子寮に近づく。

「……あ、そういえば、この時間じゃ俺の中には入れないよな……」

ふと呟くと、七瀬は女子寮を見上げる。

「……どうしたもんかな」

途方にくれて立ち尽くしていると、

「何やってんの？」

不意に後ろから声をかけられ七瀬が振り向くと、そこには呆れた表情を浮かべるひさ子の姿があった。

「ひさ子」

「関根、やっぱり泣いてたの？」

「……ああ、まあしょうがねえよ。」

コイツも入江もひさ子も、岩沢とずっと一緒にやってきたんだろ？」

「……ああ、一人でギター弾いて歌ってた岩沢に私が声かけて、入江と関根も加わって、それからずっと一緒にライブやってきた」
そんなやり取りをしていると、七瀬はふと彼女に問い掛ける。

「……………これからどうするつもりなんだ？」

「『どう』ってそりゃあ、残った三人でライブを」

「……………ギターとヴォーカル抜きでか？」

「……………」

ひさ子が答えに詰まり黙り込むと、

「……………はあ……………肩肘張ってそのメンバーにこだわっててもしょうがねえだろ？」

どうにかして、ヴォーカルとギターやってくれる奴探そうぜ」

「っ！岩沢の代わりなんていない！！！」

七瀬の言葉に、ひさ子の怒号が飛ぶが、七瀬はさして動じることもない。

「んなこと分かってるよ。」

何も岩沢の代わりを探せなんて言ってねえ、俺が言ってるのは、今までのガルデモとは違う新しいガルデモを作れってことだ」

「……新しい…ガルデモ」

「岩沢は自分の歌いたい歌を歌って満足したんだ。

アイツがいなくなったのに、その歌だけ引きずってても仕方ないし、岩沢もそんなことは望まないだろうよ」

「……そうだね……いつまでも岩沢におんぶに抱っこなんて、性にあわないしね。」

岩沢に胸はって聴かせられるようなライブをしないと」

落ち着いた様子でひさ子が言うと、七瀬は微笑んで頷く。

「そうと決まれば、早速スカウトだ。」

さっさんも手伝ってくれよ」

「ああ……でも、その前に」

「その前に？」

「コレ、さっさと連れてって貰えるか？」

「あ、ごめん。すっかり忘れてた」

七瀬が自分の背中で寝息をたてる関根を示して言うと、ひさ子はクスクスと笑っていた。

第25話『Girls Dead Monster（後編）』

音楽室

岩沢が消えた翌日、ひさ子と七瀬は関根と入江を音楽室に呼び出し、昨夜話し合った内容を彼女達に話した。

すると、関根は拗ねた様子で頬を膨らませる。

「そういうこと決めるなら、私とみさきちにも相談してよ」

「そうですよ。」

大体、何でガルデモのメンバーじゃない相楽さんに相談して、私達に相談してくれなかったんですか？」

関根に続いて入江も不満を口にする、ひさ子と七瀬は苦笑しながら応える。

「仕方ないだろ、あんた達昨日は話できる状態じゃなかったんだから」

「入江は泣きじゃくってたし、関根だって」

「わ、わー!？」

七瀬が言いかけた途端に、関根が彼の口を手で塞いだ。

それを見ると、入江は小首を傾げて二人に尋ねる。

「え？しおりんが、どうかしたんですか？」

すると、関根は顔を赤くしてごまかし始めた。

「な、何でもないから!？」

「でも……………」

「え、えっと……………あ、ほら！」

早く新しいヴォーカル探さないと。

行く、みさきち」

「え？ちよつと、しおりん？」

一方的に話を進めると、関根は困惑する入江の手を掴み、音楽室を去って行った。

「……………何だったんだ？」

二人のやり取りを見てほうけていた七瀬が言うと、ひさ子が彼に尋ねる。

「あんだ昨日、関根に何かやったの？」

「ん？『何か』って何だよ？」

尋ね返されると、彼女は多少考え込む。

「……うーん…例えば、泣きそうになった関根を、ギュッと抱きしめたとか？」

「あゝ……それはやったな」

「どう考えてもそれが原因だね」

「……そういうもんか？」

「……女の子ってのは、そういうもんなんだよ」

「……何だが、女つてのが分からなくなってきたんだが」

訝しむような表情で七瀬が言うと、ひさ子は呆れた様子でため息をついていた。

「ん？」

ふと足を止めると、七瀬は聴こえてきた演奏に耳を傾ける。

(……正直、素人の俺からしても下手だが、何だかこう……一生懸命さが伝わってくる曲だな)

そんなことを考えながら、音の方へと向かうと、そこには数人の観客の前で演奏するユイの姿があった。

「……あれは……いつかのガルデモファン」

呟くと、彼はしばらくの間、ユイのライブを見守る。

……決して上手いわけではないが、ただひたむきに歌うその姿に惹かれ、徐々に観客の人数も増えていく。

「……まったく、お前が観客より楽しそうな顔して、どうすんだよ」

優しい微笑を見せると、七瀬は小さくため息をついていた。

「イエイイ！！皆、今日は来てくれて、ありがとーっ」

演奏が終わり、ユイが声をあげると、しばらくして観客は散り散りになり、中庭の人影は疎らになる。

それを見ると、ユイは大きくため息をついて、花壇の端に腰掛けた。すると、

「ほらよ」

「ひゃっ!?!」

不意に頬に冷えたミネラルウォーターのペットボトルを当てられると、ユイは間の抜けた声をあげる。

振り向くとそこにいたのは七瀬だ。

「先輩」

「よ、さっきのライブ見てたぜ」

「そうなんですか」

それでそれで、どうでした？」

瞳を輝かせながらユイが尋ねると、七瀬は顔を引き攣らせながら、

「いや、それはその……………」

「ほらほら 遠慮せずに賞賛の言葉を投げかけてもいいんですよ？」

「……まあ、一生懸命さは伝わったし、なんて言うかいい感じだったけど」

「でしょでしょ 私のテクに痺れたでしょ？」

「……正直言つて、下手だったけどな」

「……………へ？」

最後の一言を聞くと、ユイは間の抜けた表情を浮かべた。

対して七瀬は、多少言い辛そうに続けた。

「何て言うか、演奏もたどたどしい感じがしたし、歌うのとギターの両立に手間取って、よれよれな気がする」

「……………やっぱりまだまだですよね。」

私、岩沢さんに憧れてて……岩沢さんから歌で伝えてもらったこと、私も伝えてみたくて……でも、やっぱり無理ですよね」

俯いて言うと、ユイは今にも泣き出しそうな顔で唇を噛み締める。

それを見ると七瀬は、小さくため息をついてた。

(……………まったく、こいつといい、本当は弱い癖になんでこいつ気丈に振る舞おうとするかな)

そんなことを考えながら、七瀬はユイの頭にポンと手を乗せ、

「お前は、そこで諦めていいのか？」

彼女に問い掛けた。

するとユイは、間の抜けた表情で彼を見上げる。

「え？」

「お前の憧れてた岩沢は、同じ状況に陥った時に諦めると思っか？」

「い、岩沢さんが諦める訳無いですよ！」

声を荒げて返されると、七瀬は苦笑しながら彼女の頭を撫でる。

「だったら、お前ももう少し頑張ってみろよ。」

岩沢みたいになりたいんだろ？」

問い掛けられると、ユイは小さく頷き、ギュッと力強くギターを握り締めていた。

それを見ると、七瀬は小さく頷き、優しげな微笑を見せていた。

第26話『Day game(前編)』

校長室

「コイツが岩沢の変わりだど？」

「有り得ねえ」

野田の言葉に対し、藤巻も同意する。

対して話題にされていた人物……戦線の制服に小悪魔を彷彿とさせる装飾をした少女、ユイは、

「ユイっていいます！」

よろしく願ひします」

可愛らしく挨拶し、一同の様子を伺う。

対して、まずは高松が口を開いた。

「いいですか？『Girls Dead Monster』はロックバンドですよ」

「アイドルユニットにでもするつもりか？」

「まあまあ、聞くだけ聞いてやってくれよ」

野田も声をあげると、七瀬がなんとかフォローしようとし、それを聞いたユイは七瀬に同意するように反論する。

「相楽先輩の言う通りですよ。ちゃんと歌えますから！」

どうか、聴いてから判断して下さい！」

そして、彼女は歌い出した。

しばらくの間、戦線メンバーはその一生懸命さの伝わる歌に、一応聴き入ってはいたが、歌唱を終えマイクパフォーマンスに入った時に問題が発生した。

「イエーイ！皆、今日は来てくれてありがとうーっ！」

勢い良くマイクスタンドを蹴り上げると、マイクのケーブルはユイの首に絡まり、スタンドが天井に突き刺ささって彼女の身体を釣り上げる。

それを見ると、室内は静まり返る。

「何かのパフォーマンスですか？」

「デスメタルだったのか」

「いや、事故のようだぞ？」

高松と藤巻の言葉を否定すると、音無は七瀬の方を向く。

「……相楽、お前本当にアレで大丈夫だと思ったのか？」

問い掛けられると、七瀬は顔を逸らして沈黙していた。

「とんでもない、おてんば娘ね。」

クールビューティだった岩沢さんとは正反対

ゆりが言うつと、高松が眼鏡を押し上げ、

「ガールズデッドモンスターのヴォーカルとしては如何なものかと」

「うーん……やっぱりムリか」

「別の物を探せないか？」

「そうするか」

高松に続き、七瀬、松下、日向の三人が言う。

すると、床に倒れてグッタリとしていたユイは、直ぐさま立ち上がり反論した。

「コラアアア！」

ちゃんと歌えてたたる？

これでも岩沢さんの大ファンで、全曲歌えるんだからな！！」

対して日向達は、

「心に訴えるものがなかったな」

「ありませんね」

「ねーな」

「……やっぱり人によりけりか」

日向、高松、藤巻、七瀬の順に言われると、ユイは再び声を荒げる。

「コラアアア！！」

そんな曖昧な感性で若い芽を摘み取りにかかるなあ！

と言うか、相楽先輩はどっちの味方なんですか！？

それでもお前ら先輩かあ！！」

「うるさい奴だな」

「既に言動になんありだな」

「どっつするの？」

「……やる気だけはありそうね」

「そこを買って連れて来た訳だからな」

「単にミーハーなだけだぜ」

日向に続き、野田、大山、ゆり、七瀬、藤巻の五人はそんな意見をあげるが、

「……後はバンドメンバーに任せましょ？」

ゆりは了承はした様子で言う。

するとユイは、瞳を輝かせて歓声をあげた。

「ホントですかあ!？」

やったあ ギターのひさ子さんと組めるっ

ひさ子さんのあの殺人的なりス捌き、たまんないツスよねえ？

あつたまどうなってんスカねえ」

それを聞いた途端、戦線の一部から声があがる。

「クビだな」

「クビですね」

「まあ、クビになるだろうな」

「バンドがこんなんじゃない、球技大会で大々的な作戦は行えないわね」

「球技大会？」

「そんなものがあるのか？」

ゆりの言葉に対し、音無が尋ねる。

「そりゃあるわよ。」

普通の学校なんだから」

「大人しく見学か」

日向が言うが、

「もちろん参加するわよ」

「参加したら消えてなくなるんじゃないのか？」

「まともに参加する訳ねえだろ。」

なあゆりっぺ？」

音無の疑問に対して七瀬が言うと、ゆりは応える。

「もちろんゲリラ参加よ。」

いいあなた達？

それぞれメンバーを集めたチームを作りなさい。

一般生徒にも劣る成績を納めたチームには……死よりも恐ろしい罰

ゲームよ」

ゆりが不敵な笑みを浮かべると、戦線メンバー達は身震いをして怯えていた。

大食堂、ランチコート

七瀬はガルデモのメンバーと合流すると、昼食をとりながら雑談していた。

「ってことで、今度は野球をすることになった」

「ふーん……今度は野球かあ」

七瀬の言葉に適当な相槌を打つと、ひさ子は食事を進めていく。

一方で関根と入江は、

「まあ、さっさんはプロスポーツ選手なんだし、これ以上ない程に有利だよな」

「相楽さんならきつと、ドッチボールの時みたいに大活躍できますよ」

七瀬を応援するように言うと、彼女達はそれぞれ料理に箸をつけた。そうしていると、不意に彼等に声がかけられる。

「相楽くん、ひさ子さん、少しお話宜しいですか？」

よくある勧誘のような言葉に振り向くと、そこには高松の姿があった。

「高松、一体何の用なの？」

「球技大会で、私のチームに参加していただけないでしょうか？」

ひさ子の質問に高松が応える。

すると七瀬は、訝しむような表情を彼に向けた。

「……ひさ子が同じチームなことはいいけど……他のメンバーもちやんと戦力になりそうな奴らなんだろうな？」

そんな問い掛けに対して高松は、指で眼鏡を押し上げ、

「現在は主要な戦闘員からは、私と藤巻くんの二人がおり、今後はTKを勧誘するつもりです」

「運動能力はともかく、おつむの方で問題がありそうなメンバーだ

な。

……まあいちゃ。

人数揃わなくて出場できないよりはましだし、参加してやるよ」

「ひさ子さんはどうしますか？」

「それなりの礼が貰えるなら、協力してあげてもいいけど？」

その回答に高松が小さく頷いて答えると、ひさ子も了承する。

「んじゃ、さつさと残りのメンバー集めてくるか」

そう言うと、七瀬は手早く食事を済ませるために、目の前にあるカ
レー掻き込んでいた。

第27話『Day game(後編)』

球技大会当日、夏のキツイ陽射しが降り注ぐ中、七瀬はあるチームに見てはいけないものを見たような視線を向ける。

「……………おいおい、何だあの面子？」

七瀬が言つと、ひさ子も同じ方向を見る。

するとそこには、日向、音無、ユイにハルバートを持ったままの野田、何故か箒を指に乗せている椎名、NPCの女子三人の異色の取り合わせがあった。

「うわぁ……………酷いなあれは」

ひさ子も引き攣った顔で言い、彼らは顔を見合わせて苦笑していた。

「プレイボール！」

審判のNPCの声があがると、七瀬達のチームはNPCのチームとの試合を開始した。

一番バッターの七瀬はバッターボックスに立つ前に、バットの握りを念入りに確認し、二、三度スイングする。

「……うん…どうにも振って叩くつのは、どうにも馴れんな」

そんな呟きを聞くと、後ろで控えていたひさ子が、彼に問い掛けた。

「さっさん、ひよっとして野球そんなに得意じゃない？」

「いや、ポピュラーなスポーツなら、不得意つてのではないな」

「ホントに大丈夫？」

「当たり前だ。」

球見てバットに当てて走ればいいんだろ？」

そんなやり取りをすると、ひさ子は少々不安そうな表情を見せながらも、七瀬を送り出した。

「……うっし！いつちよやるか」

軽く気合いを入れると、七瀬はバットを構えた。

それを確認して、相手チームのピッチャーは振りかぶって、大きく手を振りボールを投げる。

「よっっ、ドンピシャー！…」

素早くバットを振り抜くと、七瀬は投擲された白球を弾く。

すると打球は、低い軌道を描き右中間を抜け、フェンスに直撃した。それを慌てて拾い上げ、ライトは塁へと送球しようとするが、七瀬はその健脚で既に三塁に到着し、そこで足を止めていた。

「……こんなもんかな（……拳で叩くのと違って、イマイチ打ったときの感触が心もとないんだよね）」

呟くと、七瀬はバッターボックスに視線を向けた。

大会が進んでいくと、遠巻きに観戦していた遊佐が、ゆりに定時連絡を入れた。

「日向チーム、三回コールド勝ちです」

それを聞くと、ゆりはニヤリと不敵な笑みを浮かべ、

『よし。』

順当に戦線チームが勝ち上がって来てるわね。

皆、死より恐ろしい罰ゲームとやらを恐れて必死ね。
滑稽だわ』

「戦線では、ゆりっぺさんに罰ゲームを受けた者は、発狂し人格が変わると有名ですから」

『……………そうね。』

つて、どんな罰ゲームよ!』

「いや、私は受けたことはありませんので」

『あたしだって大したことな、おっと!』

あぶり出しに成功ね。

こっちは武器もなし、あるのはバットにグローブ、果たしてどんな平和的解決を求めるのかしら?

見物だわ』

そんなゆりの言葉を聞くと、遊佐はグラウンドに視線を向ける。

するとそこには、ユニフォーム姿の一般生徒達を連れだした天使の姿があった。

「……あなた達のチームは参加登録をしていない」

「別にいいだろ？」

参加することに意義がある」

天使の言葉に対して、日向が反論する。

すると、天使の隣にいた学帽を被った生徒が声をあげた。

「生徒会副会長の直井です。」

我々は生徒会チームを結成しました。

あなた達が抱えるチームを、我々は正当な手段で排除していきます」
そんなやり取りを端で聞いていた七瀬達は、キツチリとユニフォームに身を包んだ生徒会チームを見て、少々不安げな様子を見せた。

「おいおい、アレ全員が野球部員だろ？」

「こっちは運動神経いだけで素人だっというのに」

ひさ子が付け足すと、チームメイト達は困惑している。

そんな中、高松が眼鏡を押し上げ、いつものように知的に話す。

「ここで不平をあげていても、あのチームと戦うことは変わりません。」

覚悟を決めて、全力で挑みましょう。」

しばらくして、竹山チームが生徒会チームに敗退し、続いて七瀬達のチームが生徒会チームと試合をしていると、遊佐はそれをフェンスの外の植え込みから覗いていた。

すると、

「「遊佐^{さん}」」

不意に二人組に声をかけられ振り向くと、そこには関根と入江の姿があった。

「今どんな感じ？」

関根が尋ねると、彼女はいつもの調子で淡々と答える。

「……現在、高松チームは生徒会チームに6点負けています」

「ええ！？相楽さんのチーム、負けちゃってるんですか？」

入江が驚きを隠せない様子で言うが、

「ゲームセットー！」

審判の声が上がると、ファーストを守っていた藤巻が、木刀を地面にたたき付けていた。

「竹山チームに続き、高松チームも5回コールド負けです。」

遊佐が現状を報告すると、ゆりは忌ま忌ましそうに言う。

「あんなの反則じゃない！」

残り1チームか……どこ？」

「日向さんのチームです。」

「天使にさらにぎゃふんと言わせようとしたのに、まったく使えない連中ね。」

遊佐達がそんな話をしている間にも、決勝戦の両チームは整列する。

「ついに来てやったぜ。」

球技大会決勝戦、グラウンドでは天使の用意した野球部チームと日向チームが向かい合う。

「ではこれより、決勝戦を始めます。」

審判が言うと天使達は日向達に構うことなくベンチに戻っていく。すると日向は、悪態をつきながらベンチに戻っていった。

しばらくして初回裏に入ると、攻撃はともかく防御がざる状態の日向チームは、攻撃こそ4点先取していたものの、一気に3点を取り返される。

「……タイム！」

一度試合を止めると、日向はピッチャーである音無に駆け寄る。

「やべーな。」

流石に野球部のレギュラー相手に抑えきれねえ

特にウチの外野はざるだから……おおお！？」

日向が驚きを隠せない様子で振り向くと、先程までだれもいなかったそこには、松下の姿があった。

「ああ、食券余ってたから、奢ってやったんだ」

「お前かよ」

おしくよくやった！

あいつは食い物の義理は忘れない、これで外野の守備もばっちしだぜ！」

日向の声と同時に、三塁側からも声があがる。

「しんぱーんっ！選手交代」

それを聞いて二人が振り向くと、三塁についていたNPCの女生徒に歩み寄る七瀬の姿があった。

「悪いんだけど、代わってもらえるかな？」

「え？あ、はい」

七瀬と交代で女生徒が離れていくと、日向が歓声をあげる。

「相楽！？」

「やられっぱなしは性に合わないんでな。」

手伝わせてもらっぜ？」

言われると、日向と音無は歓喜の表情を見せていた。

二人が参加してから日向チームは防御面でも天使チームと拮抗し始め、ついに迎えた最終回では、日向チームが1点リード状態で裏を迎える。

「タイム！」

……ふう……やべえ、抑える自信ねえよ。
ピッチャー、代えて……」

音無が声をかけるが、日向は呆けて立ち尽くしている。

すると、それを見た七瀬も訝しむ様な表情で駆け寄ってきた。

「……どうした日向？」

「何ボーっとしてんだよ？」

二人に尋ねられると日向は、

「え？あ、いや……昔、生きていた頃に、似たようなことがあった
っけ？ってな。」

「すげえ大事な試合だったんだよ。」

「肩を震わせながら語る日向を見ると、七瀬は顔を逸らして下がって
いく。」

（……アイツ、この試合に勝ったら、もしかして消えちまうかもな）

そんなこと考えると、七瀬は日向に視線を向ける。

彼の脳裏にあったものは、最後に見た岩沢の姿だ。

生きていた時の未練、歌えなかった歌を歌い続けた彼女の表情は、この世界には似つかわしくない程に爽やかで、これ以上ないほどに幸せそうだった。

(……もしかしたら……もしかしたら、この世界から消えれるってことは、幸福ってことなんじゃないのか？

だとすると、それを止めることは、本当に正しいのか？)

七瀬が葛藤している間にも、試合は再開され野球部員の打ち上げた球は、なだらかな放物線を描き日向の元へと落ちていく。

呆然とした表情で落ちるボールに手を伸ばす日向の姿は、今にも消え入りそうな印象を、七瀬と音無に与える。

「日向!？」

音無が声をあげた瞬間、

「隙ありいー!」

日向がボールをキャッチする直前に、突然ユイが声を荒げ、日向を蹴り飛ばしキヤメルクラッチを掛け始める。

その光景に聖二が呆然としている間にも一人目のランナーはダイヤモンドを走り抜けた。

「ホームイン!」

そして、日向が反撃に移ると、今度は二人目のランナーがホームインし、試合は一気に逆転されていた。

第28話『Truth and scientist（前編）』

「……………あゝ、不完全燃焼」

七瀬が不満を口にすると、隣を歩いていた関根が苦笑しながら言う。

「まあ、確かにアレはね」

「なんか疲れるまで身体動かしてえなあ」

「どうか適当に走ってくれば？」

「……………そうするかな……………ん？」

ふと何かに気付いた様子で七瀬が振り向くと、そこには花壇を眺めながらノート片手に何かをしている女生徒だ。

「あの制服は、戦線の人間……………だよな？」

まったく見覚えがないんだが」

七瀬が言うと、関根もその人物を見て、

「あ、クッチー」

「ん……………ああ……………え〜と、確かガルデモの……………」

「関根だよ。」

それより、何ヶ月も姿見なかったけど、どこ行ってたの?」

「ちよつと下に潜っててね。」

そつちの、そこそこいい男は?」

指差されると、七瀬は訝しむような表情を浮かべ、彼女に尋ねる。

「……もしかして、俺のことか?」

すると、その女生徒は頷いて肯定した。

「そうそう、一見細いように見えて、これ以上ない程に引き締まった感じが、フェティズムを誘うわ」

「どこの痴女だよ」

「あら、積極的な女性はお嫌い?」

不敵な笑みを浮かべ、女性は艶のある声を出し、人差し指で七瀬の顎を撫でる。

途端に、関根が二人の間に割って入った。

「はいはい、女つけのなさそうなのを誘惑しないの」

「そうかい?充分モテそうな顔してるのに……あゝ…成る程ね」

関根と七瀬の姿を交互に見ると、彼女はニヤリと嫌らしい笑みを浮かべる。

すると、関根は顔を赤くして必死に否定し始めた。

「そ、そういうのじゃないって!!」

「顔真っ赤にしちゃって、しおりんは可愛いなあ」

二人がそんなやり取りをしていると、端で見ていた七瀬は、呆れた様子で彼女達を見ながら声をあげる。

「……………まったく話が見えてこないんだが……………結局そいつは誰なんだ？」

対して女生徒は、うつすらと笑いを浮かべながら、

「ああ、私ね。」

私は朽木 くちき 美亜 みあ。

戦線では結構古株で……………とりあえず、ドンパチはやらないわね。皆は私のことをクツチーと言っわ。

それで、君の方は？」

「半年くらい前に戦線に参加した、相楽 七瀬だ」

「……………ふん、七瀬くんか……………いい名前ね」

「そういえば、今までギルドでも見かけなかったけど、一体どこにいたんだ？」

ふと疑問に思い、七瀬は尋ねてみる。

それを聞くと、朽木は今思い出したかのような反応を見せた後に答える。

「私は主に、ギルドの更に下にある、まだ探索されていない所の探索をしてただけど……何人か前に、突然崩れてきてね。」

生き埋めにされた状態から数日かけてなんとか脱出して、今に至るつてわけ」

彼女の話を知ると、七瀬は関根に囁きかけた。

「……それって、確実にチャーがギルドを爆破した時だよな」

「……それ以外に考えられないって」

「……あの下にいたって……よく戻ってこれたな」

「クッチーも結構人間離れしてるからね」

密談すると、二人は呆れた様子で朽木を見る。

すると、七瀬はふと彼女の手にあるノートを見て、訝しむような表情を浮かべた。

「ところで、何でまたノートに花の絵なんて描いてたんだ？」

「ああ、これね。」

別に花の絵を描いてた訳じゃないわよ」

そう言つて彼女が見せたノートには、絵ではなくただ延々と続く数式が書かれていた。

「……頭痛くなつてきそうなノートだな」

「あら、あなたもアホの子の方なの」

「まあ、高校二年で中退してるし、頭がいいとは言えんな」

「私だつて高校なんてろくに行つてなかつたわよ」

「胸を張つて言うことじゃねえだろ」

二人の掛け合いを聞くと、関根も呆れた様子を見せていた。

「それで、その数式はなんなんだ？」

脱線した話を戻して、七瀬は尋ねる。

その問いに対して朽木は、

「真理よ」

一言で答えた。

「真理？」

「そう、真理。」

……超弦理論って知ってるかしら？」

「いや、さっぱり分からん」

「……世界はすべて、0に近い小さな粒子ではなく、弦を弾いた時に生まれるような、波で出来ている。」

まだ不完全ではないこの理論を、私は無限に時間の与えられたこの世界で、完成させようと思うのよ」

「ふ〜ん……で、それはどれくらいで完成するんだ？」

「さあ？1000年先になるか、2000年先になるか……」

「随分と先の長い話だな」

「だからこそ、この世界の無限に続く時間が必要なのよ」

そう言って笑う朽木を見ると、七瀬は何故かしばしの間、間の抜けた表情を浮かべていた。

第29話『Truth and scientist（後編）』

校長室

「成る程、それでギルドが廃墟になって、ガルデモのヴォーカルが代わってるわけ」

朽木が言うと、彼女と向かい合って座っていたゆりが、小さく頷いて肯定した。

すると彼女は、ため息をついて窓の方を見る。

「……新しい人が入ることに、古株が消えてくわね」

「……いやなこと言うわね。」

まるで私達も消えるみたいじゃない」

「どうせ何時かは消えるでしょ？」

「……ええ、神の顔面をブン殴れたらね。」

そんな話より、そっちの調査は何か発見はあったの？」

ふと会話を打ち切って、ゆりが問い掛ける。

対して朽木は、一瞬目を細めた後、退屈そうにテーブルに腰掛け、

「……ゆりが求めてるようなのではないわよ。」

「オールドギルドの下に行くと、そこからしたは何もない洞窟が延々と繋がっていたわ。」

「……そっちは？」

「天使の能力について、中々面白い発見があったわ」

「『天使の能力』について？」

「ええ、どうやら彼女は特殊なプログラムを使って、PCで自分の能力を開発してみたみたい」

ゆりの報告を聞くと、あまりの突拍子の無さに、朽木は間の抜けた表情を浮かべる。

「……えーと、それは一体どういう意味？」

「言葉の通りよ。」

PCに入ってたプログラミングのソフトで、ガードスキルを造ってみたい」

「……まったく、この世界はなんでもありね。」

超弦理論の次は、この世界の真理を調べようかしら」

そんなやり取りをすると、朽木は微笑を浮かべ、テーブルから下りた。

「さてと、それじゃあ、新しいガルデモの演奏でも聴かせてもらってこようかしら」

言いつと、朽木は校長室を後にする。

学習棟 A 空き教室

ユイをヴォーカルに置いた、新生ガールズデッドモンスターが練習をしていると、不意に教室のドアが開かれる。

「ん？」

演奏を止めてひさ子がドアの方を見ると、

「あ、クッチー」

「チャオ 皆久しぶり」

朽木が挨拶を返すと、ひさ子と関根が笑顔で反応した。

「ギルドの瓦礫で生き埋めにされてたんだって？」

よく生きてたね？」

「クッチーさん、お久しぶりです」

対して朽木は、微笑んでそれに応えた。

「そっちこそ、岩沢いなくなっちゃったんだって？」

「……あ…うん……… ちょっと前にね」

「……あの娘の歌、結構好きだったんだけどね。」

下に下りる前に、もっと聴いておけばよかったかな」

多少しんみりとした雰囲気で二人が言うと、一同の間にしばらくの間、沈黙が流れる。

すると、その沈黙を破るようにして、ユイが声をあげた。

「あ、あの！

これからは、私が岩沢さんの代わりに歌いますから、確かに岩沢さんがいなくなつて淋しいですけど、心配しないで下さい！」

そんな彼女に対して、朽木はまじまじと眺める。

「……これが新しいヴォーカル？」

尋ねられると、ユイ以外のガルデモのメンバーは頷いて肯定する。

「ふ〜ん……クールビューティの岩沢をヴォーカルにしたロックバンドが、アイドル色を入れるとは………英断だねえ」

感心とも呆れともとれる台詞を口にする、朽木は二、三度小さく頷き、

「新しいガルデモの歌、聴かせてもらえる？」

ユイに尋ねた。

それを聞くとユイは、瞳を輝かせて頷いた。

「はい！是非聴いて行ってください！！」

練習を終えると、朽木とガルデモのメンバーは、食堂を訪れていた。彼女達がランチコート内を見回すと、一部に戦線の男子が集まっている。

「ありゃ？皆何やってんだろっ？」

疑問の声をあげて関根が歩み寄ると、集団の中にいた七瀬が、彼女に気付いて振り返る。

「さっさん」

「ん？……関根」

「男子だけで集まって、何話してるの？」

「……聞かない方がいいと思うぞ」

「へ？」

「いや、今女の乳について話してるから」

そんな答えが返ってくると、関根は顔を引き攣らせた。

「……うわぁ……最低」

「男に純粹さを求めるなよ。」

思春期の男子は女子がいなけりゃ下ネタのオンパレードだぞ」

話しながら、二人は男子の集まりから離れて他のガルドメンバーのもとに向かう。

「そついえばさ」

歩きながら、関根が声をあげる。

「ん？」

「最初クツチーを見たとき、さっさん呆けてたけど、あれ何だったの？」

「あゝ、あれか。

あの時さ、自分のやりたいことを、時間も労力もまったく気にせず
にやってる朽木を見てたらさ、なんだか岩沢と被って見えたんだ」

「……そっか。

岩沢先輩とクツチー、そういう意味だと似てるもんね。

好きなことやってると、周りが見えなくなることか、そっくりだよ」

「ああ……でもさ」

言いかけると、七瀬は神妙な面持ちになる。

「ひよつとすると、夢を見る人間にとっては、あれが正しい姿なんじゃないか？」

「……確かに、そうなのかもね」

そんな掛け合いをしながら、二人は朽木達と合流した。

第30話『Stairway to Heaven』(前編)『

校長室

「……皆に集まってもらったのは他でもない。

これより、オペレーション、ハイテンションシンドロームを行う」

ゆりの声が響くと、室内に集まっていた戦線メンバーの間に、沈黙が訪れる。

すると、音無が混乱した様子を見せていた。

「え！？何でノーリアクション？」

対して高松が、

「それは、初めて聞くオペレーションですね？」

ゆりに問い掛ける。

「ええ、新しく編み出したの」

「ゆりっぺ、そいつはどんな作戦なんだ？」

「ギルド再建の目処も立ってないし、銃使ったのドンパチなんて出来ないだろ？」

野田と七瀬が言うと、ゆりは少し間を置いて答える。

「簡単な作戦よ。」

一日中、ハイテンションな行動をとり続ける。
それだけよ」

それを聞いた途端、一同は間の抜けた表情を浮かべた。

対してゆりは、不敵な笑みを浮かべて続ける。

「何をするのもハイテンション。」

移動の時は全力疾走。

ジュースを飲む時は一気飲み。

話し掛けるときは大声で。

笑顔も忘れずにね

……そうしてすべての行動をハイテンションで行い。
あたかも満喫しているかのように学園生活を送るの」

そんな彼女の説明を聞くと、全員が呆けていた。

「それが何になるってんだ？」

そもそも満喫しちまったら、消えちまうんじゃないのか？」

藤巻が問い掛けると、

「いや、消えはしない。」

実際はオペレーション通り、これはハイテンションを装い続けるだけの余興。

言わば罰ゲームのようなものだ！」

日向の言葉を聞くと、戦線メンバーは動揺を隠せない様子を見せた。

「そう、それは私達にとって苦行でしかないわ。」

でも天使はお人よし様だから、そんな私達を見て、『どうしてこんなに楽しそうに学園生活を謳歌してるにも関わらず、成仏して消えないのか』と不思議に思うはず。

すると天使はどう出るのかしら？」

「どうにか出るのか？」

「出るわよ」

音無の疑問に即答すると、ゆりは続けた。

「あたし達が学園生活を喜んで送っている。

それは成仏の条件のはず。

なのに、あたし達が一向に消えない。」

『一体全体どういうこと』と、これまで一度もなかったイレギュラーな事態を混乱し始める。

すると彼女は、コンタクトをとろうとするはず」

「まさか!？」

「そう、神に!！」

この世界に異常が起きてることを伝えにいくはず。その後を追って行けば、あたし達は導かれるのよ。

神の元へ!！」

それを聞くと、メンバー内から歓声上がる。

しかし日向が、訝しむような表情で、彼女に問い掛けた。

「そいつはスゲー作戦だが、俺達はどれだけ頑張ればいいんだ？」

対してゆりは、スクリーンにタイマーを映して見せる。

「今日の午前9時から作戦スタート、午後9時をもって作戦終了とする」

当然ながら、不満の声があがるが、

「因みに作戦が失敗したら……皆で一週間断食ね」

そんな発言に、当然ながら驚きの声が響くが、ゆりは気にかけることもなく続けた。

「因みに私は天使の監視役だから除外ね。

皆、よろしく」

「「「なっ!?!」」」

「悪魔のような人だ」

一同は驚きを隠せない様子を見せ、高松が声をあげた。

しかし、ゆりが気に止めるわけもなく、

「では、オペレーション……スタート!」

音楽室

「……ハイテンションって……私達も?」

ひさ子が問い掛けると、ガルデメンバーにオペレーション内容を

通達に来ていた遊佐は、

「……はい、つまり本日午前9時から、戦闘班、陽動班に関わらず、ハイテンションな行動をとってもらうことになります」

そんな説明を聞くと、ひさ子達と共に音楽室でくつろいでいた朽木が、多少感心したように声をあげる。

「ああ、あのオペレーション、本当にやるんだ」

「……クッチー、もしかして知ってたの？」

関根が問い掛けると、

「うん、私が提案したからね」

そんな発言が飛び出し、一同の間には静寂が訪れた。

すると、沈黙を破ってひさ子、関根、入江が三人同時に声をあげる。

「……あなた（あなた）の仕業か（ですか）！？」「」「」

対して朽木は、さして気まずい様子もなく、彼女達に応える。

「まあね。」

神にたどり着ける確率だって低くはないのよ」

「そついう問題じゃないから」

関根がツッコミを入れるが、朽木は不敵な笑みを浮かべ、

「あら？しおりんにはあんまり関係ないんじゃない？」

「へ？」

「相楽くんとイチヤイチャしてるだけで、充分に12時間を過ごせるんじゃない？」

「っ！？な、何言ってるの！？」

わ、私とさっさんはそんな関係じゃないし……そ、その……『イチヤイチャ』なんて……」

赤面して必死に否定する関根を見ると、ひさ子と入江は何故か感心した様子を見せる。

「……あの関根が乙女の表情してるよ」

「こんなに可愛いしおりん、滅多に見れませんよ」

彼女達が、そんなやり取りをしている間にも、オペレーション開始の時間は刻一刻と近付いていた。

第31話 『Stairway to Heaven (後編)』

「……うーん、日向達は野球で藤巻達は大食い、ガルデモは練習か……俺はどうするかなあ？」

七瀬がそんなことを呟いていると、不意に後ろから声をかけられる。

「あら、相楽くんじゃない」

振り向くとそこには数人の男子を引き連れた朽木の姿があった。

「何だそいつら？」

尋ねられると、彼女は不敵な笑みを浮かべ、

「思春期男子にはよだれものの企画だけど、相楽くんも一緒に来る？」

七瀬に問い掛けた。

学習棟A、空き教室

「……よし、準備完了しました」

映写機にPCを接続すると、竹山が朽木に呼びかける。

彼女はそれに対し、一本のUSBメモリを取り出し、

「はい、それじゃあ始めるわよ」

その声が響いた途端、一同からは大きな歓声があがった。

「ぬお！？……な、何だ？」

咄嗟に耳を塞ぎ、七瀬が驚きを隠せない様子を見せると、

「それでは、ご開帳」

言って、朽木はPCを操作した。

途端に、スクリーンには水泳の授業風景（主に女子の際どいシーンの映像が映し出される。

同時に、再び男子の歓声が響き渡った。

「……こいつら、演技じゃなく素でテンションが上がってるぞ」

「当たり前でしょ？」

「この世界にはこういう娯楽はないんだから」

七瀬に応えると、朽木は彼に問い掛ける。

「相楽くんだって、結構溜まってるんじゃない？」

対して七瀬は、さして表情も変えずに、

「まあ、そういうのもないわけじゃないが……俺としては、スクミズよりはチアの方がよかったな」

「……意外に欲望に忠実ね」

そんなやり取りをしながら、彼等はしばらくの間、映像鑑賞をしていた。

放課後になると、流石に全員に飽きが来たらしく、室内に沈黙にも似た空気が流れる。

すると七瀬は、

「はっ！？そっだ、オペレーション中だったんだ！」

思い出したように声をあげ、一同に呼びかける。

「お前ら！テンション上げる！」

一週間断食なんて、身がもたんぞー！！」

それを聞くと、他の面子もハッと我に返り、どうにかごまかそうと声を張り上げ始める。

そんな時、グラウンドからギターの音が響いた。

「グラウンドでライブか！？

調度いい、行くぜ野郎共！！」

『オオオオオ！！』

地響きのするような歓声をあげると、彼等は教室を後にした。

グラウンド

ガルデモが野外ライブを始め、合流した七瀬達と集まったNPCの観客達が、今か今かと演奏が始まるのを待ち侘びていると、そこに野球をしようとしていた日向達も現れる。

「何だ貴様ら？」

「何やってんだよ？」

野田と日向が問い掛けると、ユイはギターを鳴らしながら、

「野外ライブに決まってるだろうが！」

それを楽しみに皆が集まって来てるんじゃないあー！！

盛り上がっていくぞおおー！！」

『オオオオオオ！』

対して日向は、

「ここで今から俺達が野球すんだよ！」

打って走って守って青春の汗をかくんだよ！

この仲間に囲まれて幸せそうなバンド大好きっ子めがー！！」

「野球よりもバンドの方が青春だろうが!？」

この野球好き好きで、幸せそうな野球バカ人間が!！」

二人がそんな口論をしていると、

「いやいや、青春と言ったらダンスだぜ!

皆で踊るのが、一番幸せになれるぜ!！」

「そつだそつだ!皆幸せだぜ」

異常な程腹の膨らんだ藤巻と大山、それにやせ細ったTKが割って入る。

対して日向は、声を張り上げた。

「何だいきなり!？皆幸せそつだな?」

「ここをダンス会場にしたら、皆幸せだろうが!！」

「ダンスだと!？俺にも踊らせる!」

「楽しそうじゃねえか!

俺も混ぜろや!！」

藤巻の言葉に反応し、松下と七瀬が彼等の前に飛び出した。

すると日向は、ビシッと二人に指を差し、

「松下五段、それに相楽、今一番幸せそうなお前らに話がある！」

「ここは野球でショーブツ!!！」

「高松の言う通りだ！」

そんな混沌とした流れが続いていると、ついにそれまで呆れ果てて黙り込んでいた音無が、声をあげた。

「ならもう運動会でいいんじゃないかねえのかーっ!!！」

その言葉に一同が沈黙すると、彼は息も絶え絶えに続ける。

「もういいだろ、運動会で？」

一般生徒も、大勢集まってる。

これだけの人数で出来ることと言ったら、もう運動会しかねえ」

彼のそんな提案を聞くと、日向達は不敵に笑う。

「いいじゃねえか、運動会！」

青春の香りだ!!！」

「ええ、この肉体は運動会の為に作って来たようなものですから!!！」

日向と高松が言うと、

「上等だ！運動の為の筋肉というものを見せてやろう！！」

「いい腹ごなしになるじゃねえか。」

めっちゃ幸せになれるじゃねえか！！」

「なれるなれる！」

高松と同じように上半身裸になって肉体美を見せ付ける七瀬に続き、藤巻、大山も声をあげる。

同じようにユイも、ギターの弦を弾きながら声を荒げた。

「いくぞお！お前らあ！！」

『オオオオオ！！！』

ユイの言葉に反応し、NPC達も声を張り上げていた。

そして、運動会は始まる。

リレー競走、棒倒し、玉入れ、組体操、パン食い競走と、定番の競技が続くなか、競技は応援合戦に入った。

女子がチアガール姿で入場すると、男子からは一気に歓声があがる。

そんな中、運動会を端から見ていた朽木が、ふと七瀬に声をかけた。

「チアガールはどう、相楽くん？」

「ん？……ああ、可愛いんじゃないか？」

素っ気ない回答が返ってくると、朽木は多少訝しむ。

「あら？チアガール好きじゃなかったの？」

「そりゃあ好きさ、だからこそ今は鑑賞に集中してる」

「ふうん……因みに主にどんな場所を鑑賞してるの？」

「んなの決まってるんだろ！」

チラリと見える脇とへソに注視してこそ、真のフェティズムとちやうんか！！」

そんな発言を聞いて、一部の男子からは称賛が飛び交うが、

「のがあ！？」

唐突に飛来したベースが顔を捉え、七瀬は気絶する。

それが飛んで来た方向で、顔を真っ赤にした関根が肩で息をしながら俯いていると、朽木はクスクスと笑っていた。

七瀬が気絶している間にも運動会は進行し、彼が目覚めた時には、すでに最終種目の騎馬戦が、佳境に入っていた。

「……抜かった…まさかベースが飛んでくるとは」

そんなばやきを発しながらも、七瀬はこの成り行きを見守る。

「ん？」

ふと視線を騎馬戦から逸らして見ると、彼の視界に乱戦状態の騎馬に向かいかける椎名の姿が映った。

「……おいおい、あいつまさか」

一抹の不安を抱き呟くと、彼も椎名と同じ方向に向かい駆け出した。

そして、生き残っていた騎馬は、椎名の攻撃により呆気なく崩れ、その人員は空中に巻き上げられた。

そんな中、七瀬はとりあえず落ちて来た関根をキャッチする。

「よっ」と

「ふあ！？……え？…あ、さっさん」

「……全く、何やってんだあいつは」

呆れながら、七瀬が椎名の方を見ると、そこには彼女と向き合う天使の姿があった。

「……………あなた達、なんてことをしてくれたの？」

「これを見る」

天使に対し、椎名はぬいぐるみを見せる。

「それが？」

「キューーット！！」

椎名のそんな行動に対し、天使は展開していたハンドソニックを収める。

「……………戦意はなし……………か」

そんな呟きを漏らし、彼女はその場を後にした。

その途中、いつの間にかグラウンドに来ていたゆりとすれ違つと、ゆりは何故か間の抜けた表情を浮かべた後、ハッと我に返って相楽達に駆け寄って来た。

医局（閉鎖中）

ゆりに言われ、数人のメンバーを起こすと、七瀬は彼女に連れられ天使を追っていた。

「どうなってるんだ？」

「分かんない。」

でも、報告に行くって言うた」

音無の問い掛けに、ゆりが答える。

すると野田が、

「報告って、まさか」

「神に…ですね」

「ビュンゴってことかよ」

「……気合い入れてくぞ」

高松、日向、七瀬も続いて口を開くと、彼らは天使を追った。

階段の下にあった地下への入口を開き、天使は下りていく。そして、地下で『関係者以外立入禁止』と書かれた巨大な扉の前に

立つと、彼女はコンソールに何かを打ち込み、それを開いた。

途端にゆりは一同に呼びかける。

「突入！遅れた者は置いていく！！」

そして、飛び込んだ扉のなかには……………一面に広がる畑があった。

「何よここ？……………あ」

呟くと、ゆりはそこに蕪を引き抜き、それにほお擦りする天使の姿を見付けた。

「……………素晴らしい、キュートだわ」

一方で戦線メンバーは、

「……………これは……………」

「水光栽培ですね」

「それも、よく手入れされてる」

日向、高松、七瀬の三人がそんな話をしていると、

「ゆりっぺ、こんなものが」

松下が、そこで発見した園芸部の札を見せる。

そんな時、天使が立ち上がり口を開いた。

「…………さて…………会議を途中で抜け出してきて、キュートの言葉で廃部になった園芸部の栽培を引き継いで育てていた蕪のことを思い出して、こうしてここに来てしまったことを、生徒会の皆に、どう報告したのか？」

「なんじゃそりゃあー！ー！ー！」

天使の説明口調の呟きに対し、ゆりは声をあげる。

「あら皆さんお揃いで」

「入口のセキュリティは何だ！？」

「セキュリティ？」

ゆの言葉に天使が小首を傾げた瞬間、大山達が難無く扉を開いて入ってくる。

「いやあ、入ってこれた。」

まさか開けるボタン一発で開くとはね」

「はあ？パスワードは？」

「パスワード？」

「あなたさっきテンキーで打ってたじゃない！」

「あれは園芸部に残された予算の試算を」

「……………け、計算機」

すべての行動が空回りだったことに気付くと、ゆりはうなだれる。

「……………今より、死んだ世界戦線は……………一週間の断食いいいい!!」

『そんなあああ!?!』

ゆりの言葉を聞いた戦線メンバーからは、悲鳴があがっていた。

第32話 『Stairway to Heaven』(おまけ)

断食初日

流石に初日からダウンする者はいないが、昼頃になると多少空腹が辛くなり始めた面子が、ちらほらと見えてくる。

「……………あゝ…練習ありで断食はキツイ」

ガルデモが練習を終えると、関根はぺたりと座り込んだ。

すると、それを見ていた七瀬が、

「ゆりに黙って食いにいつちまったらどうだ？」

「いや、ゆりっぺ先輩は絶対食堂に見張り立ててると思う」

「……………たかが罰ゲームでそれかよ」

呆れた様子で言うと、七瀬は顔を引き攣らせていた。

「まあしかし、断食一週間ってのは、馴れてない奴にはキツイだろうな」

彼がそんな呟きを漏らすと、関根は小首を傾げる。

「『馴れる』って……………さっさん断食なんてしたことあるの？」

「ああ、俺ちょっと少し軽めの階級でボクシング始めたから、最初の方は減量してたんだよ。」

一週間近く飲まず食わずでやったけど、意外にできるもんだぜ？」

「さっさんと一緒にしないでよ」

「確かに、俺よか減らせる物が少なそうだな」

言いつと、七瀬は不用意に関根の手を取る。

すると、彼女は顔を赤くするが、

「お前、手首細いな」

七瀬がそんな呟きを漏らすと、関根は俯いたまま沈黙している。

二人がそんな掛け合いをしていると、

「ちょっと、相楽くん。」

いくら食物を食べれないからって、しおりんを食べちゃだめよ」

からかうように、朽木が声をかけた。

対して七瀬は、羞して表情を変えることもなく応える。

「そっちの『食う』は体力使うだろうよ」

「……そこで真面目に応えるわけね」

言うと、朽木は苦笑している。

そんなやり取りが行われている間にも、他のガルデモのメンバーも、空腹と疲労からへたり込んでいた。

彼女達のそんな姿を見ると、七瀬は引き攣った笑顔で口を開く。

「まあ何にせよ、本当に辛いのは後半になってからだから、覚悟しとけよ」

断食二日目、校長室

「……二日目か……まだダウンしたやつはいないよな？」

日向が問い掛けると、

「……残念ながら、そうでもないみたいだぞ」

引き彎った顔で、音無が虫の息のTKを指差した。

するとTKは、今にも息絶えそうな青白い顔で、グッと親指を立てる。

「……………No player for the dying」

それだけ言っつて、パタリと力尽きた。

「……TKいーKえー……！！」「」

戦線メンバーの悲鳴が木霊すると、七瀬が悔やむように壁を叩いた。

「クソー！確かに一昨日から顔色が異常に悪かったし、腹下してるみたいだったけど、まさかこんなに弱ってるなんて……！」

彼に続いて、大山や藤巻も声をあげる。

「TK！目を覚ましてよ！」

いつものように中途半端な英語をしゃべりながら踊り狂っつてよ……！」

「TK！寝るんじゃねえ！」

生きて一緒に一週間耐え抜こうぜ……！」

そんな懸命な呼びかけも虚しく、TKが立ち上がることはない。

打ちひしがれたように俯くと、一同は向き合った。

「皆！TKの死を無駄にするな！」

残りの6日間、TKの分まで生き抜くぞ！！」

『オオオオオ！！』

日向の言葉に対し歓声をあげ、一同の指揮は高まっていた。

断食五日目

「高松と野田が倒れたか……それに他の面子も大抵は虫の息か」

呟くと、七瀬は目に光りを宿していない戦線メンバーを見回す。

「まあ、減量の経験がある人間なんて、俺以外にいなかったし、いきなりで一週間はキツイだろうな」

「随分と余裕そうね」

ぐったりとしているメンバーを、しげしげと見詰める七瀬に、ゆりが問い掛けた。

「まあな。」

減量の際は食わないだけでなく、走ったりサンドバック叩いたりスパーリングしたり、トレーニングしながらだったからな。

それに比べりゃ、こんなもんは生温い……って言いたいところだけど、実際は我慢してるだけだな」

そう言つて七瀬が苦笑すると、ゆりは多少は感心した様子で相槌を打っていた。

「あ、そういえばさ」

ふと七瀬が思い出したように声をあげる。

「流石に女子の方は勘弁してやっていいんじゃないか？」

元々細い奴も多いんだし、皆ガリガリになって餓死しちまうぞ」

「別にいいじゃない、死んだって、すぐ生き返るんだし。」

それに、いいダイエットになるんじゃないの？」

「俺的には、不健康に細いのより、健康的な女の子の方がいいと思うんだが……」

そんな七瀬の意見を聞くと、ゆりはからかうような笑みを浮かべ、

「ふうん……まあ、確かに関根さんは、そのままの方が魅力的よね？」

対して七瀬は、さして表情を変える様子もなく応える。

「ん？何で関根に限らないだろ？」

「……そうね。」

相楽くんに聞いた私がバカだったわ」

呆れた様子で言うと、ゆりは顔を引き攣らせていた。

学習棟A中庭

「……………あ……………腹は減るし、オペレーションはなくて暇だし……………
退屈だな」

ベンチで寝転びながら、七瀬がそんなぼやきを発すると、不意に無

表情な顔が覗き込む。

「……………暇そうね」

その少女……………戦線が天使と呼ぶ相手を見ると、七瀬は間の抜けた表情を浮かべる。

「……………そんなに退屈なら、少し手伝って貰える？」

「え？あ……………まあ、構いはしないけど」

七瀬が応えると、天使は彼の手を掴み、唐突に走り出した。

数分間走って到着した場所は、先日見た園芸部の畑だ。

しかし、七瀬が到着したとき、そこには既に先客の姿があった。

「……………朽木」

「あら、相楽くん。

相楽くんも連れて来られたの？」

そんなやり取りをすると、七瀬は天使に視線を向けた。

「……………つい頷いちまったけど、一体俺達に何させるつもりだ？」

「何って、畑を耕して貰うだけよ？」

「……………畑？」

「……………ええ、流石に一人で園芸部を切り盛りするのは、ムリがあるから。」

お腹空いてるんでしょう？

採れた野菜は食べてもいいから、耕すのを手伝って」

「いや、まあ……………食っていいなら、喜んで手伝うけどさ」

二人がそんな掛け合いをしていると、朽木が思い付いたように懐から一枚の紙を出した。

「どうせ畑の世話するならば、いつそのこと園芸部を立て直しちゃえば？」

そう言って差し出したものは、部活動の設立届けだ。

「……………んなもん、何で持ってんだよ？」

「気にしない気にしない」

ほらほら、二人共名前書いて」

促されると、七瀬と天使は訝しみながらも、それに名前を書いく。

その最中、七瀬はふと天使に視線を向けた。

(……………戦意のかけらもないし、いつもみたいな脅威を、まったく感

じないな。

……こう見ると、天使も普通の女の子だな)

そんなことを考えながら、彼は天使が用紙に書いた『立花 奏』の
名前を眺めていた。

第33話『Favorite flavor（前編）』

校長室

「……………ついに……………この時期がやって来たか」

「何だ？何か始まるのか？」

ゆりの発言を聞き、音無が尋ねる。

「天使の猛攻が始まる」

「……………天使の猛攻、

……………猛攻ってどうしてなんだ？」

「……………テストが近いから」

「……………あー……………何故？」

『猛攻』という言葉に過剰な想像をしていた様子で音無が尋ねる。

すると、その質問に対して、高松が答えた。

「考えればわかるでしょう？」

授業を受けさせることも大事ですが、テストを受けさせていい点を取らせることそれも大事です……………天使にとっては「

それを聞くと、音無は落胆した様子を見せていたが、

「けどこのテスト期間、逆に天使を陥れる大きなチャンスとなりえるかもしれない」

「何か思い付いたようだな、ゆりっぺ？」

聞かせてもらおうぜ？」

ゆりの言葉に反応し、藤巻が彼女に尋ねた。

「天使の邪魔を徹底的に行い、赤点をとらせまくる。」

そして、校内順位最下位に突き落とす」

「それが何になるの？」

作戦内容に対して、今度は大山が尋ねた。

「名誉の失墜。」

生徒会長として彼女は威厳を保っていられるかしら？」

「それで弱くなると？」

「少なくとも教師や一般生徒の見る目は変わるわ。その行いには、今までなかった変化が生じる」

野田が口を挟むと、ゆりはスラスラと説明する。

そこまでの説明を聞くと、次に松下が彼女に問い掛けた。

「どんな？」

「さあ？そこまで私には読めない」

「じゃあ意味がないんじゃないのか？」

そんな風に作戦会議が進んでいくと、七瀬も拳手し、ゆりに問い掛ける。

「俺達を書くようなアホな解答ばかりだと、流石にNPCも気付くんじゃないか？」

「大丈夫よ。NPCはそこまで勘繰らないわ」

言うど、ゆりはカーテンを閉めスクリーンを展開した。

「まずは、今回の作戦メンバーを決める。

天使のクラスでテストを受けるための根回しはすでに完了しているわ」

「じゃあメンバー全員が固めちまったらいいんじゃないか？」

「『じゃねえか』じゃないわよ！

ミスは許されないんだから。

作戦が途中でバレたら、私達は直ぐにも別の教室に写されて、天使

に赤点をとらせる細工ができなくなるのよ?」

藤巻の意見をバツサリ切り捨てると、ゆりは続けた。

「そこで今回のメンバーは、高松くん、日向くん、大山くん、竹山くん、音無くん、相楽くん」

「俺、テストって聞いただけで鳥肌が立つくらいバカなんだが……」

「また俺かよ」

「僕のことはクライストと」

「見た目が普通の奴らを選んだだけよ」

竹山の言葉を遮り、七瀬と音無に伝えると、ゆりはさも当然と言いたげな顔をしていた。

対してゆりは、それを気にかける様子もなく声をあげる。

「それじゃ……オペレーションスタート!」

医局（閉鎖中）地下（園芸部園芸場）

「……………ふう」

小さくため息をつくとき、七瀬は畑を耕す手を止めた。

「部長！こんなもんでいいのか？」

問い掛けられると、少し離れた場所で野菜の世話をしていた天使……立花 奏は頷いて答えた。

すると七瀬は、使っていたクワを背負い、彼女に歩み寄る。

「にしても、明日からテストだったのに、こんなところで野菜の世話してていいのか？」

「……………それは、あなたも同じでしょう？」

「そりゃあ、まあ……………俺はバカだし、今さら机にかじりついたところで、結果は変わらないだろうからな」

「……………試験、受けるの？」

多少驚いた様子で奏が尋ねると、七瀬は自分の口走ってしまったことに気付いき、顔を引き攣らせた。

「あ、いや、その……………」

「……とりあえず、試験に参加はするのね？」

「あ、うん……まあ、一応はな」

「……そう、よかった」

「いや……そう言われると困るんだけど……」

そんな掛け合いをすると、七瀬は苦笑を浮かべる。

対して奏は、小首を傾げながら無垢な瞳で彼を見詰めていた。

「……そんな目で見詰めないでくれ」

「？」

気まずい様子の七瀬を、奏は訝しむように見ていた。

すると七瀬は、何とか話題を変えようと試みる。

「……え〜と……あ、そうだ！

それにしても、朽木の奴は自分で俺達を誘った癖に、畑に来ないで何やってんだらうな？」

そんな話題が出ると、奏はぼそりと口を開く。

「……朽木さんなら、きちんと部に貢献してくれてるわよ」

「へ？」

「……私達が今使っている化学肥料は、朽木さんが部費節約の為に自作してくれた物よ」

「……頭脳労働で貢献してるわけね。」

んじゃ、肉体労働派は、仕事終わらせてちゃっっちゃと帰りますか」

言って、七瀬はクワをしまい、その場を後にしようとするが、

「それじゃあ、俺も帰るから……ん？」

奏に袖を引かれ、彼は振り向いた。

「……テスト、自信ないんでしょう？」

少しだけなら教えてあげられるから、一緒に勉強しましょう？」

問い掛けられると七瀬はしばらくの間、間の抜けた表情を浮かべていた。

第34話『Favorite flavor(中編)』

大食堂、ランチコート

七瀬がガルデメンバーや朽木と共に夕食をとっていると、

「……ふ〜ん、それじゃあさっさんは、女の子(天使)に手取り足取り勉強を教えてもらってたわけね」

関根に言われると、七瀬は死んだ魚のような目で、

「……ああ…やっぱり俺、勉強好きにはなれねえや」

「そりゃまあ、天使には逆らえないだろうし……相楽にとっては正に地獄だったろうね」

ひさ子が言うと、同じテーブルにいた入江が苦笑する。

一方で関根は、不機嫌そうな様子でいたが、

「………何で関根はそんなにむくれてるんだ？」

ふと七瀬が尋ねる。

すると関根は、ツンとした雰囲気に応えた。

「………嫌いな勉強も、一緒にいれば平気なんだったら、天使の部屋

で「飯も食べてくればよかったじゃん」

言われると、七瀬は訝しむような表情を浮かべた。

彼らがそんなやり取りをしていると、朽木が不敵な笑みを浮かべる。

「しおりんも、相楽くん部屋に来てほしかったのよねえ」

「な！？何言ってるの！」

全然そんなじゃないから！！」

「顔赤くして言っても、全然説得力ないわよ？」

「……………」

関根が俯いて赤い顔を隠して黙り込む。

すると、それを端で見ていた七瀬は、

「何で俺を部屋に入れたがるんだよ？」

小首を傾げて尋ねる。

対して朽木は、からかうように笑いながら彼に言う。

「一緒に寝て欲しいに決まってるじゃない

ねえ、しおりん？」

「だから！そんなんじゃないって！！」

そんなやり取りをしながら、彼らは夕食をとっていた。

学習棟 A

「……寝る前と朝起きた時にも、ちゃんと勉強してきた？」

奏に尋ねられると、七瀬は死んだ魚のような目で頷く。

「……………ああ、何とかな」

そんなやり取りをすると、彼は奏の席から離れて窓側の席に集まるゆり達の元へ、ヨタヨタと歩み寄る。

すると、ゆりは教科書を丸めた物で、思い切り七瀬を叩いた。

「いてっ！？」

「天使に懐かれてどうするのよ！」

「…………仕方ねえだろ？」

ああいう善意は、無下に出来ない質なんだよ」

「まったく…………まあでも、好都合かもしれないわね。

相楽くん、あなたテスト期間中、ずっと天使に勉強見てもらいなさい。

それでもし、こちらの行動に気付いたようなそぶりがあれば、私に報告しなさい」

ゆりが提案すると、七瀬は顔を引き攣らせる。

「……………テスト期間中か……………俺の脳、耐えられるかな？」

そんな呟きが漏れると、一同は苦笑していた。

結局、今回のオペレーションは、天使の前の席を引き当てた竹山が解答用紙をすり替えている間、他のメンバーがNPCを引き付ける作戦となったのだが……………

『一時限目、日向の場合』

教室にチャイムが響き答案の回収が始まる。

すると、

「なんじゃありゃ!？」

グラウンドから超巨大なタケノコがよきによきと!」

日向が一般生徒の注意を自分に向けようと声をあげるが、生徒達はまったく反応しない。

(アホ日向)

音無がそんなことを考えていると、ゆりが何かのリモコンのスイッチを押した。

すると次の瞬間、日向の座った席はロケットを彷彿させる勢いで浮上し、彼は天井にたたき付けられ、クラス中の視線をくぎ付けにした。

『二時限目、高松の場合』

「先生、実は私……着痩せするタイプなんです」

「「「……………」」」

突然脱ぎ出した高松に対して、NPCは無反応だ。

それを見て、高松が席に座った途端、彼の席は浮上した。

『三時限目、大山の場合』

「こんな時に場所も選ばずごめんなさい、あなたのことがずっと好きでした！」

付き合ってください！！」

突然立ち上がった大山が、いきなり奏に告白する。

対して奏は、至って冷静な様子で、

「じゃあ時と場所を選んで」

そして、何故か日向が浮上した。

その日のテストが終わると、七瀬は奏と一緒に下駄箱を後にする。

「……三教科だけで知恵熱出そう」

「……テストが終わるまでの間だから、頑張ってるね」

奏に言われると、七瀬はヨタヨタと歩きながらも、彼女に着いて行く。

そして、女子寮に到着すると、

「あ、さっさん」

練習帰りの関根と出くわした。

彼女は天使を見た瞬間、多少不機嫌な表情を見せるものの、直ぐに笑顔を作る。

「ああ、今日も仲良くテスト勉強ですか？」

精々頑張ってくださいね」

ある種の怒りの感情すら感じとれるような笑顔で言うと、彼女はプイツと顔を逸らし、彼らの前から去って行く。

「あ、おい。」

……あいつ、何であんなに機嫌悪いんだ？」

七瀬がそんな呟きを漏らすと、不意に奏が口を開いた。

「……………ヤキモチを焼いてるのよ」

「ヤキモチ？」

「……………そっ。」

あなたが他の女の子と一緒にいるから、嫉妬してるんだと思うわ

「『嫉妬』って、何で俺なんか……」

「……好きなんじゃないの？」

「は？何が？」

「……あなたのことが」

「関根が俺を？」

「……うん」

そんなやり取りをすると、七瀬は放心状態になる。

すると奏は、彼に問い掛けた。

「あなたの方は、どう思ってるの？」

「ん？……『どう』って？」

「あの娘のこと、好きなの？」

そんなやり取りをすると、七瀬はしばらくの間、何かを考え込んでいた。

第35話『Favorite flavor（後編）』

校長室

テスト期間が終わりしばらくすると、ゆりが戦線メンバーに召集をかけた。

「流れ始めたわ」

「え？何が？」

ゆりの言葉に音無は尋ねる。

「天使の全教科0点の噂」

「マジかよ」

「しかも教師を馬鹿にしたような解答ばかりだったと」

「そんなことまで」

そんなやり取りを聞くと、七瀬は戸惑うような表情を見せる。

「でも教師は、そんなの天使自身じゃなく、誰かの仕業だってわかるだろ？」

音無は尋ねるが、ゆりとがその可能性をと切り捨てる。

「何度言わせるの？」

そんなことは教師には分からない現実と同じ。

生徒会長が不真面目な答案を提出してきた。

なら、天使自身を呼び出して叱るに決まってるでしょ？」

二人の意見を聞くと、音無は何か心当たりがある様子を見せる。

「立華は弁解したんだろうか？」

「さあね？しかも全教科だしね。」

全教科の教師にどうやって弁解するのよって話よ」

「教師からしてみれば、ま、一人きりの反乱ってところだろ」

（（……一人きりの反乱））

日向の言葉を聞き、音無と七瀬の脳裏には、一人寂しげに佇む奏の姿が浮かぶ。

数日後、奏は生徒会の会長職を辞任した。

それに対してゆりは、生徒会長でなくなった奏がどんな反応を伺うため、オペレーショントルネードを行うことを決定した。

そんな中、七瀬は今回内側に配備され、ガルデモの楽器やアンプを運び込む手伝いをしつつ、天使に警戒していた。

「おーい、さっさん？」

「ん？」

不意にひさ子に呼ばれると、呆けた様子で立ち尽くしていた七瀬は振り向く。

「何か用か？」

「ボーツとしちゃって、どうしたの？」

「ああ……『本当に良かったのかな？』って思っちゃってさ」

「は？」

「いや……俺、テスト期間中何回も天使と会ってたろ？」

そうしてるうちに気付いたんだけどさ、あの娘は意外に無表情なこと以外は、普通の女の子なんだよ。

そんな子相手に、俺達は随分酷いことしてるだろ？」

二人がそんな会話をしていると、不意に不機嫌そうな関根が声をあげる。

「そんなに天使が好きなんだったら、戦線辞めてあの娘の味方になればいいじゃん」

すると七瀬は、訝しむような表情を彼女に向けた。

「いや、そういうのじゃねえって」

「あ、そうですか。」

じゃあさっさんは、好きでもない女の子の部屋に、度々おじやまするような人なんだね」

「あれは、そういう作戦だったんだからしょうがねえだろ。」

……大体、好みで言うなら、天使よりはお前の方が好みだぞ？」

七瀬が言うと、関根はしばしの間、間の抜けた表情を浮かべる。

そして、徐々に顔を赤らめると、彼女は俯いてそれを隠していた。

大食堂のライブが始まってしばらくすると、上の階にいた高松が、ゆりに何かを知らせようと手を振るのが視界に入る。

それに気づき、ゆりが食堂の入り口を見ると、そこには堂々と食堂に入ってくる奏の姿があった。

「天使？外は何してるのよ！」

しばらく様子を伺っていると、奏はふらふらと人混みに揉まれながら、食券の販売機へと向かう。

『どうしますか？』

「ちょっと待って！」

無線で呼びかけた高松を呼び止め、ゆりは奏に視線を向けた。

(……………様子がおかしい。

あいつ、何を？

あれは！？

全校生徒が一切手を出さない激辛で有名な麻婆豆腐！

……………どういこと？

何故あんなものを？

私達に食わせて一矢報いようっての？)

彼女が考え込んでいると、

「……ゆりっぺさん。」

盛り上がりは最高潮を迎えてるように見受けられますが？」

「え？」

不意に遊佐に声をかけられ、彼女は間の抜けた声をあげた。

「指示を」

「……回せ」

「回して下さい」

そして、旋風は巻き起こった。

一般生徒の手に持った食券が巻き上がる。

その例に漏れず、奏の食券も宙を舞っていた。

「うおおおお！？」

痛い、辛い、つーか痛い！

……しかし、後から来るこの旨味、成る程こいつは味わい深いかもしれない」

「だろ

こんな旨い麻婆豆腐食ったことねーだろ？」

日向と音無がはしゃいでいると、

「何騒いでんだ？」

二人の掛け合いを見ていた七瀬が声をかけると、音無は麻婆豆腐を差し出した。

「お前も食べてみるよ？」

「……それって、この間TKが食って腹壊した激辛料理だろ？」

食って大丈夫なのか？」

「少しなら辛いだけで大丈夫だって」

言われると七瀬は恐る恐るそれを口にする。

「辛っ！？……いやでも、確かにそれさえなければ美味しいな」

「だろ？」

彼らがそんなやり取りをしていると、正面の席で食事していたゆりが、口を開いた。

「それ、天使が買った食券よ」

「い、これ？」

「そ」

日向が確認すると、ゆりは頷いて答える。

すると、音無は急に沈んだ表情を浮かべていた。

一方で、七瀬も神妙な面持ちで立ち尽くしていた。

そうしていると、

「さっさん、何ポイントと突っ立てるの？」

直ぐ後ろで、料理を乗せたトレーを持ち彼を待っていた関根に声をかけられ、七瀬は振り向いて苦笑する。

「あ、悪い悪い、直ぐ行く」

応えて彼が歩き出すと、関根もその隣を歩いて続いた。

「……まだ天使のこと気にしてるの？」

ふと関根が尋ねる。

対して七瀬は、戸惑いを隠せない様子で応えた。

「……まあな……たかが一週間とはいえ、俺みたいなのが親身になつて勉強を教えてくれたあの娘に、恩を仇で返しちまつたわけだからな」

そう言つて小さくため息をつくとき、七瀬はガルデメンバーの待つテーブルに向かった。

第36話『Abnormality』

大食堂前

大食堂の出入り口の前に、腕章を付けたNPCの集団が待機していた。

「……いいか、突入次第『SSS』の団員を取り囲め」

現生徒会会長代理の直井が言うと、虚ろな目をしたNPC達は頷くが、その先頭にいた唯一虚ろな目をしていない男子生徒が、何故か鞘に収まった刀を持ち前が出る。

「……抵抗してきた場合、本当に斬っていいんだな？」

問い掛けられると、直井は頷いた。

「ああ、抵抗されたのならかまわん。

元より、そのために貴様を呼んだのだから、しっかりと働いてもら
うぞ」

「………フン………俺は、斬っていいと聞いたから来たただけだ。

お前の命令では動かん」

そんなやり取りをすると、二人は食堂に向き直った。

大食堂、ランチコート

オペレーション・トルネードを終えてしばらくすると、戦線メンバーは揃って夕食をとっていた。

「……それにしても、天使が止めに来なくなったら、戦線のオペレーションってどうなるんだろうね？」

ふと関根が疑問をあげると、同じテーブルにいたガルデモメンバーや七瀬は、小首を傾げてしばし考え込む。

「……うん……元々トルネード以外は、天使の反応を伺うためのものだったわけだし、別の方向で神を探すことになるんじゃないか？」

七瀬が応えた。

するとユイが、

「ええー！？それじゃあ、ライブの回数減っちゃうんですか？」

不満げに声をあげる。

対して入江やひさ子が、宥めるように声をかけた。

「しょうがないよ。」

ガルデモは元々オペレーションの陽動のためのバンドなんだから」

「そうそう、それにたまにしか出来ないから、ライブにNPCが集まってるんだろ？」

毎日やってたら、直ぐに飽きられるよ」

彼女達がそんなやり取りをしていると、七瀬は今も何かを考えながら険しい表情を見せている、ゆりに視線を向ける。

「まあでも、そうなるかどうかは、最後にはゆり次第だろうな」

七瀬がそんな声を漏らした次の瞬間、食堂の扉が勢い良く開かれた。

突如、腕章を付けた生徒達が押し入り、戦線メンバーは混乱する。

「なんだ貴様らは！」

野田の怒号を口火に、戦線メンバー達はざわめき始めた。

そんな中、七瀬は咄嗟に関根達を庇うように立ち上がり、一方で他の戦線メンバーは、相手が一般生徒だけに手を出すわけにもいかず、動揺を隠せない様子を見せていた。

対して、現生徒会長代理の直井は、NPCの前に立ち、

「そこまでだ。」

色々と容疑はあるが、とりあえず時間外活動の校則に則って、全員反省室へ連行する。

僕が生徒会長になったからには、貴様らに甘い選択はない。

……連れていけ。」

そう言い放った。

対して、既にいきり立っていた野田がハルバート片手に吠える。

「貴様！ふざけるのも大概にしろ！！」

すると直井は、さして焦る様子もなく、

「……浅野」

その呟きを聞くと、彼と同じようにNPCの前に立っていた刀を持った男子生徒が、野田の前に立ち塞がった。

「邪魔だ！！」

咆哮し、野田がハルバートを振り上げるが、

「……鈍い」

瞬時に刀を抜いて難無くないなし、浅野は野田の喉元目掛け突きを放った。

その瞬間、唐突に野田の襟首が捕まれ、後ろに引つ張られる。

「なっ!？」

野田が下げられたことにより、浅野の突きは辛うじて彼の切っ先に届かず、ただ刀が突き出されただけに終わる。

「野田、大丈夫か？」

声をかけられ野田が振り返ると、そこには彼の襟首を引く七瀬の姿があった。

そして、今度は七瀬が手甲を装備し、浅野の前に立つ。

それに対し、浅野は刀を構えるが、

「七瀬くんも野田くんも、下がちなさい。

相手はNPCよ」

ゆりに言われると、七瀬は仕方なさそうに引き下がった。

薄暗い反省室に閉じ込められると、戦線メンバーは個々に思い思いの行動に出ていた。

怒声をあげ鉄のドアを叩く者、どうやって脱出するか騒ぐ者、体力を温存し大人しく座り込む者、その中でもゆりは、大人しく座り込みながらも、何かを考え込んでいた。

(……………何故ただのNPCがこんな行動を？

……………天使が生徒会長を辞任したから？……………いや、それでこの豹変ぶりはおかしい)

ゆりがそうしていると、不意に朽木が声をかける。

「……………おかしいと思わない？」

「……………ええ、NPCがこんな行動に出るなんて、今までになかったことだわ。」

特にあの浅野とかいう奴。

刀なんて、どこから持ち出してきたのよ？」

「……………ああ……………まあアレは、ある程度推測出来るでしょ？」

「推測つて、どんな推測よ？」

「……仮にNPCが、忠実に人間を再現したものだとするれば、その中には極端な奴がいたっておかしくないでしょ？」

例えば……極端に規則に厳しいとか、剣の道に進んでいるとかね」

「……成る程ね」

そんなやり取りをしながら、戦線のメンバーはしばらくの間、時間を潰していた。

第37話 『Family affair (前編)』

翌朝、ようやく反省室から解放されると、戦線メンバーは、一応校長室に集まる。

「……で、これからの活動はどうしますか？」

高松がゆりに尋ねる。

「……試しにちょっと動いてみましょう？」

とりあえず、それぞれ好き勝手に授業を受けてみて。

あ、一般生徒の邪魔はあんまりしないように、以上、解散。」

そう言い渡されると、ゆりを除く戦線メンバーは校長室を後にしようとしていた。

最後に音無が部屋を出ようとした時、ゆりは彼に声をかける。

「音無くん。」

これ、あんた持ってなさい。」

言って彼女が差し出したものは、トランシーバーだ。

「え？それ、ここでは貴重なものなんじゃ？」

何故俺なんか？」

「……………いいから。」

小首を傾げながらも音無がトランシーバーを受け取り校長室を後にすると、ゆりは次に、何やら考え事に耽っている七瀬に視線を向けた。

「……………それで、相楽くんは何を考え込んでるの？」

問い掛けられると、七瀬は神妙な面持ちで、

「……………いや……………俺の考え過ぎだと思っけどさ……………あの直井と浅野って奴ら、本当にNPCなのか？」

「人間な訳ないでしょ？」

生徒会に入るなんて、まともに授業受けてないとなれるはずないし、受けてたら消えるんだから」

「……………でも、あいつら明らかに他のNPCとは違った」

「……………まあ、色々と不確定要素はあるけど、そういう難しいことは私に任せて、あなたも他の皆と同じように、攪乱に参加してきて」

「……………ああ、分かった」

そんなやり取りをして、七瀬は校長室を後にする。

彼が部屋を去り、ドアが閉まると、物思いに耽った。

(……………天使はもう動かない。)

夕べそれは証明できた。

残る問題は生徒会長代理、攪乱しまくったらどう動く？

……ただ、相楽くんの言っていた不確定要素も気になるわね。

……ちよつと探ってみるか)

学習棟 A

「ちーっす。

遅刻しました、すみません」

けだるそうに言うと、七瀬は授業中の教室に足を踏み入れる。
すると、

「さっさーん！こっちこっち」

関根に呼ばれ、七瀬は彼女の隣の席につく。

それを確認すると、又隣に入江がぺこりと会釈をしていた。

「先輩達の方に行かなくていいの？」

関根が尋ねると七瀬は、

「あいつらは自分の身くらいは、自分で守れるだろ？」

近くにいないと、お前らのこと、いざというときに守れないからな」

そんな答えを聞くと、関根は多少顔を赤らめる。

対して七瀬は、小首を傾げてそれを見ていた。

「何赤くなってるんだ？」

「な！？何でもないから！」

二人のそんな掛け合いを見ながら、関根の隣に座る入江は、クスクスと微笑を見せていた。

休み時間になると、七瀬達は食堂に向かう。

「あー……授業受けると腹減るな」

「まともに受けてないのに？」

「歴史を聞くだけで疲労するからな」

「うっわー、超アホ」

「天は人に二物を与えずってことだ」

「まあ、確かに運動出来る人って、結構アホが多いよね」

関根とそんなやり取りをすると、七瀬は券売機に向かうが、

「……ん？」

ふと視界の隅に生徒の集まりを見つけ、七瀬はそれに視線を向ける。

そこに見えたのは、NPCを率いた直井が、奏と音無を連行している光景だ。

「アレは……部長と音無」

「……ねえ、さっさん。」

「これってかなりまずいんじゃない？」

「そうですね。」

早くゆりっぺ先輩達に伝えないと」

七瀬の呟きに続き、関根と入江が不安げに声をあげる。

「……とりあえず、ゆりに報告だ。」

校長室に行くぞ」

言って、七瀬が食堂の出口に向かうと、関根と入江もそれに続いた。

連絡橋

校長室に向かう途中、七瀬達が連絡橋を通ろうとすると、不意に目の前に人影が飛び出した。

「っ!?!」

その人物……日本刀を片手に七瀬達と向き合う浅野を見ると、彼らは驚きを隠せない様子を見せる。

「全く、情報を持った相手の戦略を逃がすとは、直井も所詮は素人だな」

ぼやくと、浅野は刀を鞘から抜き、

「悪いが、こちらの用事が済むまでは、眠っていてもらう」

対して七瀬は、その前に立ち塞がり、関根達に呼びかけた。

「関根、入江。こいつは俺に任せて、ゆり達の所に行け」

「あ、うん……気をつけてね」

しかし、そんな掛け合いをした次の瞬間には、浅野は関根に向かい刀を振りかぶっていた。

「……悪いが、面倒だからそっちから殺すぞ」

「「「!?!?!」」」

驚きを隠せない様子を見せる七瀬達に対して、浅野は容赦なく刀を振り下ろす。

刹那、七瀬は関根の前に飛び出し、関根を庇うようにその斬撃を受けた。

「ぐう!?!?!?!クソッ!?!」

悪態をついた次の瞬間、七瀬は関根と入江を両脇に抱え、橋から飛び降りた。

対して浅野は、

「……………」

ただ呆然と立ち尽くし、七瀬達が飛び降りた川を眺めている。

しかし、その左腕は、ただ無気力にだらりと垂れ下がり、ピクリとも動く様子がない。

「……………折れてるな……………さっきの一瞬でカウンターを打ってきたか……………」

呟いて骨折した自分の腕を見るその表情は、どこか微笑のようなものが含まれているように思えるものだった。

第38話『Family affair』(中編)『

校長室

「成る程……それで音無くんと連絡が取れない訳ね」

ゆりが言うと、七瀬は頷いて応えた。

校長室に集まっていた他の戦闘メンバーも、今回ばかりは神妙な面持ちだ。

「生徒会長代理に探りを入れてみたんだけど、相楽くんの予想通り人間だったわ。」

表向きは真面目な生徒を演じて、裏でNPCに暴力を振るっていたみたい」

すると七瀬は、小さくため息をつき、立ち上がった。

「……とりあえず聞えない奴らは、ギルド辺りに避難させた方がいいんじゃないか？」

そんな提案に対して、ゆりは頷いて応えた。

「……そうね、相手がどんな手に出るか分からないし、非戦闘員は避難させた方がいいわね。」

……でも、避難する途中で襲われたら元も子もないし、護衛をつけるべきかしら……相楽くん、椎名さん、非戦闘員の皆をギルドまで送って貰える？」

言われると、七瀬と椎名は了解する。

すると、ゆりは付け足すように七瀬に言った。

「それと、相楽くん。

あなたは手負いなんだし、無理は禁物よ」

「りょうかい」

適当な返事を返すと、七瀬は校長室を後にした。

学園校外、ギルド連絡通路入口

七瀬達は集めた非戦闘員を避難させると、学園の方向に向き直った。

「……さてと……まだ直井達は行動に出てないか？」

七瀬が呟いた次の瞬間、学園のある方向から銃声が響いた。

「…………動いたか」

七瀬に続き、椎名が声をあげる。

すると、彼らの後ろに立っていた遊佐が、

「…………生徒会長代理率いるNPCとの戦闘が始まったようです」

それを聞くと七瀬は懐から手甲を取り出し、両手に装着した。

途端に、ギルド連絡通路に入ろうとしていた関根が、それに気付いて駆け寄って来た。

「さっさん、もしかして学校に戻るつもり!？」

「前から言ってたんだろ？」

やられっぱなしは、性に合わないんだよ」

応えると、七瀬はライフルを肩から下げる。

対して関根は、不安げな表情で彼を見つめた。

すると七瀬は、ばつの悪そうな顔を浮かべ、

「…………えっと…………まあ、心配すんな。

直ぐにあいつらぶっ飛ばして帰ってくるから。

……椎名」

「ん？」

「ギルドに残って、こいつらのこと守ってやって貰えるか？」

頼まれると、椎名はしばしの沈黙の後、七瀬の真剣な目を見て、小さく頷いて応えた。

「……………殺すことの許されないNPC相手では、戦力が増えても意味をなさんだろうし、引き受けておいてやる」

「サンキュー この騒ぎが終わったら、何か奢るぜ。」

それじゃ、行ってくる」

言い残すと、七瀬は駆け出した。

その後ろ姿を見て、関根はただ不安げな表情を浮かべていた。

学習棟の片隅に、鋼鉄の分厚い扉に閉ざされた部屋が存在する。

その周囲の廊下には生徒の姿は見えず、ただ窓に叩き付けられる土砂降りの雨の音だけが響いていた。そんな時、唐突にそれは起きる。

轟音を上げて、分厚い扉が弾き飛ばされたのだ。

そして、扉の壊された部屋からは、音無と奏が姿を現した。

「……………行こう」

一度周囲を見渡すと、音無は奏の手を取り走り出す。

しかし、

「……………そんなに急いで何処に行くんだ？」

立ち塞がって問い掛けたのは、浅野だ。

「……………浅野くん」

「立華、コイツのこと知ってるのか？」

「……………うん。」

剣道部の主将よ

音無の問い掛けに、奏は応える。

すると浅野は、手にしている刀を抜き、その切っ先を奏に向けた。

その刹那、彼の後方から銃声が響き、同時に弾丸が頬を霞める。

「「!?!?」」

驚きを隠せない様子で音無と浅野が、弾丸が飛んで来た方向を見ると、そこにはライフルを構える七瀬の姿があった。

「よお、仕返しに来たぜ」

言われると、浅野はニヤリと凶悪な笑みを浮かべる。

対して七瀬は、挑発するように手招きした。

「おら、ついて来い!」

七瀬が走り出すと、浅野も同時に駆け出した。

そうして二人がその場を後にすると、彼らの掛け合いを間の抜けた表情で眺めて音無は、ハッと我に返り奏に呼びかける。

「……………行くぞ!」

手を引かれると、奏は抵抗することもなくそれに続いて行った。

第39話『Family affair』(後編)『

学習棟A、3階

「うおりやああ!!」

七瀬が椅子を投げつけると、浅野は難無くそれを両断する。

「鉄パイプごと真つ二つって、それもう反則だろ!？」

悲鳴ともとれる声をあげると、七瀬は浅野に背を向け走り出した。

「どうした、仕返ししに来たんじゃなかったのか？」

逃げるだけじゃ、仕返しにはならないぞ」

「逃げてるんじゃねえ！」

戦略的撤退だ!!」

逆ギレ気味に怒鳴ると、七瀬はとりあえず近くのドアの開いていた教室に飛び込んだ。

(…………ヤバいな。

まさか、あんな風に何でもかんでもぶった切れるとは……………仕返しするとは言ったものの、どうしたもんか)

そんなことを考えながらも、彼は足を止めて振り返った。

「しゃーない、こうなったら」

言うと、七瀬はブレザーを脱ぐ。

そして、浅野が入り口から顔を覗かせた途端、

「っ!？」

投げ付けられたブレザーで視界を塞がれ、浅野は空いた左手でそれを払うが、刹那、七瀬が懐に飛び込んだ。

「歯あ食いしばれ!」

叫びと同時に、浅野の鳩尾に七瀬の拳がめり込んだ。

そのまま弾き跳ばされ、浅野の上半は窓にたたき付けられガラスを砕き、廊下に倒れる。

すると七瀬は、得意げな表情で声をあげた。

「ざまあみる!」

こちららボクサーの前は、路地裏の卑怯喧嘩で無敗なんだよ」

言って、彼が中指を立てていると、

「ゲホッ!?!……………ふざけた奴だ」

一度大きく咳込んで、浅野が立ち上がった。

（おいおい、手甲付けた殴った訳だし、少なくとも内臓破裂はして
るはずだぜ？

それでまだ立ち上がるのかよ）

浅野のタフさに少々不気味さを感じながらも、七瀬は再び拳を構える。

（…………あの怪我でまだ戦えるのか？）

口の端から血を流し、明らかにダメージを隠し切れていない浅野を見ると、七瀬はふと考えた。

そして、近くの椅子に手を掛けると、再びそれを投げ付ける。

対して浅野は、先程と同じように椅子を簡単に両断する。

しかし、

「……………なるほど」

七瀬の目は、その優れた動態視力で椅子を切り裂く太刀筋を、完全に捉えていた。

「通りで切れ味が良すぎるわけだ。

……………そうと分かれば、充分いけるな」

眩くと、七瀬は左右の拳を二三度ぶつけ合う。

「浅野」

「……………何だ？」

「ここは、やり合うには狭すぎるからな。

ついて来い」

そんなやり取りをすると、七瀬は窓枠に足を掛け、

「よつと！」

何の躊躇もなく、彼は飛び降りた。

すると、浅野も直ぐさまそれに続く。

そして、着地すると二人は再び向き合った。

「……………覚悟は出来ているようだな」

浅野が刀の切っ先を向けると、七瀬も拳を構える。

「うおおお！！！」

咆哮と同時に駆け出すと、七瀬は左の拳を突き出す。

対して浅野は、それを刀で切り落とそうとするが、

「何!？」

刀は手甲を切り裂くことなく止まり、その刃を弾いた。

そして、次の瞬間には右の拳が、浅野の顔面を捉える。

「ぐあっ!？」

短い悲鳴をあげて転倒するが、浅野は直ぐに立ち上がり、

「……………どういつ……………ことだ？」

距離をとって、驚きを隠せない様子を見せていた。

対して七瀬は、不敵な笑みを浮かべる。

「何回も見させて貰ったからな。

どうやって切ってるのか、じっくり見させて貰ったぜ。

……………インパクトの瞬間刃を引いてるんだろ？

つまりは包丁で食い物切ってるのと同じ理屈。

それが分かってくれば切らせないのは簡単な話、刃とぶつかる瞬間にわざと打点をずらしてやれば切られることはない」

言われると、浅野はしばしの間、間の抜けた表情を浮かべた後、ニヤリと凶悪な笑みを浮かべた。

「……………そうか……………面白い、こうでなくちゃ直井の口車に乗った意味がないからな」

そんな台詞を発すると、彼は日本刀を上段に構える。

すると七瀬は、神妙な面持ちで拳を構えた。

しばらくすると、七瀬は傷だらけの姿でグラウンドを見下ろしていた。

その目の前には、土砂降りで抜かるんだ土と倒れた戦線の人間の鮮血が混じり合う、まさに惨状としか言いようのない光景が広がっていた。

「……………間に合わなかったか」

七瀬が呟いた次の瞬間、

「駄目だあーっ！」

突き付けられた銃口に怯むこともなく、音無は直井を殴り飛ばした。

「そんな紛い物の記憶で消すなあーっ！」

俺達の生きてきた人生は本物だ！

何一つ嘘のない人生なんだよ！皆懸命に生きてきたんだよ！そうして刻まれてきた記憶なんだ！必死に生きてきた記憶なんだ！

それがどんなものであるうが、俺達の生きてきた人生なんだよ！

それを結果だけ上澄みしようだなんて……お前の人生だって本物だつたはずだろ？」

その言葉に直井は、ただ呆然と暗雲立ち込める空を見上げている。

「お前の人生だって、本物だったはずだろ？」

自らの人生を否定する直井を、音無は抱きしめた。

「頑張ったのはお前だ。

必死にもがいたのもお前だ。

違うか？」

「……何を知った風に、」

「分かるさ。ここにお前もいるんだから、」

「なら、あんた認めてくれるの？」

この僕を、」

「お前以外の何を認めろって言うんだよ？」

俺が抱いてるのはお前だ。

お前以外いない。

「お前だけだよ。」

その言葉の優しさと温もりを感じて、直井は瞳を閉じる。

それを見ると七瀬は、しばしの間放心状態に陥っていたが。

「相楽くん！」

不意に名前を呼ばれ、彼は振り向く。

するとそこには、ボロボロの姿で彼を見上げる、ゆりの姿があった。

彼女を見付けると、七瀬は直ぐに駆け寄る。

「……………浅野は？」

「何とか寝かしつけてきた」

「……………そう」

「……………これで…終わったのか？」

「ええ、多分ね」

そんなやり取りをすると、二人は安堵の表情を浮かべていた。

第40話『The end of a war』

校長室

事態に收拾がつくと、ゆりはNPCに倒されたメンバーの回収を非戦闘員に任せ、生き残った音無、七瀬と共に直井との話し合いを行っていた。

「つまり、あなたはこれから、私達戦線の活動に参加するつもりなわけね？」

「ボクは音無さんについて行くんだ。別に貴様らの仲間になる訳じゃない」

そんな返答を聞くと、三人は呆れた様子で顔を見合わせる。

「……ところで直井。ちよっと聞きたいんだが」

ふと七瀬が尋ねる。

「何だ？」

「あの浅野とかいう奴、アレは何者なんだ？」

「アレは、ボクがこの世界に来たときには、すでに剣道部の主将を務めていた。」

生徒会に入ってから知り合ったんだが……ボクが目的の為に手段を選ばなかったように、奴は手段の為に目的を選ばない男だからな。調度戦力的に不安があったし、今回の作戦を教えたら、二つ返事で了解を得られた」

「……………剣道部の主将って……………人間は普通に学園生活送ると、消えるんじゃないかったのか？」

直井の言葉を聞いて、七瀬が訝しむような表情を浮かべる。

すると、それに答えるように、ゆりが声をあげた。

「……………簡単な話よ。」

直井くんが影でNPCに暴力を奮っていたみたいに、影で何かやってたのよ。

……………まあ、彼のあの行動パターンからすると、何をしていたのか大体想像はつくけどね」

それを聞いて、七瀬達がしばらくの間神妙な面持ちで沈黙している
と、

『……………ゆりっぺさん、聞こえていますか？』

不意に、ゆりが机に置いていたインカムから、遊佐の声が響いた。

「……………何かあったの？」

インカムを着けて呼びかけると、ゆりはしばしの間、遊佐と話し込む。

そして、

「分かったわ。」

作戦実行班が全員目覚めたら、搜索を開始しましょう」

そう言って、ゆりはインカムを外した。

「…………『搜索』って…もしかして、浅野か？」

七瀬が問い掛けると、ゆりは頷いて肯定する。

「相楽くんが彼を倒したと言っていた場所を搜索したけど、既に姿はなかったみたいよ。」

……あれだけ凶暴なのが野放しになってるって考えると、ある意味天使より脅威ね」

すると、七瀬は手甲を装着し始めた。

対してゆりは、彼を呼び止める。

「落ち着きなさい。」

「一対一でもギリギリだったんでしょ？」

他の人が起きてから、多勢で捕らえる方が効率的よ」

「いや、しかし」

「正々堂々とか考えてるんですけど、ここは堪えなさい。

次に浅野と戦うことがあったなら、味方の援護ありで戦ってもらわよ」

言われると、七瀬は多少不満げな表情を見せながらも頷いていた。

それを確認すると、ゆりは小さくため息をつく。

「……………何にしても、状況は目茶苦茶ね。」

とりあえず、しばらくはオペレーションもないだろうし、関根さんに無事の報告でもしてきたら？

多分、相楽くんのこと心配してるわよ」

ゆりのそんな台詞を聞くと、七瀬は一瞬間の抜けた表情を浮かべ、

「……………それもそうだな。」

かなり心配かけちゃっただろうし、一遍顔出すか」

同意すると、校長室を後にした。

教員棟、玄関前

「……あ、さっさん」

玄関を出た途端に後ろから声をかけられ、七瀬は振り向く。
すると、

「ん？……関根」

「無事だったなら、ギルドに顔出してよ」

「いや、その……ごめん」

「謝るくらいだったら、最初から行かないですよ。」

えいっ！

言って、関根はポコリと七瀬のボディを叩いた。

すると、七瀬は申し訳なさそうな表情を浮かべ、彼女の頭を撫でた。

「だから、ごめんって言ってるだろ？」

それより、そっちは大丈夫だったか？」

問い掛けられると、関根は小さく頷いた。

「うん、流石にあんな場所までは来なかったよ」

それを聞くと七瀬は、

「……そっか…良かった」

関根に微笑みかけた。

対して関根は、上気したように頬を赤らめていた。

第41話『Certain Lovesong(前編)』

学習棟A、空き教室

「ええー!?!」

じゃあ、浅野はまだそこら辺うろついているの?」

関根が動揺を隠せない様子で言うと、七瀬は頷いて応える。。

すると、集まっていたガルデモのメンバーは、不安げな表情を見せていた。

対して七瀬は、

「だから、しばらくは非戦闘員は一人で出歩くのは避けて、なるべく戦闘員を護衛につけるようにするよ。ゆりが言ってたぜ」

それを聞くと、ひさ子達は顔を見合わせた。

そして、ユイが不満げな表情で声をあげる。

「そんなこと言われても困りますよ。

関根先輩には相楽先輩がいますけど、私達は皆男け無しじゃないですか!」

「こ！？こラ！

変なこと言うな」

慌てて関根がユイの口を塞ぐが、それでも彼女はモゴモゴと何かを言おうとしていた。

一方で七瀬は、苦笑しながらその様子を見ている。

そうしていると、不意に教室のドアが開いた。

「チャオ 随分と楽しそうね？」

顔を出した朽木が言うと、七瀬は振り返る。

「ん？朽木、どうかしたのか？」

尋ねられると、彼女は神妙な面持ちで小さく頷いた。

「ゆりっぺからの伝令。

松下五段以下数名で編成された搜索隊が、山中にて浅野らしき人物と接触。

そいつはギルド連絡通路に逃げ込んだそうよ」

「連絡通路って……あんな場所じゃ狙撃も挟撃もできないし、あの化け物相手には不利過ぎるだろ」

七瀬が言うと、朽木は同意するように小さくため息をつく。

「だから、流石のゆりっぺも手を出せずにいるみたいよ。」

無闇やたらに突入すれば、ただ犠牲を増やすだけ、唯一アレと互角に戦える七瀬くんをぶつけても、今度も勝てるとは限らない」

「まったく、嫌なところに逃げ込むな」

「……そうね、それに一応は見張りを付けてるけど、普通の人間でアレを止められる気はしないしね」

そんなやり取りの後、二人は不安げな表情を浮かべていた。

そして、一度大きくため息をつき、朽木は表情を一変させて、ニヤニヤとからかうような笑みを浮かべる。

「ってことで、今ならしおりんにピッタリ張り付いていても、イチヤついてるとかのクレームはないだろうし、遠慮なくベタバタしていいわよ」

対して関根は顔を赤らめて俯ぐが、七瀬は訝しむような表情を浮かべ、

「関根だけ守るって訳にはいかないだろ？」

彼女に言った。

それを聞いた瞬間、関根の顔色が変わる。

「……………むう……………えい」

唐突に七瀬の足を蹴ると、彼女は不機嫌そうな様子で、プイッと顔を背けた。

「いてっ！？……何だよ？」

「……知らない」

振り向いた七瀬に顔を合わせることもなく、関根はベースをスタンドに置いて、ドアに手を掛けた。

すると、七瀬が声をかけるが、

「おい、何処行くんだよ？」

「食堂！……お腹空いたから、何か食べてくる」

不機嫌さを隠さずに言うと、彼女は教室を後にした。

「………何だっつてんだよ？」

七瀬はぼやくが、途端に朽木が彼の前に立つ。

「………ん？どうした？」

「鈍感」

問い掛けに応えるのと同時に、朽木は七瀬の眉間に軽くチョップする。

すると、それに続いてユイが、

「この鈍感野郎!!」

「うごっ!?!」

叫びと同時にフルスイングされたギターが脇腹に減り込み、七瀬は苦悶の表情で脇腹を押さえる。

しかし、次の瞬間にはひさ子が、今度は逆方向からギターで七瀬の脇腹を叩いた。

「鈍感」

「おごっ!?!……………お前らなあ……………」

七瀬が言いかけた次の瞬間、今度は入江がドラムの一つを頭の上まで持ち上げていた。

「……………うう……………どんかん!」

プルプルと身体を震わせ、今にもドラムを落としそうなそれを見ると、七瀬は驚きを隠せない様子で跳び退く。

「のあ!?!待て待て、それをたたき付けられたら、ドラムに飛び込んだ時のYOSIKIみたいになるから!?!」

取り乱す七瀬に対して、入江は気の抜けた様子でドラムを下ろした。

「ふ……………重かった」

「まったく……無理してまでやるなよ」

多少呆れた様子で彼は言うが、朽木がビシッと指を差して言う。

「相楽くん。女の子はね、どういう状況でも特別に扱って欲しいのよー!」

「……いや……特別に扱って……どういう風にすればいいんだよ」
問い掛けられると、朽木は胸を張って一切の遠慮を見せることもなく、

「つまり、抱けてことよ!」

「……………」

あまりに唐突の衝撃発言に対し、七瀬が沈黙していると、ひさ子が朽木の首に腕を回し、強制的に退場させていく。

「はいはい、ちょっと黙ってようねえ」

「うぐぐぐっ!?!……し、締まっている。

……完全に頸動脈に決まってるっしやるよ、ひさ子さん……………」

朽木は、ひさ子のチョークスリーパーにしばらくは抵抗していたものの、しばらくすると、気を失った様子でカクンと首を落とした。

「……………あ、落とした」

二人のやり取りを見ていた七瀬が呟くと、ひさ子は何事もなかった

様子で彼の前に出た。

「まあ、アレ（朽木）の言ったこともあながち間違いないよ」

（スルー！？）

「まあ、抱けとまでは言わないけどさ、他の女の子と接する時より優しくしてあげなよ」

ひさ子に言われると、七瀬はしばし考え込む。

「……優しくって……どんな風にやればいいか、良く分からないのだが」

そんな疑問に対して、入江が彼に詰め寄る。

「相楽さん。

深く考えないで、相楽さんなりの優しさを、しおりんに向けてあげてください」

「……俺なりって」

余計に混乱した様子で、七瀬は立ち尽くしているが、それに対し、ユイが背後から彼の腰に跳び蹴りを打ち込んだ。

「いいから！さっさと行ってこいやあ！ー！」

「うわっどー！？」

……分かったよ、関根のそこに行ってくりゃいいんだろー！」

仕方なさそうな表情で言つと、七瀬は蹴られた腰を押さえながら教室を後にした。

第42話『Certain Lovesong(中編)』

「……やれやれ、相楽の鈍感さにも困ったもんだ」

呆れた様子でひさ子が言うと、一同は苦笑する。

そんな中、ふと朽木が口を開いた。

「まあでも、相楽くんは仕方がないんじゃない？」

「「「「？」」」」

「また聞きした話だけだ。」

彼、生前は人の好意なんかからは、程遠い人生を生きたんでしょう？

……愛されたことのない人間は、愛し方も分からないものよ」

朽木の言葉を聞くと、ガルデメンバーの間には、しんみりとした
雰囲気を訪れる。

すると、入江が沈黙を破った。

「……でも、相楽さんは、皆に優しくしてくれてるじゃないですか？」

「それは、彼が養護施設で育ったからよ。」

好意を持つとつが持つまいが、身内に対しては助力する習慣がついて
るだけ」

そんな朽木の見解を聞くと、ガルデモメンバーは何とも言えない様子で黙り込んでいた。

大食堂、フードコート

「……………何て言うか……………すまん」

「フンッ……………」

とりあえず謝る七瀬に対し、関根はプイッと顔を逸らす。

(……………余計に機嫌が悪くなったな)

そう感じ取ると、七瀬は顔を引き攣らせる。

「……………はぁ……………女の扱いはサッパリ分らん」

そんなぼやきを聞くと、不意に関根は彼に問い掛ける。

「……さっさんはさ…そういう体験とか、したことないの？」

「『そういう体験』？」

「その……恋、とか」

モジモジとしながら言われると、七瀬はしばし考え込み、

「うーん……まず恋つてのがどういう状態なのか、よく分からん」

そう答えた。

すると、関根は訝しむような表情を浮かべる。

「……ホントに？」

「当たり前だろ？ 養護施設の出つて時点で距離を置かれるのに、プ口になる前は喧嘩に明け暮れてたんだぞ？」

七瀬が応えると、関根はしばし考え込み、何故か仄かに顔を赤らめて彼を見つめる。

「……それじゃあさ……練習…しない？」

「は？」

言葉の意味が理解できなかった様子の七瀬に対し、関根は続ける。

「だから、その……こ、恋人の真似してみるとか……」

「……………要は恋人ごっこか？」

「うん……………あ、相手が私なのに不安があるなら、無理にやらなくてもいいんだけどさ……………」

彼女が不安げな様子で言うと、七瀬は言葉に詰まる。

「いや、その……………別に嫌じゃないけどさ。」

……………具体的に、どんなことするんだ？」

「えっと……………」

「……………お前、もしかして考えてなかった癖に言い出したのか？」

問い掛けられると、関根はばつの悪い様子で黙り込む。

すると、七瀬は大きくため息をついた。

「……………はあ……………じゃあ何もできないだろ？」

「うーん……………あ！？そうだ！」

何かを思い付いた様子で声をあげると、関根はポンと手を叩いた。

学習棟 A 空き教室

「はあ？恋人っぽい行動？」

ひさ子が訝しむような顔で言うと、七瀬と関根は頷いて肯定する。

「とりあえず、思い付くことを書いてくれ」

「ひさ子さんに経験は期待しませんから、テレビで見たとか本で読んだとかでいいんで」

二人が言った次の瞬間、関根の頭にひさ子の拳骨が命中した。

「はぐ！？……痛い」

「今のはお前が悪かったな」

呆れた様子で言うと、七瀬は痛そうに目尻に涙を浮かべる関根の頭を撫でる。

対してひさ子は、

「とりあえず、恋人っぽい行動で思い付いたことを書けばいいんだ

ね

「ああ、助かる」

七瀬とそんな掛け合いをすると、彼女は八ガキ程の大きさの紙を受け取り、そこに何かを書き出した。

それを見ると、入江とユイ、それに朽木が七瀬達に歩み寄っていく。

「えっと、何だかよく分かりませんが、私達にできることなら協力します」

「あ、私も手伝います」

「そういうことなら、この経験豊かなお姉さんが、大人の意見を見せてあげるわ」

三人はそう言うと、ひさ子と同じように紙を受け取り、自分の意見を書き始める。

そんな中、七瀬はふと朽木の紙を覗き込み、

「おい」

紙に『SE』と書かれた時点で、それを破り捨てた。

「あら、せっかく思春期男子の性欲のことを考えて書いてたのに」

「思春期男子のことを考える前に、常識のことを考える」

朽木に言つと、七瀬は大きなため息をついた。

すると、ひさ子が彼と関根に問い掛ける。

「それで、何でまたこんなこと聞き始めたの？」

その問い掛けに対し、関根がごまかすように答える。

「いやいや、ただの退屈凌ぎですよ」

「ふ〜ん……それで、他の面子にも聞いて回るの？」

「あ、はい。」

とりあえず、ロクなこと書きそうにない男子は抜いて、女子にだけは聞いて回りますよ」

そんなやり取りをすると、関根は書き終えた入江達の紙を受け取り、七瀬を連れて教室を後にした。

第43話『Certain Lovesong(後編)』

大食堂、フードコート

「さてと、早速始めるか」

言うと、七瀬は先程戦線メンバーに欠かせた紙を入れた箱にてを突っ込み、中から一枚を取り出す。

二つ折りにされていたそれを七瀬が開くと、関根は緊張した面持ちで生唾を飲んだ。

「…………え」と…………手を繋ぐ」

(軽っ!?!…………みゆきちかひさ子さんがフォローしてくれただと思っけど…………この低難易度は何だか馬鹿にされてる気がする…………)

七瀬の読み上げた内容を聞くと、関根はそんなことを考える。

一方で七瀬は、さして考えるそぶりも見せず、彼女の手を握った。

「ひゃっ!?!?」

顔を赤くして関根が取り乱すが、七瀬からは反応は見えられない。

「こんなんでいいのか?」

「あう……いいんじゃないかな？」

「……一つ目はこれで終わりか……なんか呆気ないな」

そんなやり取りをすると、七瀬は関根の異変に気付き、

「ん？どうした？」

彼女に問い掛ける。

すると関根は、ビクリと肩を震わせて反応した。

「ふえ！？な、何でもないよ！」

焦りながら言うと、関根は顔を逸らして手を握る力を強める。

ギュツと握り締めた互いの手の感触を確認し、二人はしばし沈黙した。

(……柔らかいなあ。)

男と女でこんなにも硬さが違うもんか？)

(……硬いけど、暖かくて優しい感じがする)

そんなことを考えると、二人は多少気まずい様子で目を逸らした。

「……とりあえず、次の紙引くか」

不意に口を開くと、七瀬は二枚目の紙を引く。

そして、それを開くと、

「……何て書いてあるの？」

「デートだってよ」

関根の問い掛けに、七瀬は答える。

「……それで…どうする？」

この世界には遊べる場所も、ショッピングできる場所もないだろ？」

「……うん……じゃあさ、とりあえず、変わりに校内回らない？」

そんな提案が関根からあがると、七瀬は訝しむような表情を浮かべる。

「それでデートになるのか？」

「だから……その……手を繋いだまま行けばさ……」

「……いや、まあ…お前がそれでいいなら、いいんだけどさ」

七瀬が応えると、しばらくの沈黙の後、彼等は食堂を後にした。

中庭

「あ

小さく声をあげると、七瀬はその視線の先に奏の姿を見付ける。

すると、奏は二人に視線を向け、その手が繋がれていることに気付いた。

「……………何をしているの？」

「あ、いや……まあ……………デート……かな？」

七瀬が疑問形で応えると、奏はしばし考え込む。

そして、

「……………そう……………頑張ってね」

「は？何を？」

「……………デートを」

そんなやり取りをすると、彼等の間にしばらくの間沈黙が訪れた。

「……えっと…サンキュー」

「……っ！」

グツと親指を立てて激励されると、七瀬は苦笑しながら頷いていた。

部室棟

二人がしばらくの間歩き回っていると、ふと七瀬は一つの部室の前で足を止めた。

『映画研究会』と掛かれたそれを見ると、彼はふと呟いた。

「この世界でも、一応映画はあるのか」

「でも、素人レベルなんじゃないの？」

「まあ、それでも無いよりはいいだろ？」

関根の言葉に対し、七瀬が応える。

そんなやり取りをしていると、

「あれ？……何かご用ですか？」

部室からNPCの女子が顔を出し、小首を傾げて七瀬達を見る。

対して二人は、慌てて否定しようとしていた。

「いや、別に用があるわけじゃ」

「そうそう、ただ通り掛かっただけだよ」

そんな彼等に対して訝しむような表情を見せると、女子は繋がれた二人の手に視線を向け、何やら不敵な笑みを浮かべる。

「成る程 いいですよ。」

どうぞ見て行って下さい」

「え？いや、だから俺達は」

「いいからいいから、ほら彼氏さんも彼女さんも遠慮なく入って下さい」

意味が解らない様子で七瀬が断ろうとするが、女子は半ば強制的に彼の背中を押し、関根共々部室に押し込んでいく。

室内に足を踏み入れると、女子は部屋の端にあった椅子に二人を座らせ、直ぐ側にある映写機を動かし始めた。

「ラブロマン系を作ったんですけど、丁度カップルの感想が聞きたいと思ってたんですよ」

女子に言われると、七瀬は顔を引き攣らせた。

「……どうなってんだ？」

「……………」

「ん？どうした関根？」

黙り込む関根に七瀬は問い掛ける。

対して関根は、仄かに頬を朱に染め、呟くように答えた。

「……そ、その……カップルと、間違えられちゃったね」

「そりゃまあ、手繋いで歩き回ってれば、周りからはそう見えるだろっよ」

「……それはそうなんだけどさ……やっぱり、ちょっとくらい、お似合いに見えたかな？」

そんな台詞をもじもじとしながら口にする、普段の彼女からは掛け離れた態度を見ると、七瀬は動揺を隠せない様子でいる。

互いに、自身の体温の上昇と胸の高鳴りに戸惑いを見せながらも、普段は握りあった手を離すことなく、上映の始まった映画研究会の自作フィルムに視線を向けていた。

女子寮前

夕方になると、デート終えた七瀬は、関根を寮まで送る。

「なあ、ここまで手繋がなくても良かったんじゃないか？」

「ダメだよ、デートは家に帰るまでがデート」

七瀬の疑問に対して、関根が茶化すように言う。

「……それ、遠足だろ」

そんなツツコミに対し、彼女は屈託のない笑顔を見せていた。

そして、女子寮の入り口まで来ると、お互いに少し躊躇するような仕種を見せた後、惜しむように手を離す。

「……今日は楽しかったね」

「ああ、そうだな」

「………ねえ、ちっちゃん……」

「ん？」

「……また、デートしない？」

そんな提案を聞くと、七瀬は間の抜けた表情を浮かべる。

すると関根は、からかうように悪戯な笑みを浮かべ、

「なーんちゃって

さっさんも疲れちゃうだろうし、そう何回もやらないよ」

そんな彼女に対し、七瀬はふと微笑して、優しげに彼女を撫でた。

「俺としても、結構楽しかったし、またやっても構わねえよ。

……それじゃ、もう日も暮れて来たし、俺も帰るわ」

「あっ」

去り際の背中に、関根は何か声をかけようとするが、結局その先の言葉はでない。

そして、しばしの沈黙の後、彼女は顔を赤らめて寮に入ってしまった。

第44話『Monster stream(前編)』

大食堂、ランチコート

「…………お腹減ったあ」

テーブルに突っ伏すと、途端に関根はぼやき出す。

すると、前に座っていた七瀬は、

「何か食べばいいだろ？」

さっき食券のストック貰って来たんじゃないのか？」

「不足してるんだって」

「…………まあ、確かに最近トルネードやってなかったからな」

そんなやり取りをすると、七瀬は自分の食券の残りを確認した。

「…………俺も後一枚しか持ってないな」

「どのメニュー？」

「オムライスだよ。半分食うか？」

「うん、ありがとう」

そんなやり取りをすると、七瀬はカウンターに向かった。

「…………ふう、ごちそうさま」

オムライスの半分を食すと、関根は小さくため息をついた。

すると、七瀬は彼女の置いたスプーンを取る。

「それじゃ、残りは俺の分だな」

「あ」

まったく気にかける様子もなく、彼がそのスプーンでオムライスを口に運ぶと、関根が小さく声をあげた。

対して七瀬は訝しむような表情を浮かべる。

「どうかしたか？」

「…………あう…………な、何でもないよ…………か、間接キス」

「ごまかすように言って顔を赤らめると、彼女は顔を伏せていた。

「それにしても、もう食券ないのか」

「今夜辺り、トルネードがあるんじゃないかな？」

「今度からは止める相手もないし、戦闘の方はやることなさそうだな」

そんなやり取りをしながら、七瀬は昼食をとっていた。

校長室

「……で、報告ってなに？」

ゆりが尋ねると、高松は眼鏡を持ち上げて説明を始める。

「本日の食券が不足しているとのことですよ」

「どうする？トルネードいつとくか？」

報告を聞いて藤巻が尋ねるとゆりは、

「いや、今回のオペレーションは……モンスターストリームよ」

その作戦名を聞いた途端、室内には大山の悲鳴と松下やTKの叫びが木霊した。

一方で七瀬と音無は、戸惑いを隠せない様子で尋ねた。

「随分と仰々しい作戦名だな」

「何なんだ、その作戦は？」

モンスターなんてのがいるのかよ、この世界には！」

「ええ、川の主です」

高松が冷静に答えると、二人は彼に向き直る。

「川の主？」

間の抜けた表情で尋ねる音無に、日向が答える。

「ちょっと歩いたところに川があるだろ？」

そこで食料の調達だ」

「……そ、それってもしかして、単なる川釣りなんじゃ？」

「そうだけど、それがどうかしたか？」

「……ああ、いや（また釣られて馬鹿な想像をしてしまった）」

音無が呆れた様子を見せる一方で七瀬は、

「でも、モンスターって、ホラーマウンテンのときみたいに熊でも出るのか？」

「そんなもの出ないわよ。」

高松くんや日向くんの言った通り、『川の主』よ」

ゆりが答えると、七瀬はイマイチ納得がいかない様子で、訝しむような表情を見せていた。

作戦会議からしばらくし、戦線メンバーは問題なく川に向かっていった……ように思われたが、

「お前、なんてやつ連れてくんだよ？」

音無の連れて来た奏の姿を見た途端、作戦実行班はゆりを、ガルデ

そのメンバーは七瀬を盾にするようにして警戒していた。

「いいじゃないか。混ぜてやるっぜ?」

音無はなんとか彼らを説得しようとするが、警戒心が解かれる様子はない。

結局リーダーであるゆりに判断を任せられるが、

「……もう生徒会長でもないし、いいんじゃない?」

「……ええええ!?!?!?!」

当然ながら戦線メンバーは驚きを隠せない様子を見せていた。

「だ、大丈夫かよ?」

「なんか、すごい面子になりつつあるな。」

藤巻と日向が言うと、戦線メンバーはざわついてしたが、そんな中、七瀬が奏に声をかける。

「ってことで、よろしくな」

対して奏は、コクリと頷いて答えた。

それに続き、音無は彼女に手を差し延べる。

「……行っつ」

「……………」

無言のままの奏の手を引くと、音無と奏も、ゆり達を追って歩き出した。

一方で七瀬の後ろに隠れていたガルデメンバーは、

「ねえ、ホントに大丈夫なの？」

関根が問い掛けると、ひさ子と入江も不安げな表情を見せる。

すると、七瀬がポンと関根の頭を撫で、

「大丈夫だって。」

実際に直井に襲われたときには、味方だったろ？」

諭すように言くと、優しい微笑を浮かべていた。

第45話『Monster stream（中編）』

川に到着すると、戦線メンバーはそれぞれで釣りの準備を始める。

そんな中七瀬は、他の面子より少し下流の辺りでしていたが、

「ん？」

ふと彼が視線を向けると、直ぐ側の河原でガルデモメンバーが何故か靴下を脱ぎ、川遊びを始めようとしていた。

彼がそれをしばらく眺めていると、関根が訝しげな表情で問い掛ける。

「何か用？」

「いや、生足って、靴下脱ぐ瞬間が一番エロいなって思ってる。」

「っ！？」

関根が顔を赤くして咄嗟に手に持っていた靴下を投げつけるが、七瀬はさした同様も見せずそれをキャッチした。

「…………冗談だよ」

言いながらも、七瀬はキャッチした靴下を懐に入れる。

すると、関根は顔の赤みを更に増し、

「ち、ちよつと!?!」

「だから、冗談だって。」

流石にそんな趣味はない。

俺は衣服だけでなく、中身が伴わないと興奮しない派だ」

飛び掛かってくる彼女を押さえながら言うと、七瀬は多少呆れた様子でいた。

そんな二人のやり取りを見ると、側で釣りをしていた朽木が、からかうように言う。

「あんまりイチャイチャしてると、熱過ぎて魚が逃げちゃうわよ?」

彼女の言葉に関根は顔を赤くするが、七瀬はさして動揺も見せずにいる。

彼らがそんなやり取りをしていると、急に川の中心が渦を巻き始めていることに、七瀬は気付く。

「ん?」

そして、川に浮かぶ巨大な魚の影を見ると、七瀬は驚きを隠せない様子を見せる。

「のあ!?!何じゃこりゃ!?!」

悲鳴混じりの叫びを聞くと、ひさ子や入江もその影に気付き、慌てて岸上がる。

一方で関根は、

「これがモンスターストリームだよ」

七瀬に説明するように言う。

「モンスターストリームって……こんなにデカいのかよ」

驚きを隠せない様子で、七瀬はその影の先に視線を向ける。

すると、そこには通常では有り得ない程に釣竿をしならせる奏の姿があった。

「……おいおい、アレ釣り上げるつもりかよ」

そんな呟きを漏らすと、七瀬は自身の釣竿を置く。

同じように朽木も釣竿を置くと、

「あら？モンスターストリームは、出現すると即時撤退じゃなかったかしら？」

疑問を口にするのと、他の面子に呼びかける。

「とりあえず、行ってみましょ？」

対して七瀬達は、頷いて彼女に続いて行った。

「おい、お前らコレ釣り上げる気なのか？」

七瀬が問い掛けると、奏と彼女に組み付いて何とか繋ぎ止めようとしていた音無と、今回同行していたギルドメンバーの斎藤は、

「そんなこといいから、とりあえず手を貸してくれ」

「今は一人でも人手が必要だ」

「……分かった。」

とりあえず手伝ってやるよ」

応えて彼も参加すると、それを端で見ていた朽木が、斎藤に尋ねる。

「斎藤、モンスターストリームが起きたら即時撤退じゃないの？」

「だが、この娘ならどうにかなるかもしれん」

「そう言って川に引っ張り込まれたら、いい笑い者だぜ」

七瀬がぼやくと、音無が引き攣った顔で同意していた。

四人共全力で踏ん張るが、それでも主には勝てそうにない。

そうしていると、騒動に気付いた日向が

「なんだよ主をやる気か？」

「正気じゃねえな」

面白そうに笑うと、日向は他のメンバーに呼びかけ、自らも七瀬に続いていく。

日向の呼びかけから数秒後。

戦線メンバー一同は、なんとか川の主と互角に渡り合っていた。

「今だ！」

斎藤が主の一瞬の間を見つけ叫ぶと、奏は瞬時に反応し、しゃがんで膝のバネを利用したジャンプを行う。

……主と戦線のメンバーごと、

「釣り上げやがった!？」

「俺達ごとかよ!」

「どつちがモンスターだよ!」

「ねえ、この状況!？」

「まずいですね。」

空中に放り出され、下では主が口を開けて待ち構える状況に、日向、藤巻、野田、大山、高松が声をあげる。

すると、松下、TK、直井、七瀬の四人もそれに続き、

「このまま落ちたら食われるぞ！」

「Crazy for you！」

「神は落ちない」

「んなこと言ってる場合かよ!？」

『食われるうー!?!?』

一同の悲鳴が重なったとき、奏が動いた。

「……………助けなきや……………」

次の瞬間、奏の中からもう一人の奏が飛び出し、空中で主を細切れにした。

「やった!！」

音無が歓喜の声をあげた刹那、彼らは揃って川に落下した。

「……なあ、これあったらしばらくトルネードじゃなくていいんじゃないか？」

山のように詰まれた解体された主の残骸を見ると、ふと藤巻が言う。

「え、毎日これ食べるの？」

「いや、それ以前にどうやって保存すんだよ？」

「こんな量、食い切る前に腐っちまうぜ？」

大山の言葉に日向と七瀬が否定する。

すると、音無も頭を抱え、

「うーん……捨てるのもなんだしな

仕方ない、一気に調理して一般生徒にも振る舞うか？」

「あー、そうだな。

そうすっか」

「まあ、それしかないだろうけど……オペレーションの主旨変わっ

てるな」

日向と七瀬が提案を受け入れると、他の戦線メンバーもそれに賛同していった。

第46話『Monster stream（後編）』

グラウンド

解体された主をグラウンドに運び込むと、戦線メンバーは総出で調理を始めていた。

「…………お前ら、料理の方はどうなんだ？」

七瀬が問い掛けると、入江と関根がそれぞれで応える。

「少しだけなら出来ますよ」

「私は…その……学校の家庭科でやるくらいなら」

そんな対照的な回答に対して、七瀬が感心とも呆れとも取れる反応を見せていると、

「べ！？別に出来ないわけじゃないんだよ！」

唐突に取り乱したように関根が声をあげる。

すると、入江は彼女のフォローに入った。

「しおりん、重要なのは、上手に作ることじゃなくて、頑張ってることだよ！」

相楽さんも、そう思いますよね？」

問いただされると、七瀬は多少戸惑いながらも肯定する。

「いや、まあ……そりゃあ別に構わないけど」

「良かったわね、しおりん。」

お嫁さんの規準には達してるみたいよ」

朽木がからかうように言うと、関根は顔を赤くして俯いていた。

一方で七瀬は、ふと奏に視線を向ける。

音無と雑談しながら調理を進める彼女は、無表情ながらにどこことなく楽しそうなように見える。

「……まさか、こんな日がくるとはな」

しみりとした表情で呟くと、七瀬は微笑を見せた。

戦いなど形もない平和な日常。

恐らく、こんな日々がいつまでも続けばいいと、戦線メンバーのだれもが思っているのだろう。

「……戦いが無くなったら、俺達どうなるんだろうな」

そんな七瀬の言葉を聞くと、一同はしばし考え込んだ。

「……確かに……天使が仲間になって戦わなくなったら、戦線じ

やなくなるしね」

ひさ子は言うが、それとは対照的に朽木は落ち着いた様子だ。

「大して変わる訳でもないわよ。

今までだってすぎ放題やって来たんだから、これからはそこから戦いが抜けるだけ。

……趣味に走るもよし……恋をするのもよし……今までと、大して変わらないじゃない？」

それを聞くと、彼らは一度顔を見合わせ、互いに小さく頷いてにこやかな表情を見せていた。

『退屈』

グラウンドでの戦線の活動を遠巻きに眺める浅野の頭には、その言葉だけがあつた。

死んだ世界戦線と名乗り、神への復讐を目標とする彼らがどれ程のものかと期待していたが、地下通路の出入り口の警備はあまりにも拙く、唯一自身の『飢え』を満たしてくれる相手は、のうのうと女

生徒と戯れている。

「……………斬るか」

呟きを漏らし、彼が鞘に納まっている刀の鐔に指を掛けた次の瞬間、

「動くな」

唐突に後頭部に金属製の何かを押し付けられ、浅野は動きを止めた。

「……………あんなに堂々と見張りを倒して、バレないと思った？」

問い掛けると、彼にその金属、拳銃を突き付けたゆりは引き金に指を掛ける。

「全く……………あんたみたいな戦闘狂が、何でこの世界に来れたのかしらね？」

「分かりきったことを言うな。」

未練があるからこんな世界に来た、それだけだ」

「……………未練？……………あんたにそんなものがあるようには見えないけど？」

「教えてやろうか？」

「……………言ってみなさいよ」

親指でハンマーを下ろし、ゆりが計画しながら言う。

刹那、浅野は口を開くのと同時に振り返り、

「……………大暴れ」

容赦なく刀を振り抜き、それがゆりの拳銃を両断した。

「っ！？こいつ！」

使えなくなった拳銃を捨て咄嗟にナイフを抜くと、ゆりは浅野と対峙する。

対して浅野が凶悪な笑みを浮かべ、刀を構えるが、

「……………あなた達、何をやっているの？」

不意にそんな声が響き、二人は一度動きを止めて声の方向を見る。

すると、そこには深紅の双眸で彼女達を見つめる奏の姿があった。

「天使（……………こいつに助けられるのは癪だけど、嫌なことにタイミングはバッチリね）。

……………はあ……………こいつの相手任せるわよ」

そう言って、安心した様子でゆりが横を抜けようとしたそのとき、奏は唐突に袖から垣間見えていたハンドソニックで彼女を切り付ける。

「なっ！？」

切り付けられた腕を庇いながら、ゆりが距離をとると、奏は不敵な笑みを浮かべた。

「……そんな物騒な物を学校に持ち込むなんて……お仕置きが必要ね？」

そう言っつて、彼女が刃を振り上げたその瞬間、浅野が奏を切り付け、彼女はそれを受け止める。

「……何のつもりかしら？」

「……正に理想通りだ。」

躊躇なく切り付ける冷酷さ、それでいて笑みすら見せる狂暴さ……最高じゃないか！」

狂暴を絵に書いたような笑みを浮かべ、彼は刀を構えた。

そんな中、ゆりは二人の戦闘が始まったことを好機と見るや、咄嗟に駆け出した。

日も暮れて炊き出しの配給を終えると、戦線メンバーは鍋や食器を洗い、片付けを始めていた。

「そっぴゃ、ゆりっぺは？」

ふと野田がゆりの姿が見えないことに気付く。

すると日向と七瀬、それに藤巻が、

「言われてみれば、見てねえなあ？」

「まあ、ゆりっぺが料理してるところ自体、全然想像出来ねえし、いたら印象に残ってただろうな」

「どうせ、どっかで高見の見物だろ？」

こんな奉仕活動みてえなことに、参加するたまかよ。

つか、テメエも手伝え！」

そんなやり取りをしていると、不意にドサリと何かが倒れた音が響き、一同が振り向く。

すると、そこにはボロボロな姿で倒れ込むゆりの姿があった。

「ゆりっぺー!？」

日向が声をあげた瞬間には、彼らはゆりに駆け寄っていた。

「……………何があつたんだ？」

「ゆりっぺ！誰にやられたんだ！？」

問い掛けると、七瀬と野田は武器を構える。

対してゆりは、

「……………天使……………」

それを聞いた途端、一同の視線は奏に向けられた。

そんな中、音無が取り乱しながら彼女に言う。

「待てよ！奏はずっと俺といたぞ！？」

ゆりは何かを答えようとするが、間近に迫ったその気配に振り向くと、そこには校舎の屋上に立ち、赤い双眸を見せるもう一人の奏の姿があった。

第47話 『Dancer in the dark (前編)』

「皆で夜遊び?.....なら、お仕置きね」

不敵な笑みを浮かべると、もう一人の奏は戦線メンバーに刃を向ける。

対してゆりが、ナイフを構え彼女に立ち向かうが、簡単に圧倒されてしまう。

そんな中、音無が覚悟を決めた様子で声をあげた。

「皆、半円に取り囲め、集中砲火だ！」

ディストーションで曲げられようが、いくらか当たる」

途端に戦線メンバーはそれぞれ拳銃を抜き、もう一人の奏を取り囲んでいく。

「離れろ、ゆり！」

音無の合図に合わせてゆりが離脱すると、集中砲火が始まった。

しかし、弾丸は全てディストーションで弾かれ、もう一人の奏に傷一つ付けることは出来ない。

それを見て、七瀬が飛び出そうとするが、

「!?!」

彼の直ぐ側を通り抜け、『彼女』はもう一人の奏に飛び掛かった。

「奏え！！」

音無の叫びも空しく、二人の奏はお互いの胸を刃で貫く。

「ぐう！？」

奏が倒れ込む一方で、もう一人の奏は刺された胸を押さえながら、二、三步後ずさる。

刹那、

「うおおおお！！」

七瀬がその健脚で一気に接近し、もう一人の奏の鳩尾に拳を打ち込んだ。

既に弱っていた彼女が、その一撃で簡単に弾き飛ばされると、七瀬は直ぐさま倒れていた奏を担ぎ上げる。

「音無！この娘頼んだ」

真の抜けた表情を浮かべて放心していた音無に奏を渡すと、七瀬は再びもう一人の奏に向き直るが、既に彼女は立ち上がり、その場を走り去っていた。

翌朝、医局（閉鎖中）保健室

奏の眠るベッドを囲むように位置につき、一同は困惑した面持ちでいた。

同じ人間が二人いる理由、その答えとしてゆりと七瀬が示したのは、奏のガードスキルの一つ、ハーモニクスだ。

「……で、今の問題は何だっけ？」

「天使の分身と戦う方法か？」

大山の疑問に付け足すように野田が言う。

すると直井が、

「バカか。消す方法だ」

「何だと……」

野田が直井に迫ろうとするが、その途端に松下が押さえ込んだ。

「しかし、その子が意図的に出したのなら、意図的に消すことも出来るはずだろ？」

目覚めるのを待ってればいいだけではないのか？」

そんな意見に対し、七瀬と日向が否定的な意見をあげる。

「……そう上手くはいかないだろうな」

「意図的に消せたのなら、こつやってやられてるか？」

それに同意するように、ゆりも口を開いた。

「恐らく、無意識での出現ね。」

だから彼女にも消せなかった。

差し違えてでもやるしか無かったのよ」

「おいおい、ちょっと待てよ。」

アレが消えねえって、あんなのがい続ける世界になるのかよ？」

藤巻が不安げな様子で言う。

「……今は見逃されてはいるけど、明日からは許されない。」

模範的な行動から外れたら、直ぐさま昨日のような血生臭い戦闘になる」

……あまりにも絶望的な状況に、一同の表情も暗くなる。

しかし、それでもまだ、ゆりの顔には絶望の色は無かった。

「……少し、時間を頂戴」

「どつやって、その時間を稼ぐ？」

音無が尋ねる。

対してゆりは、

「授業に出て、そして受けるフリをして。」

先生の話には耳をけて傾けないで、授業をまともに受けたら消える。

分身にばれないように、とにかく別の作業に没頭すること、そして一日もちこたえて。

誰一人消えずに、再び会えることを祈るわ」

そんな彼女の言葉に、戦線メンバーは神妙な面持ちで聴き入っていた。

戦線メンバーがそれぞれで保健室を後にすると、ふと七瀬は思い出したようにゆりに問い掛ける。

「そういえば、ゆりっぺはどうやってあの狂暴な天使から逃げて来たんだ？」

すると、ゆりは多少不快そうな表情を浮かべる。

「浅野よ」

「は？何であいつが出てくるんだよ？」

「あの戦闘狂、天使の分身にいきなり切り掛かったのよ」

「その隙に逃げて来たと……あんなんでも役に立つときがあるんだな」

七瀬が顔を引き攣らせて言うと、ゆりは呆れ果てた様子でいた。

そんなやり取りをしていると、不意にゆりが何かを思い付いた様子で、

「あ、でも天使は追って来た訳だしアイツはやられたのよね？」

「まあ、流石にサシじゃ勝てねえだろ」

「……やられてたとしても、もう復活してるころよね？」

「まずいな。あんなのがまた、校内ウロウロしてんのかよ」

「女の子だけじゃ危ないだろうし、関根さんのところに行ってあげたら?」

「……………そうだな」

七瀬のそんな応えを聞くと、ゆりは一瞬間の抜けた表情を浮かべた。

「……………随分あっさりと肯定したわね。」

いつもなら『関根に限らないだろ?』とか天然丸出しのこと言うのに」

対して七瀬は、多少ムツとした表情で返す。

「……………天然は余計だ……………しかし、確かに自然と頷いてたな。」

何でだろ?」

それを聞くと、ゆりはニヤニヤとからかうような笑みを浮かべ、彼に言う。

「いろいろとあつたみたいね?」

この騒動が収まったら、惚気話でも聞かせて貰おうかしら」

「まあ、今はとりあえず天使対策しとこうぜ?」

俺は関根達と合流して授業受けてくるから、そっちもよろしく頼む」

「心得てるわよ。」

それじゃ、そつちも頑張りなさいよ?」

お互いの健闘祈ると、二人も他の面子と同じように保健室を後にした。

第48話『Dancer in the dark』(中編)『

廊下(保健室)

七瀬がドアを開けて部屋を出ると、そこには既に関根の姿があった。

「関根……何でここに？」

「えっと……き、狂暴な天使が出たって言っし、やっぱりさっさんと一緒にいた方がいいと思って。」

だから、その……ひさ子さんとみゆきちも先に行っ待ってるって
いうし、呼びに行こうと思ってさ。」

七瀬の問い掛けに対して、関根は多少戸惑うように応える。

すると七瀬は、ポンと彼女の頭に手を乗せ、

「そっか……それじゃあ、さっさと皆のとこ行くぞ。」

「うん。」

そんな掛け合いの後、二人は歩き出した。

女子寮、奏の部屋

「クソッ、この分厚さで全部英語？」

ただでさえ時間がないって言うのに「

奏のPCの能力開発ソフトのマニュアルを眺め、ゆりはぼやいた。

「……えっと……あ、高く跳ね上がった……これは距離か。
意味ないわね。」

ん？」

何かを見付けた様子で声をあげると、ゆりはしばらくの間ぶつぶつと呟く。

そして最終的には、

「……分からない。」

いっそパソコンごと壊してしまおうかしら？

……つて、アホか。
それじゃあ分身は消えない。

だあもう！分かるプログラムに書き換えてやる！
とつとと消える。

タイムウエイトは10秒。
どうだ？」

ゆりがエンターキーを叩くと、二人は10秒間の短い沈黙に入る。

結果、プログラムが起動すると、ゆり達は安堵の表情を見せた。

「よしっ　なんとかなつたわね。」

ん？何これ？」

ゆりがPCを覗き込むと、そこには新たに追加されたガードスキル
が印されている。

「増えてる？」

ハウリング？分身の方が作ったのかしら？」

ゆりが疑問の声をあげ、一瞬考えた後、プログラムを消去しようと
すると、

「……黽ごっこになりそうだし、やめた方がいいと思うわよ？」

不意に室内に声が響き、ゆりは咄嗟に銃を抜いて声の方向に突き付
けた。

すると、そこにいた人物、朽木はおどけた態度で手を挙げる。

「おお、怖い怖い。」

そういう物、いきなり向けないでくれる？」

言われると、ゆりは安堵の表情でため息をつき、銃を下ろした。

「……………ここで何してるわけ？」

「別に何もしてないわよ？」

ただ、ゆりの様子を見に来たら、ドアが開いていて無用心だったから、声をかけてあげただけ」

「そう……………心配かけて悪かったわね」

そんな掛け合いをすると、ゆりはPCをシャットダウンした。

彼女の反応を確認すると朽木は、

「新しいプログラムを作ったってことは、天使の分身も動き出したみたいだし、本体の近くにいた方がいいんじゃない？」

そう問い掛ける。

対してゆりは小さく頷いて応え、奏の部屋を後にした。

その後ろ姿を見送ると、朽木はPCに視線を向ける。

「……………Angel Player……………この世界を自由に改編する

ことの出来るプログラムか」

呟くと、彼女は不敵な笑みを浮かべた。

(……面白い、あまりにも面白過ぎる。

このプログラムの限界は何処なのか……何処まで影響を与えられるのか知りたい)

知識欲と探究心を駆り立てるそのプログラムに、朽木は色めき立つ。

「……この世界の秘密……見せてもらおうじゃない」

言うと、彼女はPCの電源を入れた。

保健室

ゆりが収集をかけ、戦線メンバーが保健室に戻ると、そこは既に荒らし回され、奏の寝ていたベッドはもぬけの殻だ。

「しくつた……」

奏の姿を消した室内を見回し、ゆりは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「どこかに出かけたんじゃない？」

「いや、それはない。」

奏は約束したんだ、俺達と一緒にいるって」

大山の脳天気な意見に対し、音無が声をあげた。

「そんな約束したの？」

「あ……ああ」

ゆりが問い掛けると、彼は戸惑いながらも応える。

すると、直井が割って入るように状況を説明した。

「この乱れようはさらわれたとしか思えない。

貴様、何をした？」

「『貴様』って…プログラムの書き換え。

もう一度あの娘が同じ力を使えば、追加した能力が発動して、分身は本体に戻るはずだった」

直井の問い掛けに対してゆりが答える。

それを聞くと高松が眼鏡を持ち上げ、

「そんなことが出来たんですか？」

彼女に尋ねる。

「付け焼き刃だけだね。」

でも敵の行動が予想以上に早かった。

あの娘を隠されたら打つ手がない」

それを聞くと、戦線メンバーは戸惑いの表情を見せていたが、ゆりは彼らに言い渡す。

「まず、今できることをしましよ。」

総員に通達、天使の目撃情報を集めて！」

対して戦線メンバーは頷いて応え、保健室を後にして行った。

そんな中、七瀬は保健室に残り、ゆりと向き合う。

「ん？……どうしたの、相楽くん？」

尋ねられると、彼は神妙な面持ちを見せる。

「なあ、浅野の奴は何処行ったか分からないのか？」

「……確かに彼の暴走は、オペレーションに影響を与える可能性が高いけど、今は緊急事態よ。」

浅野のことは忘れて、天使対策に専念しなさい」

二人がそんなやり取りをした次の瞬間、

「おいおい、俺はのけ者か？」

その声を聞いた途端、二人はビクリと肩を震わせ身構えた。

声の方に視線を向けると、そこにはガラスの割れた窓枠に背を預ける浅野の姿がある。

対して七瀬は、手甲を装着し始めるが、

「……天使の居場所、知りたくないか？」

問い掛けられた途端、動きを止める。

すると、ゆりが彼に拳銃を突き付けた。

「天使の居場所を知ってるの？」

「……知ってるからこそわざわざ来てやったんだ。」

ただし、交換条件がある」

それを聞いて、七瀬とゆりが緊張した面持ちを見せると、浅野は振り向いて七瀬を指差す。

「……お前、俺と闘え。」

「対一でこの間の決着をつけると誓うなら、教えてやってもいい条件を聞くと、二人は顔を見合わせ、しばらくの間沈黙していた。」

第49話『Dancer in the dark（後編）』

体育館内

「……おい、ゆりっぺ。
こいつは一体どういうことだ？」

訝しむような表情で言うと、藤巻は他の面子と一緒に七瀬の後ろに隠れながら、その場に居合わせた浅野を指差して尋ねる。

すると、ゆりは不機嫌な表情で、

「……今回だけの共同戦線よ。」

情報提供の代わりに、相楽くんとの決闘を要求してきてね。
狂暴な天使がうるついているウチはそれどころじゃないから、コイツにも協力させたのよ」

答えてため息をつき、続けた。

「迅速に集められた情報から、幽閉場所はギルドの可能性が高いとわかったわ。」

となれば、その最深部」

「あの爆破した場所にか？」

「そう。」

トラップは起動したまま。

最も危険で、最もここから離れた場所」

音無が問い掛けると、ゆりは即答する。

それを聞いた戦線メンバーは、不安を隠せない様子でいた。

しかし、それを気にかける様子もなく、ゆりは言い放つ。

「……今回は陽動なし。」

正々堂々に行くわよ」

「天使と戦いながらか？」

松下が尋ねるが、彼女の決意は揺るがない。

「そう。」

いい？作戦はギルドを降下して、その最深部にて無事天使のオリジナルを保護すること。

……オペレーション・スタート！」

ギルド連絡通路B4

「前のトラップはそのまま放置されてるな。」

ラッキー」

「あの、こんなところで天使に出くわしたら、どの道漏れそうなんですけど……」

「構わん」

「構って下さいよ!?!」

日向とユイが緊張感のないやり取りをしていると、

「あ」

ゆりが声をあげ、その視線の先には薄暗い通路に立つ赤目の奏の姿があった。

「早速現れたわね。」

撃て!」

彼女が声を発した瞬間、奏は駆け出し戦線メンバーのライフルを切り裂く。

対してゆりは、手榴弾を構え、

「まだハンドガンがある！」

投げつけると、爆発した瞬間に集中砲火が始まった。

しかし、

「ぐおっ!?!」

「!?!」

不意に後方から響いた野田の悲鳴に一同が振り向くと、彼はいつの間にか近付いていた天使のハンドソニックに貫かれていた。

二体の分身による予想外の挟撃に、戦線メンバーは戸惑いながら応戦する。

そんな中ゆりは、壁に設置された扉に気付く。

「入り口を塞ぐわ。

ついて来なさい!

行くわよ!」

ゆりが再び手榴弾を投げつけると、戦線メンバーは咄嗟に扉に駆け寄っていく。

そして、松下が開くと、

「あと10秒！」

間に合わなかった者は残して行く」

ゆりがカウントし、戦線メンバーは彼女の指示に従って扉の中に飛び込んでいく。

その間、最初に扉の前に到着したゆりと七瀬は、拳銃での威嚇射撃を続けた。

「…4…3…2…1…」

松下が扉を閉め始め、ゆりが走り出すと、七瀬は咄嗟に彼女の背中を押し。

そして、既に一体の分身はゆりに接近し、その刃を振り上げる。

「ゆり!？」

音無が閉ざされていく扉の隙間から、ゆりに手を伸ばしたそのとき、

「ふんっ！」

七瀬が分身の腹部にボディーパーを叩き込み、それを弾き飛ばした。

「相楽くん!？」

ゆりが彼の名を呼ぶと、七瀬は振り向くこともなく、拳を構え分身達と向き合う。

「……先に行け、俺はコイツぶっ飛ばして正面から下りてく」

その言葉が戦線メンバーの耳に届いた瞬間、重く分厚い扉は閉ざされた。

「……………さてと……………どうしたもんかな」

呟いた瞬間、二体の天使は並んで近付いてくるが、

「……………邪魔だ」

呟くような声が響いた次の瞬間、二体の天使は背中から切り付けられ、倒れ込んだ。

そして、二体を切り付けた浅野は、刀についた血を布で拭い、それを投げ捨てた。

「……………全く、俺を無視するとはいい度胸じゃないか」

「ぼやいてる暇ねえぞ。」

そいつらが起きない内に、さっさと進もう」

毒づく浅野に言うと、七瀬は歩き出した。

「それにしても、何故狂暴な天使が二体も？」

ふと浅野が疑問をあげる。

対して七瀬は、

「分身もガードスキルを使えるんだから、自分で増やしたじゃないのか？」

「なら、下にはもっと大勢いるってことだな」

「……嫌なこと言うなよ」

引き曇った顔で言うと、七瀬は小さくため息をついた。

ギルド連絡通路B10

「また現れた」

「三体目か……」

目の前に現れた三体目の天使を見ると、ゆり達は直ぐさま銃を構えるが、

「……弾がもつたいなかつ」

手で制すと、松下が前に出た。

そして次の瞬間、彼は雄叫びと共に天使に掴みかかり、身体を貫かれながらも押さえ込む。

「俺の意識がある内に行けー！ー！！」

『松下五段！』

「何だよその死に際だけいい奴みたいな台詞は！？」

一同が松下の名を呼ぶ中、日向がツツコミを入れていた。

一方その頃七瀬達は、

「おらあ！ー！！」

「ふんっ！」

七瀬が顎を叩き、次の瞬間には浅野が喉を切り付ける。その連携で天使は簡単に倒れた。

「……うっし、七体目も問題無く倒したな」

呟くと、七瀬はかつてギルドメンバーが作った、失敗作の大砲を見上げる。

「ここを降りれば、ついにギルドか。」

この下には、どんだけの天使がいるんだろうな」

「……どうした震えてるぞ?」

浅野が冷やかすと、七瀬はさして表情を変えることもなく。

「武者震いだ」

強気に言い張って、大砲の下の甲板に設置されたハッチを開いた。

長い梯子を慎重に、足場を確かめながら降りると、二人は辺りを見回す。

「……ホントに廃墟だな」

「お前らが爆破したんだろ?」

「いや、爆破はしたけど、わざわざ見に来たことはねえし」

七瀬達がそんなやり取りをしていると、

「……あなた達、こんなところで何しているの?」

聞き慣れたその声を聞くと、七瀬は拳を、浅野は刀を構え、振り向く。

しかし、そこには一体どころか数十体に及ぶ天使の姿があった。

「……どうした浅野、震えてるぜ？」

「武者震いだ」

七瀬の皮肉に浅野が応えると、次の瞬間、二人は振り返って走り出した。

「ぬおおお！勝てるわけねえだろうがあー！！」

「あんな数揃えて、戦争でもするつもりかアイツは！？」

悲鳴混じりにぼやきをあげると、二人は走り続ける。

途中何度も方向展開を行いながらも、彼らはしばらくの間、増殖した天使から逃げていた。

七瀬達が決死の逃亡を繰り返しているそのとき、ただ一人奏の分身との戦闘を避けた音無は、必死に奏の姿を探し続けていた。

ここまで他の戦線メンバーが道を作ってくれ、ゆりと日向の二人が背中を押してくれた。

そんな仲間達の思いに応えるため。
何より奏本人のためにも音無は一心不乱に彼女を探し駆け回った。

「お……」

不意に足を止めると、音無はクレータの中心で瓦礫に横たわる奏を見付ける。

「いた！」

「奏えー！」

彼女の名前を叫び駆け寄ると、ボロ布に包まれていたパジャマ姿の奏は、ゆっくりと目を覚ました。

「……大丈夫か？」

「……うん。」

「戦線の皆がな。」

命を張ってお前を助けに来たんだ。」

「そう。」

「そうだ！」

奏、無理させて悪いが、一つ能力を使って欲しいんだ。

ハーモニクスだ。使ってくれたら皆が助かる。」

「……そう、分かった」

「使っても、身体はもつか？」

「うん……一回ぐらいなら。」

……『ガードスキル・ハーモニクス』」

奏がガードスキルを発動させると、瓦礫の上に彼女の分身が現れ、音無は拳銃を出して警戒する。

「プログラムの書き換えをしたようね？」

「ああ、すべてこいつの中に戻る」

「あれだけの数の冷酷な私達が」

「……どうということだ？」

「分身にだって意識はあるの。」

それは消えてしまう訳じゃない、同化するの。

あなた達を襲ったたくさんの私達が、この娘の中に戻るの。

それだけの意識を一度に吸い込んでしまって、ただですむと思っ？」

「！？」

彼女の言葉の意味に気付き表情を変えた音無に対し、分身は冷酷な笑みを浮かべ姿を消した。

第50話『Duel（前編）』

奏を救出し、なんとかギルドからの生還を果たすと、ゆり達は体育館に上がる。

すると、

「……………あ」

不意に耳に入った声に一同が振り向くと、そこには日も暮れて暗くなった体育館に、一人立ち尽くす関根の姿があった。

彼女を見ると、七瀬が小首を傾げる。

「待っててくれたのか？」

「当たり前だよ……………その…心配したんだからね」

多少照れながら言うと、関根はギュツと七瀬の服を握る。

すると、七瀬は微笑し彼女の頭を撫でた。

「……………そっか、サンキューな」

二人がそんなやり取りをしていると、

「……………おい」

不機嫌そうな表情で、浅野が声をかける。

彼を見た途端、関根はビクリと肩を震わせ、七瀬の後ろに隠れる。

「な、何でコイツがいるの!?!」

「いろいろあつてな。」

またサシで戦うことになった」

「ええええ!?!」

だ、ダメだよ! せっかく狂暴な天使を消したのに、何でわざわざ危ないことするの!?!」

二人がそんな掛け合いをしていると、

「うるさい女だ。」

男の勝負に、女が口を出すな」

いらついた様子で言って、刀に手をかける。

しかし、瞬時に七瀬は関根を庇うように前に出て、浅野を睨みつけた。

「この娘に手を出すんじゃないわねえ。」

ぶっ殺すぞ!」

凄まじると、浅野は一転してニヤリと笑みを浮かべる。

「そつだ、そういうのを待っていた。

……ついて来い、サツサと決着をつけるぞ」

彼の言葉に対し、七瀬は小さく頷いた。

「……直ぐに帰るから、先行って待っていてくれ」

言い残すと、七瀬は浅野と共にその場を後にした。

学習棟屋上

「障害物もないし、邪魔が入れば直ぐにわかる。

決闘にはお誂え向きだな」

「……だな、昔から喧嘩って言えば屋上か河原って相場は決まっている」

浅野の言葉に対し、七瀬は同意するように応えた。

そして、互いに刀と手甲を装備すると、二人は同時に駆け出す。

「うおおおお！！！」

「はああああ！！！」

咆哮が響き渡った次の瞬間、手甲と刀身がぶつかり合い、火花を散らせた。

刹那の間に浅野が刃を返すと、七瀬は瞬時に拳を突き出し、再び火花が散る。

それを何度も続けながら、七瀬と浅野は極限の駆け引きを行っていた。

校長室

「だから！皆で止めて下さいよ……！」

関根が声を荒げるが、集まっていた戦線メンバー一同は、頷くことはない。

「……男同士の真剣勝負だ。
女が口出す事じゃねえよ」

藤巻が言つと、野田と松下が頷いて同意した。

「女には分からんだろうが、男には譲れない戦いがある」

「ここで決闘の邪魔をしまえば、相楽は後悔するだろうな」

対して関根は、納得できない様子でいた。

「でも、それでさっさんが、やられちゃったらどうするんですか？」
すると日向が、

「死ぬ訳じゃないんだし、好きにやらせてやれよ。

それに浅野の奴は確かにいかれてるけど、今回は十分に協力してくれたんだ。

「こつちだけ約束破るつても、気分が悪いだろ？」

そんなやり取りをしている戦線メンバーに対し、ゆりが面倒そうに声をあげる。

「はいはい！浅野のことは相楽くん任せで、今はそれよりも重要なことがあるでしょ？」

「……天使のことですか？」

高松が言うと、彼女は小さく頷いて肯定する。

一方で関根は、話を打ち切られたことに憤慨した様子で、思い切り机を叩いた。

「『それより』ってなんですか！

先輩達がそんなこと言うなら、私だけでもさっさんを止めて来ますからね！」

言われるが、ゆりはまったく気に止めもしない。

「好きにきなさい。」

ただ、相楽くんの為を思うなら、怪我するようなことはしないことをオススメするわよ」

言われると、関根は勢い良く部屋を後にした。

第51話『Duel（中編）』

校長室

「今までにないことです。」

天使のあんな状態は初めてです。

このまま二度と目覚めないということも、場合によっては有り得るかもしれません」

その場が集まっているメンバー……：ゆり、日向、直井、大山、藤巻、野田、朽木、ユイの9人に高松は説明する。

するとゆりが、高松の言葉を否定した。

「……それこそイレギュラーな事態よ。目覚めるわ。」

いつか目覚めて、ただ寝過ぎただけという結果に変わる」

「……そのときの彼女は、どの彼女なんだ？」

不意に、ゆりの言葉を聞いた椎名が尋ねる。

すると、一同は驚きを隠せない様子を見せ、

「ぬおー！？椎名がしゃべった！？」

「これは相当重要な問題ってことだよ！？」

「……まあ、一番重要な問題よね」

「浅はかなり」

藤巻と大山の言葉に、朽木と椎名が呆れた様子で言った。

対して、ゆりが赤城達の言葉を肯定する。

「まさにそう……それが問題よ」

「……で、どっちの天使なんだ？」

「それは最初の天使だよ。」

一緒に釣りをした」

藤巻の言葉に大山が答えるが、

「だが俺達を襲った天使は、すべて好戦的で冷酷だった」

「数で言えば100対1くらいだぜ？」

「今何故意識を失っているのか……多分、その沢山の意識があいつの小さな頭の中でこう……ぐちゃぐちゃになって酷いことになっているからじゃないか？」

野田と藤巻の発言に対し、日向が現状を説明するように言った。

それを聞くと、一同はしんみりとした雰囲気醸し出していた。

すると、大山が疑問をあげる。

「じゃあ、目覚めるとしたら、100人の意識で目覚めることもあるの?」

「割合で言えば、もとのままで目覚める可能性は約1%ってことね」

「じゃあどうする?」

ゆりが答えると、日向が尋ねた。

「手は打ってあるわ。」

竹山くんを天使エリアに送り込んだ。

マニュアル翻訳が出来る仲間と共にね」

「TKと松下は?」

「保健室よ。二人の見張り」

「二人から連絡があったら、場合によっては天使を監禁する必要があるかもね」

ゆりの言葉を保管するように朽木が不敵な笑みを浮かべた。

それを聞くと、今度は直井が問い掛ける。

「データをすべて消してログインパスワードを変え、すべての能力を封じる……ということか。」

だがそれも、一時凌ぎでしかない。
分かってるのか？」

「分かってる。」

いつかは突破されて、またデータを打ち込まれる」

すると今度は野田が、

「ならばマシンごと破壊してしまえばいい」

「マシンはコンピュータ室の備品として、いくらでも代わりはあるの。
ソフトも同様」

打開策の浮かばないまま、一同に苛立ちばかりが貯まっていく。

そんな中、ゆりはふと夜空を見上げ呟いた。

「後は天命を待つだけね……果して、神は誰に味方するのか？」

そんなゆりの言葉を聞くと、ふと朽木が思い出したように声をあげた。

「そういえば、相楽くんは何処行ったの？」

「浅野と決闘よ。」

アイツ、今回は決闘を条件に協力してきたのよ」

「ふうん……相変わらず体育会系のノリね。」

呆れた様子で言うと、彼女は窓に寄り掛かり、夜空を見上げていた。

屋上

手甲と真剣が幾度もぶつかり合い、その度に生まれる火花が、七瀬、浅野、両者の顔がハッキリと映し出す。

「いいぞ！こんな激しいのは始めてだ！！」

狂喜を見せると、浅野は刀を振るう速度を上げていく。

それに合わせて七瀬も拳を繰り出して対抗し、襲い来る刃を弾いていた。

命懸けの激闘がしばらくの間続くと、唐突に屋上の扉が開かれる。

「！？」

二人が同時に振り向くと、そこにはオドオドと怯えた様子の関根の姿があった。

「……………関根？」

「……………何だ、さっきの女か。」

続けるぞ、相楽」

「ちよっ！？ストロップ！」

七瀬達が再び戦いを始めようとした瞬間、関根が割って入った。

「やっぱりダメだよ！」

さっさんが怪我してまで守る約束じゃないって」

彼女が言つと、浅野は小さくため息をつき、刀を振り上げた。

「……………お前は邪魔だな」

眩きと同時に、刃が振り下ろされた瞬間、

「浅野おー！！」

咄嗟に七瀬が関根を抱き寄せ、空いた手で刀を受け止め、勢いを乗せたタツクルで浅野の弾き飛ばす。

対して浅野は、弾かれながらも難無く着地し、再び刀を構えた。

「この娘に手え出すなって言っただろうが!!」

怒鳴りつけると、七瀬は関根の前に出て拳を構えた。

そして、いきなりの出来事に間の抜けた表情を見せている関根に、彼は振り向くこともなく言う。

「……関根……心配してくれてサンキューな。

……でもさ、俺バカで負けず嫌いだから、やっぱり逃げるとか出来ないわ。

……だからさ」

「……だから?」

「なるべく怪我せずにアイツぶっ飛ばせるように、応援しといてくれ」

そんなやり取りをすると、七瀬は「三度両の拳をぶつけ合う。

一方で関根は、

(やっぱ、私じゃ何にも出来ないよね……………なら、せめて精一杯、応援だけでも……………)

覚悟を決めた様子で顔を上げ、七瀬の背中に声をあげた。

「さっさーっん！ファイトおー！」

彼女のそんな態度を見ると、浅野は不愉快そうな表情を浮かべる。

「……………うるさい女だ」

対して七瀬は、

「悪いな、ボクサーってのは、歓声の中で殴り合っもんなんだよ」

先程とは対照的に余裕すら感じられる様子で、拳を構えていた。

第52話『Duel（後編）』

その瞬間、浅野は自分に何が起きたのか理解することが出来なかった。

腕力も脚力も体力も、戦いに必要なものでは自分が勝っているはず……しかし、老い衰えた祖父に手も足も出なかったのだ。

「……………何で」

そんな呟きを発した浅野に対し、祖父は笑顔で応える。

『……………力だけじゃ、ダメなんだよ』

その時の浅野は、その言葉の意味を理解することは出来なかった。

444

「……………ゼエ……………ゼエ……………何だって言うんだ」

肩で息をしながらぼやくと、浅野は刀を構える。

た（……………あの女がギャーギャー騒ぎ出してから、突然強くなりやがった）

戸惑いを隠せない様子を見せる彼に対し、七瀬はまだ余力をも感じさせる物腰だ。

何が変わったわけでも、何かの増減が起きたわけでもない。

それでも、先程まで互角だったはずの七瀬は、現時点で優勢に立っている。

(……いや、一つだけこの場に加わったものがあつたな)

「やっっちゃえ、さっさん！」

「応よっ！……！」

関根の声援を背中に受け、七瀬は再び活気を取り戻す。

(ギヤーギヤーと喚き散らす女。

アレが増えただけで、アイツは明らかに強くなった)

自分には理解出来ないその事象を目の当たりにし、浅野は困惑しながらも、真剣を振り上げた。

「はああああ……！」

しかし七瀬は袈裟斬りに振り下ろされた刃を避け、側面から浅野の腹に二発、顔に一発ジャブを打ち込む。

対して浅野は、打撃に堪えながらも刃を返し、再び七瀬に向かい振り抜いた。

(……何故当たらない！)

七瀬目掛けて進行する刃は、彼の右拳によって止められる。

(……何故止められる!!)

そして、次の瞬間には七瀬のジャブが連続して顔面を捉え、怯んだ瞬間に強烈な右ストレートが見舞われた。

「ぐほっ!? (………何故、勝てない……)」

のけ反って数歩下がると、浅野は刀を杖のようにして、何とか倒れずにいる。

(………そんな筈はない………あんな女と色ボケてるような奴に、俺が劣る筈がない)

満身創痍で意識が遠退く。

自分がいかに追い詰められついるかを要約理解し、浅野は正常な判断能力を失っていた。

その視界にたまたま関根が入ると、彼の理不尽な憤りは、今も七瀬に声援を送り続ける彼女に向けられる。

「………このっ!クソアマがあああ!!」

叫び声と同時に、切っ先は関根へと向けれた。

唐突なその行動に七瀬は驚いている間にも、刀身は彼女に突き出される。

「くっ!?!このっ!!」

考える暇もなく、七瀬は関根と浅野の間に割って入った。

刹那、左の片口に刃が突き刺さる。

「ぐあつ!?!」

「さっさん!?!」

自身の悲鳴に続き関根の悲鳴もあがると、七瀬は浅野を睨みつけた。途端に刺された肩の痛みが気にならなく成る程の怒りが込み上げてくる。

それに気圧された様に、浅野は一步下がって刀を引き抜き、構え直そうとした。

しかし、

「ぐがっ!?!」

七瀬の右拳が、刀身を中程からへし折り、彼の顔面を弾いた。

続いて左手を上げると、先程刺された傷口から、血が吹き出す。

だが、背後から関根の声が響くと、彼は気にとめることもせず、左の拳を突き出した。

「浅野、この娘に手え出すなって、言っただろうがあああ!?!」

咆哮と同時に、七瀬の両の拳が連続して浅野を捉えていく。

痛みもあるし疲労もある。

それでも、自分の後ろで関根が応援してくれているのを感じるだけで、まだ闘えると言う感情が込み上げてきた。

そして、トドメの一撃に、右のアップパーで浅野の顎を打ち上げる。

その一撃を受けた瞬間、浅野の意識は飛び、再び彼の脳裏に生前の記憶が再生される。

幼い頃は、試合に勝つことが嬉しく思えた。

相手より速く竹刀を振り、的確に部位を捉える。

勝つ度に家族や友人からは歓声と賛美の音が響き、それを心地好く思っている自分がいた。

しかし、勝ち続けていると、いつしかそれは何の感動も生まなくなる。

勝つのは当たり前であり、自分が『強い』ということを確認することも出来ない。

そんな日常の中で、彼はついに実戦に手を出してしまった。

相手は所謂不良グループ。

浅野は逢えて彼らを挑発し、多対一の喧嘩で木刀を使い全員を病院送りにした。

そんな浅野を見兼ねて、彼の相手をしたのは、当時道場で剣術を教

えていた祖父だ。

結果は惨敗。

まともに竹刀が相手に触れることもなく、彼は敗れた。

『……………何で？』

『……………力だけじゃ、ダメなんだよ。

力だけじゃ、強くはなれない』

『じゃあ、どうすれば強くなれるんだよ！』

そんな問い掛けに対し、祖父はにこやかな表情を向けたまま答えた。

『……………家族でも恋人でも友人でも、何でもいい。

大切な人を見つけないさい。

傷付ける為ではなく、守る為に強くなるうと思えるようになれば、お前は今よりずっと強くなれている筈だ』

対して浅野は、全く納得出来ずに反論した。

『意味が分からん。

守るだけでなれるなら、強さって、なんなんだよ？

強いつて、どういうことなんだよ？』

尋ねられると、祖父はただ困ったような表情を見せていた。

意識を取り戻すと、彼の視界には夜空が映った。

自身が仰向けになっていることに気付き、彼は視線を下げて正面に立つ七瀬を見る。

(……………何で、コイツはこんなにも……………ん?)

冷静に眺めて見ると、浅野は七瀬の体中に浅い切り傷があることに気付いた。

(……………当たっていたのか。)

……………互いに満身創痍……………しかし、何でコイツは倒れない？
どうして立っていられる?)

そんな疑問を浮かべていると、不意に七瀬が背中を向け、同時に根の姿が視界に入る。

すると浅野は、

「……………なあ……………強いつて、どんな気分だ?」

唐突にかすれた声で問い掛ける。

対して七瀬は振り向くことなく答えた。

「……………知らん」

それを聞くと浅野は、次にこう尋ねる。

「……………じゃあ、大切なものを守るって、どんな気分だ？」

「……………最高だ」

そんな回答を聞くと、浅野の口元が緩む。

(……………成る程……………『強い』ってのは、最高の気分だったのか……………)

微笑すると、彼はゆっくりと瞳を閉じた。

校長室

「……………そう……………浅野は消えたの」

七瀬達の報告を聞くと、ゆりは彼らが持ち帰った折れた刀を手にとり、それを弄りながら言った。

「とりあえず、お疲れ様。」

他の面子も解散させたし、今日のところは休んでていいわよ」

そんな言葉に対して頷くと、二人は振り返って部屋を出ようとするが、

「おっと……ありゃ？」

「え？」

躓いたようにバランスを崩した七瀬は、バランスをとろうとする様子もなく、関根を巻き込んで押し倒すような形でソファーに倒れ込んだ。

「うわつとー!？」

「ふえ!？」

七瀬はなんとか手で身体を支え、のしかかることは防ぐが、今までにないほどに二人の距離は近い。

すると関根は、顔を真っ赤にし、

「ふあ!??だ、ダメだよ、さっさん!

こ、こんな所で、ゆりっぺ先輩だつて見てるのに……」

心なしか嬉しそうな表情で言われると、七瀬は顔を引き攣らせる。

「…………悪い…立てねえ」

「へ？」

「…………さっきので血出し過ぎたみたいで、全然力が入んねえんだよ」
そんな回答を聞くと、関根の顔は更に赤みを増した。

対して七瀬は、苦笑しなから彼女に言う。

「とりあえず、腕で支えられてる間に、抜けてもらえるか？」

「あ…うん」

頷いて、彼女が退こうとした時、互いの手がぶつかり合い、七瀬の腕の力が抜ける。

「「あっ」「」

思わず声が漏れた次の瞬間、七瀬の顔が関根の胸に埋まる。

途端に七瀬は柔らかい感触と、甘ったるい香りに包まれた。

そして、

「……………いいいいいやあああ！…！」

悲鳴と同時に、関根は七瀬をソファから蹴り落とした。

「ぐお！？……お前なあ…怪我人だぞ？」

七瀬が言うと、関根は顔を赤くしたまま俯いていた。

第53話『Meddlesome(前編)』

浅野消失の翌日の朝、全校集会では学園の講堂では奏のテストのすり替えが判明したことが校長から告げられた、奏の生徒会長復帰の発表が行われた。

一方で彼女の答案すり替えに関与した戦線メンバーは、揃って反省文を書かされている。

「あゝもうつ何で僕がこんな目に！」

「一人残らず暴き出しやがって……」

竹山と日向がぼやくと、高松や相楽も同意する。

「地獄の勉強会はなんだったんだ？」

「あの錐揉み飛行はなんだったんですか？」

すると、日向は立ち上がって声をあげる。

「だよなあ!？」

「おや? 珍しく意見が合いましたね？」

「やらされた奴にしか分からねえよ。

この気持ちは!

俺達は錐揉み飛行仲間さ!」

「ふっ……おっと、私を脱がす気ですか？」

「おー、脱いでやれ脱いでやれ」

そんな日向と高松のやり取りを聞くと、ゆりが呆れた様子を見せる。

「やめなさいようるさい」

「そっだ！気持ち悪いやめろ！」

「どっちですか？」

いつも通りの他愛もない掛け合いの中で、七瀬は苦笑する。

そうしていると、ふいに大山が口を開いた。

「……にしてもあの娘、もうここ数日のこと全部忘れちゃったみたいだね」

「当然です。」

100の方が勝ったんですから。

我々を襲った方が」

「ホントに一瞬仲間になれるかもって思っちゃったぜ。」

……ああクソお！」

話題が奏について変わると、それぞれ不快そうに声を荒げる。

すると、音無は沈んだ雰囲気になっていた。

(……………まずはあいつらから、過去の話聞き出さなきゃならない。

でも、敵を失ったままじゃ、ゆりの目を盗んで動くのは不可能だ。

でも、幸いなことに、相楽や朽木みたいに奏と個人的な繋がりを持っている面子もいて、手を貸してくれるかもしれない)

そんなことを考えながら、音無は窓の外の景色を眺めていた。

園芸部、園芸場

「……………?」

園芸場に足を踏み入れると、奏は明らかに手入れされたそれを見て、小首を傾げる。

するじ、

「あら？ハーモニクスの人格に、乗っ取られたんじゃないの？」
不意に朽木が顔を見せた。

「……フムフム……成る程、実際は元の人格が勝ってたみたいね？」
納得した様子で言うと、朽木は不敵な笑みを浮かべる。

「……それで、何の目的でこんな偽装をしたのかしらね？」

「……それは……皆の未練を取り除くには、そうした方が効率が
いいって、結弦が」

「……『未練を取り除く』ねえ。

いいんじゃないの？

少なくとも、私は否定しないわよ」

「……じゃあ」

「でも、協力はしないわよ。

私はまだまだやりたい事があるし、勧告されても聞く気はないし、
強制されれば抵抗するわ。

ほら、分かっただけ帰った帰った、ここは相楽くんが整えてくれる
し、あなたが此処にくる必要はないのよ」

「……でもこれは私が始めたことだから」

「……まあいいわ。」

とりあえず、邪魔さえされなければ私もあなたの邪魔はしないから、そこんところよろしくね」

そんなやり取りをして、朽木は持ち込んでいたラップトップに視線を戻すが、

「あ、そうだ」

ふと思い出したように声をあげると、彼女は奏に言う。

「一つだけ、アドバイスしてあげよっか？」

不敵な笑顔で言われると、奏は訝しむように小首を傾げていた。

第54話『Meddlesome』中編

大食堂

「それにしても、アレだな」

藤巻、TK、松下と麻雀をしていると、ふと七瀬が口を開く。

「アレってなんだよ？」

藤巻が問い掛けると、

「いや、俺ら女つけ無いなってさ」

「七瀬には関根がいるだろう？」

「嫌みにしか聞こえねえよ」

七瀬の言葉に対し、松下と藤巻が言う。

すると七瀬は、

「……ふむ……そういう風に見えるか？」

彼らに問い掛けた。

対して藤巻、松下、TKの三人はそれぞれで応える。

「始終ちくり合っというて、よく言っぜ」

「あれだけ違和感なく一緒にいると、普通はそういう関係に見えるが」

「Avec」

そんな反応を見ると、七瀬はしばしの間考え込んでいた。

彼らがそんなやり取りをしていると、

「お、麻雀やってんの？」

不意に後ろから、ひさ子が声をかけてきた。

「ん？ガルデモの練習は終わったのか？」

「まあね。」

それより、後どのくらいかかりそう？」

「やりたいなら変わるうか？」

「うん、サンキュー」

短い掛け合いの後ひさ子と入れ代わると、七瀬は立ち上がって一度伸びをする。

そうしていると、今度は背後から関根の声が響いた。

「おい、さっさーん！」

振り向くと、そこには既にテーブルにしている関根、入江、ユイの三人の姿があった。

「よ、お疲れ」

「作戦実行班は、最近暇そうだね？」

「まあな。実際にトルネードすらなくてやることないし、正直かなり退屈してる」

「ふん……」

二人が雑談していると、

「だったら、二人でデートでもしてきたらどうなの？」

不意に朽木が声をかけてきた。

対して関根は、顔を赤くして取り乱す。

「で、デート何てしないって!？」

しかし、七瀬は間の抜けた表情で、

「あれ?この間」

「わー!!わー!!なしなし、アレはノーカウント!」

「ノーカンなのか？」

そんなやり取りをする二人を見ると、朽木が不敵な笑みを浮かべた。

「にゅふふ デートは既に経験済みか。」

それじゃあ、皆で肝試しとかはどう？」

彼女の提案を聞くと、七瀬、関根、ユイの三人は訝しむような表情を浮かべ、入江は青ざめさせていた。

深夜、学習棟A、昇降口

「よっ」と

日向が声をあげるとほぼ同時に、昇降口の鍵がカチャリと音をたてる。

すると、彼は鍵穴からキーピックを抜き、振り返った。

対してその場にいた七瀬、関根、入江、ひさ子、ユイ、朽木の六人は、

「それにしても、本当に幽霊なんて出るのか？」

「死後の世界なのに出るわけないんじゃない？」

「そ、そうそう、しおりんの言う通りですよ！」

だから、肝試しなんてやめにして帰りましょ？」

「落ち着け入江」

「肝試しって、一回やってみたかったですよね」

「まあまあ、とりあえずはNPCの間では、見たって噂になってるわけだし、一回見回ってみましょ？」

彼女達がそんなやり取りをしている一方で、日向が不満そうな表情を浮かべた。

「何で俺呼ばれてんだよ？」

対してユイが、

「だって、私達鍵開けられませんし」

「他の方法を見付けろよ!？」

「つか、こんなことやって、もし天使に見付かったら」

「……………見付かったら？」

不意に暗がりから声が響き、日向は引き攣った顔で振り返る。

すると、そこにはこちらに向かいトボトボと歩いてくる天使の姿があった。

「……………おいおい、言ってる側から来ちまったじゃねえかよ」

言つと、彼は懐の銃に手をかけるが、途端にその前に人影が飛び出す。

「待て待て！？この子に戦意はない！」

声をあげたのは、何故か天使の後ろから出て来た音無だ。

「音無……………お前、そいつと一緒に何やってんだよ？」

日向が問い掛けると、彼は慌ててごまかす。

「あ、いや、それはその……………そうだ！さっきそこであって、お前らが肝試ししてるって話を聞いてついて来たんだよ」

「ん？……………何でその娘が肝試しのこと知ってたんだ？」

七瀬が問い掛けると、

「私が許可を取っておいたのよ」

朽木が答えた。

途端に一同の視線が彼女に集まるが、

「とりあえず役者は揃ったわね。」

それじゃ、ひさ子とみゆきは1階、ひなつちとユイが2階、音無くんと天使が3階、相楽くんとしおりんが4階、私が屋上を探索して、幽霊らしきものを目撃したら、皆でその場所を探索しましょう？」

気にかけることもなく、話を進めていた。

第55話『Meddlesome（後編）』

学習棟A屋上

「……さてと」

腰を下ろして呟くと、朽木は持っていたノートPCを開き起動させる。

しばらくして画面が写ると、彼女は操作を開始し、ディスプレイには学習棟の各階の映像と、奏のPCのディスプレイに見えていたものと瓜二つの『Angel Player』の制御画面が映されていた。

467

「見せてもらおうかしら、Angel Playerの実力を」

不敵な笑みを浮かべ呟いた次の瞬間には、彼女の指はエンターキーを叩いていた。

暗くなつた廊下を七瀬と関根は懐中電灯の光りだけを頼りに歩く。

「……幽霊なんて影も形もねえな」

「そりゃそうだよ。」

ここは死後の世界なんだから、これ以上死んじゃってる人なんているわけないじゃん」

そんなやり取りをしていると、ふと七瀬は思い付いたように声をあげる。

「……一応、教室の中も見とくか？」

「うん、時間もあるしね」

同意を得ると、二人は一番近い教室のドアを開き、入室した。

すると、突然廊下からガタツという音が響く。

「ひゃっ!?!」

「ん?」

驚いた関根が抱き着くと、七瀬は振り返ってドアを開き、一度廊下を見渡した。

すると、隣りの教室に駆け込む人影が視界に入る。

「……………誰かいるのか？」

呟くと、七瀬は歩き出そうとするが、関根が怯えた様子で抱き着く力を強める。

(……………まあ女の子だし、流石に怖いか)

そんな事を考えて、七瀬は彼女の頭を撫でた。

「俺が見てくるから、ここで待っていてくれ」

「う、うん」

頷いて関根が手を離すと、七瀬は隣の教室に向かいドアを開いた。

「……………誰かいるなら出てこい」

声をかけるが返答は返ってこない。

そして、七瀬が教室の中心に視線を向けると、そこには一人ポツンと立ち尽くす人物の姿があった。

それを見ると、七瀬は表情を引き締め拳を構える。

対してその人物も同じように拳を構え、一気に駆け出した。

「っ!?!?」

唐突に突き出された拳を辛うじて躲し、七瀬はカウンターに右ストリートを打ち出すが、それは相手の頬を掠めるだけに終わり、次の瞬間にはその顔が微かな月明かりに照らされる。

すると、

「なっ!?!」

紛れも無く自分でしかないその顔を見て、七瀬は動揺を隠せない様子を見せていた。

「……何で、俺が」

呟いた次の瞬間、鋭いパンチが彼の鳩尾を捉えた。

「ぐお!?!」

くの字に折れた七瀬に対し、もう一人の七瀬は拳を振り上げ、彼は咄嗟にガードするが、

「ぐう!?!」

力なく身体は弾かれ、後ろにあった窓を割り、七瀬は落下した。

一方その頃関根は、先程の教室で七瀬の帰りを待っていた。

「……………さっさん遅いなあ。」

何かすごい音してたけど、大丈夫かなあ？」

そんな独り言を呟いていると、不意にドアを開き、七瀬が入室した。

「あ、さっさん」

呼ぶと、彼女は七瀬に駆け寄っていく。

「大きな音してたけど、何かあったの？」

「……………いや、まあ……………ちよつとな」

ごまかすように言うと、彼は唐突に関根の紙をそつと撫でる。

すると彼女は、ビクリと肩を震わせ、七瀬の顔を見上げた。

「あう……………え、えっと……………どうかした？」

問い掛けられると、彼は関根の肩に手を乗せ、

「……………お前さ、やっぱり可愛いな」

「ふえ！？い、いきなり何言ってるの！」

取り乱す関根に対し、七瀬はそのか細い手を掴み、押し倒すように上体を机に寝かせる。

上気し赤らむ彼女の制服のリボンを、七瀬はつまんだ。

「……………さ、さっさん？」

どうしたの？さっさんらしくないよ？」

ドキドキと鼓動を速める胸を押さえ、関根が問い掛けるが、

「お前だってさ、結構こういう展開期待してたんじゃないのか？」

真剣な表情で尋ね、七瀬はリボンを引き抜いた。

その瞬間、

「すき放題、やってんじゃないっ！！」

唐突に響いた怒号と共に、七瀬の顔面が大きく弾かれた。

「おじっ！？」

それを行った相手を見ていると、そこにいた人物は明らかに七瀬である。

「へ？……………さっさんが、二人？」

あまりに想定外の事態に関根が間の抜けた表情を浮かべていると、その間にも二人の七瀬は戦闘体制に入っていた。

「うおおお！！」

同時に方向し、同時に互いの右ストレートが顔面を捉えるが、それに怯んだ片方の七瀬に対し、もう片方の七瀬は連続して拳を叩き込む。

激しいラッシュに片方の七瀬が襲われ窓際まで追い詰められると、もう一人の七瀬は拳を再び右ストレートを繰り出し、それは片方の七瀬の顔面を捉えて、ガラスを砕き窓から突き落とす。

「おらあああ！！ざまあ見ろ！」

咆哮すると、七瀬は肩で息をしながらも、ゆっくりと振り返った。

対して関根が、ビクリと肩を震わせる。

「……関根、大丈夫か？」

「アイツに何かされなかったか？」

「え、あ……えつと…ギリギリ、大丈夫だったかな」

そんなやり取りをすると、関根は相手がいつもの七瀬だと判断し、安堵した様子でため息をついた。

「はあ……さっきの……もう一人のさっさんは何だったの？」

「知らん。あの野郎、突然表れやがって。」

びっくりして最初は窓から落とされちゃったよ」

ぼやくように言うと、彼は服についた枝や葉っぱを払っていた。

学習棟A、屋上

「……残念、暴走時のことを考えて、死んだら消える設定にしていたのが良くなかったわね。」

でもまあ、試したいことは試せだし、今日はこのくらいにしとくかな」

独り言のように言うと、朽木はプログラムを閉じ、PCをシャットダウンした。

そして、立ち上がると再び眩く。

「……もう少し、楽しませてもらうわよ。」

『Angel Player』ちゃん「」

不敵な笑みを浮かべると、彼女は屋上のドアを開いた。

第56話『Doppelgänger』(前編)『

学習棟A

「とりあえず、皆と合流するか」

七瀬が言つと、関根は頷いて同意する。

そして、二人が教室から出ようとする時、

「おいっ！今相楽が落ちていったけど、何かあったのか!？」

勢い良くドアを開き、奏を引き連れた音無が顔を見せた。

「って……何で落ちたはずの七瀬がここに?」

「アレは俺じゃねえ」

「?」

音無が小首を傾げていると、今度は奏で口を開く。

「……二人とも、ずいぶん服が乱れてるみたいだけど、何かあったの?」

「いや、まあ……説明しろと言われると、ちょっと難しいな。

とりあえず、色々ヤバいことが起きてるみたいだし、一度ゆりっぺのところに帰ろう」

七瀬が言うと、他の面子は頷いて同意していた。

校長室

「は？もう一人の自分？」

ゆりが言うと、七瀬は小さく頷いた。

すると彼女は訝しむような表情を浮かべ、

「見間違いじゃないの」

「実際に殴りあったぞ」

「……関根さんも見たの？」

顎に手を当て考えるような仕種を見ると、彼女は関根にも確認する。

「見たも何も、実際に襲われたんだよ？」

ほら、リボン持ってきてかれちゃったし、服にしわついちゃってるよ」

「……やっぱり何かされたのか？」

七瀬が尋ねると、関根は途端に取り乱し出す。

「だ、大丈夫だよ！」

何かされる前にさっさんが助けてくれたし」

「そうか？」

「心配し過ぎだよ」

「……そうは言ってもな。」

守るために一緒にいたわけだし、何かあったら俺の責任もあるだろ」

二人がそんなやり取りをしていると、

「はいはい、その話は今は置いて、そのドッペルゲンガーの話の続きよ」

ゆりが一度話を止める。

すると七瀬は、多少不満げな様子を見せた。

「『置いていて』って……………」

「何かあったんなら、その時はその時で相楽くんが責任をとってあげればいいでしょ？」

「責任って……………どうやって」

「ホントに鈍感ね。」

「こう……………』どんなに汚れても、俺が愛してやんよ』っていう風に」

「わっー！？わーわー！！」

ゆりっぺ先輩、何言ってますか！！」

ゆりの声を遮るように関根が喚くと、ゆりと七瀬は耳をふさいで耳なりを防ぐ。

「冗談よ……………さてと、それで本題に入るけど……………ドッペルゲンガの正体は、恐らく天使のガードスキル『ハーモニクス』の改良版だと考えられるわ。」

私達の分身を作り出して同士討ちを狙うつもりなんでしょうね。」

……………狂暴な天使の考えそうなことだわ」

そんな意見があがると、直ぐさま音無が口を挟んだ。

「そんなはずはない！」

奏はずっと俺の側にいたんだぞ？」

「悟られるような動作がなくても、発動自体は出来るんじゃない？」

即答されると、彼は黙り込んだ。

一方で七瀬は、

「原因よりも、今は対策だろ？」

言って装備を整え始めた。

対してゆりは、呆れた様子でそれを制する。

「まあ待ちなさい。」

相手は他の戦線メンバーの姿になるかもしれないんだから、迂闊に動くは相手の思う壺よ」

「……………じゃあ、どうするんだよ？」

「……………とりあえず収集をかけましょう」

七瀬の問い掛けに対し、神妙な面持ちで応えようと、他の面子は小さく頷いて応えていた。

第57話『Doppel gangger』(中編)『

校長室

「……今話した通り、正体不明の敵の存在が確認されたわ。

これからは常に二人以上で行動し、敵と遭遇した場合、同士討ちを避けるために、出来るだけ自分の分身を攻撃するよう心掛けなさい」
ゆりから新たに現れた敵の説明を聞くと、戦線メンバー一同は神妙な面持ちを見せる。

そんな中、藤巻が声をあげた。

「もし別の奴の分身と出くわしたら、見分ける方法あんのか？」

「大丈夫よ。

相楽くん達の話しによれば、親しい人間なら十分に見極められる相手だと考えられるわ」

「……臨機応変な対応が求められると？」

ゆりの回答に対し、高松が問い掛けると、彼女は頷いて答えた。

すると、一同は顔を見合わせて動揺を隠せない様子を見せている。

そんな中、朽木が口を開いた。

「でも、相手が自分と同じだったら、自分で攻撃しても倒すのは難しいんじゃない？」

対してゆりは、

「安心なさい、相楽くんが自分の分身を倒したってことは、少なくとも何か本物より劣っているものが有るはずよ」

言って机の上に置いていた拳銃を手に取り、リロードして直ぐに撃てる状態にする。

「今回のオペレーションは、名付けるとしたら『ドツペルゲンガー掃討作戦』ってところかしらね。」

それじゃあ、行くわよ。

オペレーション、スタート!!」

その声が部屋中に響き渡ると、戦闘メンバーはそれぞれで武器を構えた。

女子寮周辺

この場所の見回りに振り分けられた七瀬、日向、音無の三人は警戒しながら巡回していた。

「相楽、ゆりはああ言ってたけど、分身は本当に自分より弱かったのか？」

音無が問い掛けると、相楽は首を横に振って否定する。

「いや、実際に一回目に戦った時は、驚いてる内に窓から落とされちまったしな。」

でも、急いで帰って来たら関根が襲われてたもんで、不意打ちで思いつ切りぶっ飛ばしたら、何とか倒せた」

「それじゃあ、一対一で勝つのは難しそうだな」

そんな話をしながら歩いていると、

「よう」

不意に正面から彼らに声をかける人影が現れた。

「ん？」

「あ」

「何っ!?!」

七瀬と音無は訝しむような表情を浮かべる一方、日向はその人物を見て驚きを隠せない様子を見せる。

その相手は、顔に手を当てて隠しているものの、姿形は明らかに日向そのものだ。

「おいおい、何で俺が、もう一人いるんだ? (キラッ)」

手を退けた途端、イケメンと化した日向の顔が覗くが、同時に銃声が響き、その左胸に赤い染みが広がっていく。

「あ………れ?」

間の抜けた表情で二人目の日向が自身の出血を確認すると、次の瞬間には七瀬の拳がその顔面を捉えた。

それによって二人目の日向が弾き跳び、その身体が煙のように消え始めると、七瀬と音無は冷静な反応を見せる。

「意外と簡単に方がついたな」

「いや、まだ一体目だ。

油断は出来ない」

一方で日向は、

「何で容赦なく攻撃してんだよ!?!」

「お前らホントに友達か!？」

「まあ、イケメンだったしな」

「ああ、もうちょっと解りづらいのが来ると思ってたけど、意外に大丈夫だったな」

二人のそんな対応に対し、日向は泣き叫ぶように声をあげた。

「ヒデエって!？」

大食堂（閉店）

同時刻、ゆり、野田、椎名の三人は、既に閉店している大食堂に足を踏み入れていた。

すると、

「ゆりっぺー！騙されるな!!！」

不意に後方から野田の声が響き、彼女達は振り返る。

そこには、ゆりと椎名の側にいる野田と瓜二人の人影があった。

対して一人目の野田は、ハルバートを構えて二人目の野田と対峙する。

「面白い！本当に同じ実力なのか試してやろう！..」

そんな中、ゆりが二人の野田を呼び止めた。

「まあ待ちなさい。」

.....とりあえず両方の野田くんに聞くけど.....ルート2っていくつだったかしら？」

尋ねられると、一人目の野田は小首を傾げ、二人目の野田は、

「確か、1・4132」

言いかけた途端、ゆりが眉間に銃弾を撃ち込んだ。

「.....アホの野田くんにルートなんて解るわけないでしょ」

「.....浅はかなり」

ゆりと椎名が言うと、野田は呆然と立ち尽くしていた。

そして、ゆりは顎に手を当てて、しばし考え込む。

(…分身にしては見破り易過ぎる。

それに、これじゃあまるで、欠点を無くして完璧に近い形にしてる
みたいだわ)

そんなことを考えながら、ゆりは訝しむような表情を浮かべていた。

第58話『Doppel gangger(後編)』

グラウンド

「うおおお!!」

怒声と同時に、二人の藤巻の刃が交錯する。

「ちっ、全くの互角かよ」

歯痒い様子で言うと、藤巻は長ドスを構え直す。

この場所の巡回担当になっていた、藤巻、大山、直井は、七瀬達と同じようにドッペルゲンガーとの戦闘を行っていた。

「はっ！次の一振りで真っ二つにしてやるぜ!!」

藤巻の片割れが吠えると、

「……あんまり吠えてると、弱く見えるぜ」

もう片割れは冷静に構える。

その刹那、後者の顔面に手甲に包まれた拳が減り込んだ。

「おぶはっ!?!」

「なっ！？相楽！」

藤巻が呼ぶと、もう片方の藤巻を殴り倒した七瀬は、それが煙のようになくなって行くことを確認し、彼へと向き直る。

「やっぱりこっちが本物か。」

まあ、藤巻は噛ませ犬だし、冷静な対応はしないわな」

「てめえ！何で強そうな方が偽物みたいなこと言ってるんだよ」

「あーはいはい、すまんねー」

ドスを振り回しながら怒鳴る藤巻に対し、七瀬は面倒そうに耳を塞いでいた。

一方で同じように分身と戦っていた大山は、

「相楽くん、こっちも助けてよ！？」

「はっ、手助けなんていらねえね。」

僕のショットガンで蜂の巣にしてやる」

片方の大山は七瀬に助けを求め、もう片方は自信満々な様子でショットガンを構える。

二人の大山がそんなやり取りをしていると、唐突に銃声が響き自信満々な方の大山が撃たれた。

「うわあ!？」

驚きを隠せない様子で弱気の大山が振り向くと、そこには銃口から煙の上がる拳銃を構えた日向と、ジト目で消えていく大山の分身を眺める音無の姿があった。

「……………何があったら大山がああなるんだよ？」

「……………正直、もうちょっと似せた方がいいような」

呆れた様子で言うと、二人は七瀬と顔を見合わせ、残った直井の方を見る。

するとそこには、互いに拳銃を突き付け合う二人の直井の姿があった。

「ふん、神の姿を真似るとは」

「人間が神になりえると思っっているのか？」

分を弁えろ」

牽制し合いながらも、二人の直井は自分達を見ていた音無に気付き、

「あ!？おっとなっしさーっん

今この分身を倒しますから、見ていてくださーい」

前者の直井は咄嗟に笑顔を作り、音無に空いた手を振る。

一方で後者の直井は、

「増援などいらん。」

こいつは僕が倒す」

素っ気ない反応を見せた。

それを見ると、音無は後者の直井を指差し、七瀬達に尋ねる。

「……あつちが分身だよな？」

対して七瀬達は、迷うことなく頷いて応え、音無は分身と思われる直井に対し発砲した。

「それにしても……いくらなんでも、もうちょっと似せてもいい気がするよな」

ふと音無が言うと、他の面子も同じことを考えていた様子で頷く。

「確かにそつだよな？」

そつくりにならば、僕達も混乱してたのに」

「だよな？あれじゃあ、最初から見破ってくれって言うてるようなもんだぜ」

大山と日向が言う。

すると直井が、

「ふんっ、本当に使えない愚民共だ……あ、もちろん音無さんは高名な貴族ですよ」

「いいから、お前の意見言ってみるよ」

七瀬が呆れた様子で言うと、彼は一度咳ばらいをし、話を続ける。

「考えられる理由は二つ。

一つは相手が『Angel Player』を玩具のように考え、遊んでいる場合。

二つ目は、相手が『Angel Player』を使いこなせていない場合だ」

それを聞くと、七瀬は一瞬考え込み、口を開いた。

「一つ目はともかく、二つ目の場合はまだ希望はあるな」

「ああ」

彼の言葉に音無が応えると、日向、藤巻、大山の三人は小首を傾げ

る。

「どづいことだ？」

日向が尋ねると、音無がそれに応える。

「良く考えてみる。」

今まで俺達は、『Angel Player』を使いこなしていた奏……天使と渡り合ってきたんだ。

まだ使いこなせていない相手なら、十分に倒せる」

それを聞いて、日向達が納得した様子で頷いていると、

「そづいことよ」

不意に後方から声が響き、一同は振り返った。

するとそこには、別動班である、ゆり、椎名、野田、松下、高松、TKの六人の姿があった。

「こつちにも現れてたみたいね」

「ってことは、ゆりっぺ達の方も？」

ゆりの言葉に対して日向が問い掛けると、彼女は頷いて応えた。

「……状況からすると、本当に犯人は天使じゃないみたいね。」

「まずは、本日のオペレーションはこれで終了、明日は早朝から犯人の捜索を行うわよ」

その台詞を聞くと、一同は小さく頷いて、それぞれで解散していく。

そんな中、七瀬がゆりに駆け寄って行った。

「ゆりっぺ」

「ん？」

「俺達のところに分身が出たってことは、作戦実行班じゃない奴らも危ないんじゃないか？」

「ああ、関根さんね。」

大丈夫よ。ガルデモは遊佐と一緒にいさせてるから、何かあったら連絡があるわ」

(……) 「何で関根の名前が出るんだよって」言いたいところだけど……何でかアイツのこと聞いた時点で、安心しちまうんだよね………)

そんなやり取りをすると、七瀬も他の面子と同じように、寮へと帰って行った。

第59話『Desire(前編)(前書き)』

すみません、色々忙しくて更新遅れましたm()m

第59話『Desire（前編）』

校長室

「本当に読めないわ」

ゆりが言うと、一同は訝しむような表情を浮かべる。

「相手の正体、目的、何故Angel Playerを持っているのか………何一つ解らない」

それを聞くと、戦線メンバー達はどよめく。

すると、唐突に直井が声をあげた。

「本当にどうしようもない愚民共だ。

あ、もちろん音無さん以外ですよ？」

「いいから続ける」

藤巻が言うと、直井は一度咳ばらいし、話を続ける。

「もし相手がAngel Playerを使いこなせていないのなら、最近になってアレのマニュアルを見たことになる。

つまりAngel Playerの存在を知っていて、尚且つ最近触れる機会があった人間だ。」

だとすれば、それは戦線内の人間の可能性が高い」

そんな意見を聞くと、

「……確かにそうね。」

でも、戦線メンバーは何十人もいるのよ？
その中からどうやって犯人を特定する気？」

ゆりが直井に尋ねた。

対して彼は、しばし考えた後に口を開く。

「方法としては、常に二人一組で生活させることだ。
そうすれば、相手も下手な行動に出れないし、おかしな動きがあれば、ペアを組んだ相手が気付くはずだ」

それを聞くと、日向が不愉快そうに反論する。

「お前なあ、仲間を全員疑えっていうのか？」

「当たり前だ。」

親友、恋人、宿敵、疑う余地のある相手は全員疑え。
あ、もちろん音無さんを疑ったりはしてませんよ」

「……お前、友達いないだろ」

日向達のそんな掛け合いを無視し、ゆりは戦線メンバー達に呼びか

けた。

「まあ、確かに仲間を疑うのは気が引けるけど、直井くんの提案は意外と有効かもしれないわね。」

二人で組ませることによって、ドッペルゲンガーへの対策にもなる。……物は試しよ。やってみましょう」

対して戦線メンバー達は、神妙な面持ちを浮かべる。

すると、不意に直井が立ち上がった。

「もちろん僕は音無さんと組む」

「いららら、ここは平等にジャンケンでだなあ」

日向は言うが、

「いいじゃない。組みたい相手と組ませてあげなさいよ。」

心を許している相手の方が、ドッペルゲンガーを見破り易いでしょうしね」

ゆりがそんな意見をあげる。

学習棟A、空き教室

「む、無理ですよ！ムリムリ！！」

関根が声を荒げると、ゆりは彼女に言い聞かせる。

「一緒って言っても外に出てる間だけよ。」

寮内ならこつちの目も届くし、問題ないでしょ？」

「そ、それはそうですね……だ、大体！何で私とペア組むのが男子のさっさんなんですか？」

そんな反論を受けるとゆりは、

「関根さんにはもう、相楽くんの見破った前歴があるじゃない。」

やっぱりお互いのことを思っている二人の方が、ドッペルゲンガーに對抗できると思うけど？」

言われると、関根は顔を赤らめて俯いた。

「お、思ってるって……」

そんな彼女に対して、朽木が彼女の肩に手を回す。

「この際だからいい機会じゃない？」

……はつきり言っちゃいなさいよ。

ほれほれ、相楽くんが好きなんですよ？

どこがよかったの？顔？性格？」

「顔は結構いいし、性格も鈍感なところを除けば上物なものねえ」

ゆりも加わると、二人は揃って関根をからかい出した。

「この際だから、この機会に告白しちやいなさいよ？」

ゆりが言うのと、

「もういつそのこと、チューしちやいなさいよ」

きつと相楽くんも意識するわよ。ほら、チューよチュー」

朽木が続いた。

二人のそんな冷やかしに対して、関根の顔はこれ以上ない程に赤みを増していた。

そうしていると、ふと朽木はゆりに問い掛ける。

「そういえば、私の相手って誰なの？」

対してゆりは、刹那に不敵な笑みを浮かべるが、直ぐに柔らかな笑みに切り替えた。

「安心なさい、あなたのパートナーは私よ。
下手な男子よりずっと頼りになるわ」

その人事に一瞬朽木が驚きを隠せない様子を見せると、彼女はその表情を見逃さなかった。

(……………やっぱり怪しいわね。

朽木さんは元々、Angel Playerに興味を持っていたし、何よりハーモニクスの騒動があつたとき、彼女は天使の部屋に入っていた。

でも、だとすれば動機が解らない……………少し探りを入れて見る必要がありそうね)

一方で朽木は、彼女の自分に向けた嫌疑に気付き、

(流石はゆり。
もう私に嫌疑を向け始めたみたいね。

この子の側で行動に出れば確実に気付かれるし、かと言って何もせずにドツペルゲンガーが現れなければ、余計に疑いが深まる……………。

ここは、奥の手が必要になりそうね)

互いに謀を巡らせ合いながら、二人はしばらくの間雑談をしていた。

第60話『Desire』(中編) (前書き)

読者の皆さん、最近更新が滞ってしまっていて、本当にすみません
m (——) m

第60話『Desire（中編）』

「おーっい、話終わったか？」

七瀬が顔を覗かせると、ゆり達は不敵な笑みを浮かべる。

「ニユフフ 噂をすれば影ね」

「ナイスタイミング」

言うと、ゆりと朽木は彼の前に関根を引っ張り出した。

「はい、あなたのパートナーよ」

「ん？関根がか？」

男女別にしなくても大丈夫なのか？」

七瀬はゆりに問い掛けるが、

「平気平気 関根さんだって嫌じゃないでしょ？」

それを聞くと、関根は赤面した顔を俯いて隠しながら応える。

「そ、その……別に嫌じゃないけどさ……」

「ほら、関根さんだってこう言ってるじゃない。

なんなら、一緒に住んじゃってもいいわよ？」

からかうように言われると、関根はこれ以上ない程に顔を赤くしていた。

対してゆりは、不敵な笑みを浮かべ、七瀬に何かを囁く。

すると、七瀬は一瞬訝しむような表情を浮かべ、

「流石に一緒に暮らすのは無理だろ。」

……まあ、守ってやるって言っちゃったし、昼間なら構わないけど
「よ」

そんなやり取りをすると、七瀬と関根は教室を後にした。

学習棟 A 廊下

「ねえ、ちっちゃん」

「ん？」

「さつき、ゆりっぺ先輩は何て言ってたの？」

関根に尋ねられると、七瀬はしばし考えた後、一度周囲に人影がないことを確認し、彼女の手を掴んだ。

「ふえ！？」

「ちよつと来てくれ」

顔を赤らめて戸惑う関根を、七瀬は近くの空き教室に連れ込む。

「……さ、さっさん」

「しっ……静かに聞け」

沈黙を促すと、七瀬は小声で話し出した。

「……さつき、ゆりっぺに言われたことだけど……」『朽木が怪しい』そうだ

「クツチーが？……でも、最初に偽物が出たときは、一緒に肝試ししてたじゃん」

「皆、いた階は違ったろ？」

それに、仮に同じ階を探していても、それが偽物の可能性もある」

「偽物って……あんな見え見えなのじゃ、バレちゃうでしょ？」

「わざと下手な分身を作ってたのかもしれない。」

正直、あいつは何考えてるか分からないしな」

「……むう…確かに、良く分からないことしてるときあるよね」

そんなやり取りをすると、二人はしばしの間考え込む。

「でもさ、何でゆりっぺ先輩は、そんな大切なことをさっさんに言っただろ？」

「多分、俺達ならお互いが偽物を見分けられると思ったんじゃないか？」

関根が問い掛けると、七瀬は即答する。

すると、それを聞いた関根は、仄かに顔を赤らめていた。

「遊佐、いるか？」

「遊佐ー？」

屋上に足を運んだ七瀬と関根が呼びかけると、屋上に一人ぼつりと立ち尽くしていた遊佐は振り向く。

「……………どうかしましたか？」

すると、七瀬達は一度顔を見合わせた。

「……………ねえ、遊佐が偽物ってことはないの？」

尋ねられると、七瀬は一瞬遊佐を黙視し、

「……………じゃあ、ちょっと試してみるか」

言つと、七瀬は遊佐に歩み寄る。

「遊佐……………実は俺、お前のことが……………」

不意に、七瀬が意味深な台詞を口にする。

対して遊佐は、表情を変えることもなく、冷静に応えた。

「……………相楽さん。実は私、相楽さんのことを何とも思ってますん」

「うん、遊佐だ」

「……唐突過ぎて意味が分かりません。
と言っか、そういう台詞はしおりんさんに向けるべきかと」

そんなやり取りをすると、七瀬は親指を立て関根にアピールする。

しかし、彼女は不機嫌そうな表情で彼の足をグリグリと踏み付けた。

「女の子は純粹なんだから、そういうこと言わないの」

「とりあえず偽物じゃないことが分かったんだし、いいじゃねえか」

二人のやり取りを見ると、遊佐が小首を傾げて問い掛ける。

「……話が見えてきませんか？」

「とりあえず、協力してくれ」

そんな返答を聞くと、遊佐はしばしの間訝しむような様子を見せていた。

「……………つまり、朽木さんが犯人の可能性が高いと」

七瀬達の説明を聞いて遊佐が言うと、二人は頷いて応える。

「それで、いつも戦線メンバーの動きを観察してる遊佐に協力して欲しいんだよ。」

お前なら常日頃の朽木の行動パターンも分かるだろ？」

「……………朽木さんの場合は、私でも知り得ない情報が多いと思われるます」

「……………うーん…まあ何とかなるだろ。」

とりあえず、虱潰しに探してくか」

「……………現状ではそれが有効かと」

そんなやり取りをすると、彼らは屋上を後にしようとする。

すると、ふと遊佐が声をあげた。

「……………そう言えば、このメンバーでは戦力に不安が感じられますが、他の戦線メンバーに協力者を求めています？」

対して七瀬は、

「無理だろ。」

遊佐は基本的に無表情だから、何か変化があっても見分け易いけど、

他の奴の場合は偽物でも見分け難い」

「……なるほど……しかし、完璧な分身を作り出せるのなら、無表情な方が作り易いのでは？」

「天使のハーモニクスだって本物とは程遠い感じだったからな。

流石に完璧に真似るのはできないと思うぞ」

即答し、七瀬は再び歩き出そうとする。

一方で遊佐は、しばしの間、じっと彼の顔を眺めた。

「ん？まだ何かあるのか？」

「……意外に切れ者ですね」

「まさか偽物！？」

「こら、どんだけ失礼なんだよ」

遊佐に続いて声をあげた関根に対し、七瀬は呆れ果てた様子で言う。

関根はそれに対し、苦笑で返し、

「冗談だよ。それに、さっさんが偽物だったら最初から騙されない
って」

「その自信はどこから来てんだよ……」

「……………相楽さんへの愛からかと」

遊佐に言われると、七瀬は微妙な表情を浮かべ、関根は仄かに頬を赤らめていた。

第61話『Desire（後編）』

学習棟A、PCルーム

「……………ここではないようですね」

PCルームの中を覗き込むと、遊佐が呟いた。

それに続き、七瀬と関根も入室する。

「やっぱり、いつも持つてるノートパソコンでやってるんじゃないかな？」

関根が言うが、

「わざわざ証拠になるものを持ち歩いてる可能性も低いだろ」

「そりゃそうだけども……………」

そんなやり取りをして、彼らはPCルームを後にする。

「……………それにしても、もしゆりが相手にしているのも分身だとしたら、あいつ何考えてんだろうな」

ふと七瀬が口を開く。

「……………監視の目をかい潜って活動するには、適切な手段かと」

遊佐が言うが、

「だとしても、自分の分身自体あんまり見たくはないもんだろ？」

「……相楽さんは、自分が嫌いですか？」

「……まあな。」

ついてないし、バカだし、自分勝手だし。

周りから見て良いように見えても、本人には嫌なところばかり見えるもんだよ」

あまり考えたくもない様子で言うと、彼は後頭部を搔く。

「でも、そんな俺にも自分を好きになれる瞬間はあるぜ。」

真剣勝負の攻防の中、相手の顔面に一撃必殺のパンチを打ち込むその瞬間……最高にスカツとしてたまんねえんだよなあ」

軽くシャドーボクシングを見せながら言われると、遊佐はジト目で眺め、関根は笑顔を引き攣らせる。

「さっさんは完全に男の子だね」

「格闘技は男のロマンだからな。」

……でも、やっぱり自分そっくりな奴が目の前に現れたら、そういうの関係なしに殴っちまう。

この間みたいに、俺の分身が関根と一緒にいたりしたら、全力でぶ

っ飛ばしちまうだろうな」

「……………ヤキモチ」

ふと遊佐が囁くように言うと、関根が顔を赤らめて俯く。

すると、それを見て七瀬が小首を傾げていた。

大食堂

一方その頃ゆり達は、悠々と昼食をとっていた。

「……………前々から思ってたけど、朽木さんって納豆好きよね？」

昼食にとったカレーとは別に納豆を混ぜる朽木に対し、ふとゆりが尋ねた。

対して朽木は、ダイレクトに納豆を食しながら、

「大豆は身体にいいのよ？」

『ナットウキナーゼ』『ビタミンK2』『イソフラボン』『リノール酸』等の栄養成分を持ち合わせて、生活習慣病の予防にも繋がるのよ？」「

「死なないし病まないんだから、そんな関係ないでしょ？」

「あら？病まなくても太るかもしれないわよ？」

「いやなとこ突くわね」

そんな何気ないやり取りをしながらも、ゆりは朽木の一举一動に注意を向けていく。

そんな彼女に対して、朽木はクスリと微笑して見せた。

「……そういえば、昔ゆりが言ってたわよね？」

『楽園は自らの手で作り出す』って」

不意にそんな話題が出て来ると、ゆりも設立当初の戦線を思い出し、思わず口元を緩める。

「懐かしいわね。」

確かあの頃は、戦線メンバーは十人もいなかったわよね。」

「今考えて見ると、直井の言っていたことは正しかったのかもしれないわね」

「……どういう意味？」

「この世界では、人間が神になりうるってことよ。」

まあ彼の場合は、『Angel Player』という必要な力を得ずに行動に出た結果、それが失敗に終わったわけだけだね」

「……つまり、今のあなたなら神になれると？」

「私に限定した話じゃないわよ。」

誰でも可能性はあるし、『Angel Player』を使いこなせるだけの頭脳を持つ人間が出てくれば、いつかは起きることよ」

「……死後の世界で神になんかなくて、一体何になるのよ」

「あなたが言ったんじゃない。
楽園は自分で作るものだって」

そんなやり取りをすると、ゆりは顔をしかめる。

「……それが、あなたがアレを持ち出した理由？」

「ストレートに聞くのね？」

てつきり鎌かけて自白を狙ってくると思ったのに」

「……本当だったら、仲間を疑うこと自体気が進まないわよ」

「フフツ 優しいのね？」

……小さな女の子をいたぶっていた集団のリーダーの言葉とは、とても思えないわ」

「くっ!!」

突然の挑発に、ゆりは怒りをあらわにし、腰のホルスターに収まっていた拳銃に手をかけるが、

「……ガードスキル『デイレイ』」

呟いた次の瞬間、朽木の姿はゆりの視界から消えた。

「物騒な物はしまいなさい。

一般生徒を巻き込むわよ?」

「っ!?!」

不意に耳元で囁かれた言葉に、ゆりは驚きを隠せない様子を見せる。

「……朽木さん……あなた、ガードスキルまで」

「使ってみると、中々面白いわよ?」

「……一体どういっつもりなの?」

これまで一緒に戦ってきた仲間を裏切って、この世界で延々と神様ごっこをつづける気?」

「『いっ!』とは心外ね。」

……悲惨な人生の末にこの世界に来た人達に、楽園を体感させてあげるだけよ。

皆が幸せになれる楽園を作るなら、文句を言われる理由はないですよ？」

「……皆が楽園を求めていると思ったら、大間違いよ」

「？」

「その賢い頭で良く考えてみなさい。

岩沢さんや今まで成仏した人達は、そんな物を欲しがっていた？

あなたの独りよがりな妄言を、果たしてどれだけの人が受け入れるかしらね？」

そんな問答をすると、朽木は多少不快そうな表情を見せる。

「……まあいいわ。

本当に独りよがりか、自分の目で確かめなさい」

言っと、彼女は食堂を後にして行った。

学習棟 A

「あ」

呟いた関根の視線の先には、こちらを見つめる奏の姿があった。

「ひい！？出た！」

悲鳴をあげると、彼女は遊佐と共に七瀬の後ろに隠れる。

「お前らなあ……………」

呆れた様子で言いつつも、七瀬は小さくため息をつき、奏と向き合う。

「何の用だ？」

尋ねられると奏は、

「……………相楽くんに話があって来たのだけど」

「話？」

小首を傾げる七瀬に対し、奏は小さく頷いて応えていた。

第62話『Countermine』前編(前書き)

最近更新が遅れてすみません(汗)

第62話『Counter mine（前編）』

生徒会室

「……………何で音無が？……………まあいい。
それで、用件は何なんだ？」

関根と遊佐を外で待たせ、七瀬は奏に問い掛けた。

そしてその隣に立つ人物にも視線を向け、

「と言うか、何で音無もいるんだ？」

尋ねられると、音無は多少取り乱しながらごまかす。

「いや、それはその……………か、奏に相談されたんだよ。

『自分以外に Angel Player を使って騒ぎを起こしてる
奴がいるから、見付けるのを手伝ってくれ』って」

「……………何で頼む相手がお前だよ？」

凶暴になった天使は、今まで親しかった奴でも平気で攻撃するよう
な相手なんじゃないのか？」

「あ、いや、その……………」

「もしかして、今までと同じ天使なのか？」

「うつ（……こいつ、意外にカンが鋭いな）……そ、そんなわけないだろ？」

七瀬と音無がそんな問答をしていると、不意に奏が七瀬の袖を引いた。

「ん？」

「……時間がないの。」

とりあえず話を聞いて「

「……分かった。とりあえず話してみる」

言われると、奏と音無は顔を見合わせ、

「……相楽くんは、ここ何日か姿を現している分身達の黒幕を探してるのよね？」

「……ああ」

「……なら、私達と協力しましょ」

「……お互いに目的は同じって訳か？」

再びの問い掛けに対し、奏が頷いて応えようと、七瀬はその表情を伺う。

（……無表情過ぎて何考えてるかサッパリ分らん。）

この子や遊佐とはこういう駆け引きできねえな)

そんなことを考えながら、彼は奏に疑問をぶつける。

「……勝てるのか？」

「……………?」

「相手はもしかすると、あんたよりも『Angel Player』を使いこなしてるかもしれないんだぜ？
そんなの相手にあんたで勝てるのか？」

すると奏は、

「……………相楽くんがいれば、多分勝てるわ」

「多分ってお前……………」

「……………私だけじゃ勝てないもの。」

……………でも、あなたが頑張ってくれば勝てるかもしれない」

「……………『勝てる』って言い切らないだな？」

「……………騙すようなことはできないわ」

問答の後、七瀬は奏の眼を見る。

対して奏は、眼を合わせたまま視線を動かさない。

しばらくの間見つめ合うと、七瀬は覚悟を決めた様子で頷いた。

「よしっ！その話乗った！！」

その反応を見ると、奏と音無は顔を見合わせ、音無が微笑した。

一方で七瀬は、

「それで、お前ら相手が誰だか分かってんのか？」

確認すると、奏は小首を傾げ、音無が気まずそうな表情を浮かべていた。

すると七瀬は小さくため息をついた後、朽木のことを二人に告げる。

「多分、相手は朽木だ。」

俺達よりもずっと頭はいいと思うぜ」

言われると、音無は驚きを隠せない様子を見せていた。

「な！？アイツが犯人なのか？」

……下手な作戦は通用しそうにないな」

「掴めねえ奴だとは思ってたけど、本当に何考えてんのか分かんねえんだよな。」

……それで、何か対抗策はあるのか？」

尋ねられると、奏は頷いて応えた。

「……一つだけあるわ」

「どんな方法なんだ？」

続けざまに尋ねられると奏は、

「………ついて来てもらえるかしら」

そう言って入り口のドアに手を掛けた。

第63話『Countermine(中編)』

女子寮、奏の部屋

机についてPCを起動させる奏の後ろ姿を眺め、七瀬は訝しむような表情を浮かべる。

「それで、一体どうやってAngel Playerに対抗するんだ？」

尋ねられると、奏は椅子に腰掛けた状態で彼を見上げる。

「……こっちもAngel Playerを使うわ」

「あのなあ……だから、あっちの方が使いこなせてるって言うてんだろ？」

「……一つだけ……一つだけ、朽木さんには使えない能力があるわ」

「？」

奏の口にした言葉を聞くと、七瀬は小首を傾げていた。

一方その頃、奏の部屋の前の廊下では。

「むう……………何でさっさんと天使が二人きりなんですか？」

むくれながら関根が尋ねると、音無は口ごもる。

「あ、いや……………それはその……………」。

ほ、ほら、そんな大勢で押しかけたら迷惑だろ？」

明らかに何かの企みを垣間見させる彼に対し、関根は不満げな表情で見上げる。

「それだったら、別の場所で話せばいいじゃないですか」

「そ、それは……………そうだ！アレだ、他の場所だと朽木がNPCの分身を作って、偵察してるかもしれないだろ？」

「……………怪しい」

音無の動揺を見た遊佐までもが疑いの眼差しを向け始めると、音無は冷や汗をかいていた。

10分後。

「おう、待たせたな」

七瀬が部屋から出て来ると、音無達の視線は彼に向けられる。

「終わったのか？」

「ああ、作戦の説明はあらかた聞いた」

問い掛けに対し応えるが、そんな彼に非難するような視線が向けられていた。

「ん？……なあ……何でコイツ睨んでんだ？」

ジト目で自分を睨み続ける関根を指差し、七瀬は音無に問い掛ける。

すると、音無は困ったような表情で、

「さあ？」

一方で関根は、グリグリと七瀬の足を踏み始める。

「良かったねえ、女の子の部屋で二人つきりになれて」

「踏むな……て言うかホントに何怒ってんだ？」

「自分で考えてよ……」

「？」

関根が顔を赤らめて顔をそらすと、七瀬は訝しむような表情でそれを見ていた。

二人がそんなやり取りをしている間にも、七瀬に続いて部屋から出た奏が、部屋の鍵を締める。

「……………何をしているの？」

聞かれると、七瀬は微妙そつな表情を浮かべ、

「……………俺に聞くな」

応えてポンと関根の頭に手を乗せ、足を踏むのを止めた。

「あんまり遊んでる時間ねえんだ。その辺にしとけ」

「……………むう」

彼女が引き下がると、七瀬は奏達と向き合う。

「それじゃ、搜索再開だな」

その言葉に二人が頷き、移動を開始しようとする。廊下に彼等にとって聞き慣れた声が響く。

「何をやってるのかしらね？」

一同がビクリと肩を震わせ振り向くと、そこには不機嫌そうなゆりの姿があった。

「ゆ、ゆり!？」

取り乱す音無に対し、彼女は睨むような視線を送る。

「何で戦線のメンバーが、任務をすっぱかして天使と遊んでるのかしらね？」

言われると、七瀬が戸惑うことなく応えた。

「今回は協力してくれるってさ」

それを聞くと、ゆりは頭を押さえてため息をついた。

「あんだねえ……その娘は天使なのよ？」

私達の敵、戦線の存在理由」

「でも、一日だけだったけど……… たった一日だけだったけど、仲間だったろ？」

「え………」

「一緒に釣りして、一緒に飯作って、一緒に遊んで……… ゆりっぺはそうは思ってたかったかもしれないけど、少なくとも俺はそう思ってたよ」

戸惑うゆりに対し、七瀬はただ真っ直ぐにその瞳を見つめる。

すると、

「………好きにしろさい」

顔を逸らして言うと、ゆりは腰のホルスターから拳銃を取り出し残弾数を確認した。

「それで、朽木さんの潜伏先は掴めたの？」

問い質されると、七瀬達は顔を見合わせる。

(………しまった。途中から何もしてねえや)

(これは、言い訳できる気がしない………)

七瀬と関根がそんなことを考えていると、

「………心当たりならあるわよ」

不意に奏が声をあげ、一同の視線は彼女に集中していた。

第64話『Counter mine（後編）』

医局（閉鎖中）地下

「確かに、水光栽培の園芸場なら、電気も通っているし、滅多に人もこないわね」

拳銃のスライドを上げながら言うと、ゆりは扉の開閉ボタンに手をかける。

「…………準備はいいわね？」

問い掛けると、七瀬は手甲を装備し、音無も拳銃を構える。

「いくわよ……………3……………2……………1……………」

カウントの終わりと同時に扉が開かれる。

ゆりと七瀬を先頭に、音無、奏、関根の順に駆け込んで行く。

すると、

「あら、変わった面子ね」

持ち込みと思われるベンチに腰掛けた朽木が振り向くと、ゆり達は臨戦体制に入る。

「やれやれ、随分な挨拶ね」

皮肉げに言われると、ゆりは拳銃の引き金に指を掛け、彼女に照準をつける。

「裏切り者に言われたくはないわね」

「皆を騙している人間が言えた義理じゃないんじゃない？」

「っ！このっ！！」

怒りを露わにし、ゆりが引き金を引く。

刹那、銃口から飛び出した弾丸が朽木に向かうが、それは当たる直前に急激に軌道を逸らし、地面に減り込んだ。

「……………ディストーション。」

やっぱり使い熟してるみたいね」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべると、ゆりはナイフを抜き、朽木に向かい走り出した。

しかし、

「……………ガードスキル『オフエンスシールド』」

朽木が呟いた瞬間、飛び掛かったゆりは何も無いはずの空間で弾かれる。

「なっ!？」

驚きを隠せない様子のゆりに対し、朽木は不敵な笑みを浮かべた。

「白兵戦対策が無いと思った？」

「物理攻撃を無効化つて、そんなのありかよ」

音無が言うと、朽木はからかうような笑みを浮かべ、

「あら？弾丸の軌道を曲げる能力を造れるのなら、物理攻撃自体を弾く能力を造れても何らおかしな点はないでしょ？」

言った刹那、彼女の左右に挟み撃ちのような形で奏と七瀬が飛び掛かる。

しかし、

「……………無駄よ。この能力は全包围に効果を及ぼすもの」

呟かれた瞬間、二人は弾かれ数m後退して着地した。

「……………やっぱりダメみたいね」

「攻撃する方法がねえつて、そりゃ反則だろう」

二人が言うと、朽木はゆりと向き合つ。

「……………さてと……………切り札の二人も通用しないみたいだけど、どうする?」

銃撃も斬撃も打撃も効果がない。そんな絶望的な状況にゆりは悪態をついた。

「ちっ、最初から戦う気満々だったってわけね。

……… だつたら」

スカートのポケットから手榴弾を取出すと、ピンを抜いてそれを放った。

放物線を描いての落下の途中、それは轟音と爆煙を撒き散らす。

「ぬお！？……… おいおい、折角手入れしてた畑が目茶苦茶だぞ」

耳を塞ぎながらその場に伏せて爆発を凌いだ七瀬が、場違いな声をあげる。

「仕方ないでしょ、他に方法も見付からなかったんだから！」

「……… 酷い有様ね」

「一歩間違えば、仲間を巻き込んでたぞ」

奏や音無からも不満の声があがるが、ゆりは全く反省の様子を見せていない。

一方で七瀬は、入り口の方に向かい。

「おい、関根と遊佐も、破片とかで怪我してねえか？」

そんな風に声をかけると、直ぐに返事が返って来た。

「うん、こっちは大丈夫」

「……………ゆりっぺさんが手榴弾を投げた瞬間には身を隠していましたから」

二人の返事を聞くと、七瀬はため息をつき安堵の表情を浮かべた。

次の瞬間、

「良かったわね相楽くん。」

「大事なしおりんに傷がつかなくて」

爆煙が晴れ姿を現すと、朽木は余裕の表情で言う。

『!?!?』

ゆり達が驚愕すると、それを見た朽木は笑みを強める。

「どうやら、本当に手も足もでないみたいだけど、続ける?」

そんな問い掛けに対して、一同は再び戦闘体制に入ることに応える。

最初に動いたのは七瀬だ。

「うおらあああ!?!」

咆哮と同時に、朽木を護る見えない障壁に拳がぶつかる。

朽木はそれを見て小さくため息をつくとき、彼を指差し呟いた。

「…………… 本当は、あんまり使いたくないんだけどね。

ガードスキル『ドツペルゲンガー』」

発声の次の瞬間、七瀬の目の前にもう一人の七瀬が現れた。

「なっ!?!」

七瀬が驚きを見た途端、分身の繰り出した拳が彼をガードの上から弾く。

(こいつ、もしかして…………)

防御した腕に伝わる衝撃に、七瀬は一つの推測に至る。

彼の表情を見ると、朽木が口を開いた。

「分かるわよねえ…………… 彼は本物より強いわ。

見た目は同じでも、パワー、スピード、共に相楽くんを凌駕している」

それを聞くと、七瀬は自身の分身に視線を向ける。

「道理で拳が重いわけだ」

口の端から垂れた血を袖で拭くと、七瀬は再び構える。

それが予想外だったのか、朽木は間の抜けた表情を浮かべた。

「勝てないのに戦う気なの？」

「身体能力だけが強さじゃねえ。

それに、これはボクシングじゃねえんだよ」

応えて七瀬は右ストレートを放つ。

当然ながら、紙一重で躲されるが、

「っ!？」

七瀬が伸ばした手が肩を掴み、分身は驚きを隠せない様子を見せる。

「ガードスキル『リジェクト』！」

叫び声があがった次の瞬間、分身の身体は煙のように霧散し、その場から消え去った。

その一瞬の出来事に朽木が驚いていると、その間にも七瀬達は動く。

七瀬と奏は再度朽木に飛び掛かり、音無が銃を構える。

「リジェクト！」

見えない障壁に拳が阻まれた途端、七瀬が叫んだ。

「なっ!？」

刹那、見えない障壁は砕け散り、朽木が無防備な状態になったその瞬間、その場に銃声が響いた。

第65話『Dream and happy』

「……ガードスキルを無効化するガードスキル。

……考えなかったわけじゃないけど、本当に使ってくるとは思わなかったわ」

そう言つて朽木が見下ろした先には、画面を弾丸が貫通したノートPCがあつた。

「……でも、それを相楽くんに与えたら、あなたも終わりよ。

ガードスキルに頼り切つた戦い方をするあなたには、もうSSSは止められない。
秩序を守つて彼らを成仏させることもできないわ」

「……そうね」

「そこまでして私を止める意味はあるの？

手を貸さずに放置しておいた方が、戦線も大人しくなつてよかつたんじゃない？」

そんな問い掛けに対し、奏は一言、

「……必死ね」

途端に朽木は苛立ちを隠せない様子を見せた。

「必死よ！

ようやく見通しがついた私の夢を叶える方法を、ここで邪魔されるなんてごめんだわ!!」

「……………どうして夢を叶えるために、皆を傷付ける必要があるの？」

「私の夢を叶えるためには、自分とは違う分野で同等ないし自分以上に優れた人が必要だと気付いたのよ。」

……………でも、この世界には頭脳で私より優れた人間はいない……………だから、作るしかなかったのよ」

「……………どうして皆を傷付ける必要があったの？」

「……………実験よ。」

知ってる？何度もプログラムを実行して作動テストをするのは、プログラムミングでは常識なのよ？

いくら自分より優れた分身を造れても、それが暴走したら意味を成さない。

だからプログラムにバグがないか実験しながら修正していくの」

そんな会話を聞くと、それまで呆然としていたゆりが、ようやく落ち着いた様子で声をあげる。

「仲間を使って実験とはね……………あなた罪悪感つてもものがないの？」

対して朽木は、

「あら？あなたに人のことが言える？」

「……………」

「仲間を騙して自分の為に危険に曝していたのは、あなたも同じでしょ？」

「……………言いたいことはそれだけ？」

不愉快そうな表情を見せると、ゆりは朽木に銃を突き付けた。

しかし、朽木に取り乱した様子は見えない。

「……………誰だって同じよ。」

自分の目的が達成できるのなら、他人を顧みる余裕なんてない……………
……………」

頑なに言い切ると、彼女は俯いて表情を隠していた。

数時間後、校長室

「それじゃあなんだ？」

今回の騒動は朽木の始めた実験だったってのか？」

日向が言うと、ゆりは不機嫌そうに、

「そうよ」

ぶっきらぼうに答えて黙り込んだ。

すると、続いて直井が彼女に問い掛ける。

「それで、当の朽木はどうした？」

「直井くんが作った反省室を修理しておいたんだけど……今はそこに閉じ込めているわ」

それを聞いて、一同が黙り込んでいると、

「あれ？そういえば相楽は？」

ふと、七瀬の姿が見えないことに気付いた日向が問い掛け、ゆりはぼそつと答えた。

「朽木さんと話してるわ。」

……夢半ばで人生を終えた者同士、思うところがあるんじゃない

の？」

そんな彼女の言葉を聞くと、一同に再び沈黙が訪れた。

学習棟A反省室

七瀬は壁に寄り掛かり、ベッドで仰向けになり無表情で天井を見上げる朽木に声をかける。

「……………一つ聞いていいか？」

「……………何？」

「お前さあ、本当にその超弦理論つてのを証明したかったのか？」

そんな唐突の問い掛けに、朽木は間の抜けた表情を見せた。

「……………どついつ意味よ？」

「言葉のままの意味だよ。」

「……俺は生きてたとき、ボクシングのチャンピオン目指してたけどさ。」

正直、今はそんなもんどうでもいいと思ってる」

「……………諦めたの？」

「いや、生まれ変わっても俺でいられるなら、間違いなく挑戦するだろうな」

「……………じゃあ、どうして？」

「もしチャンピオンになれて、自分が満足できる人生を送ったら、この世界に来れなかつたら？」

「？」

「……………戦線の奴らと出会って、皆でバカやって、毎日のように笑い合ってたさ。」

この世界に来れなければ、こんな楽しい毎日は送れなかつたら？」

ふと七瀬の口から出たそんな言葉に、朽木は沈黙で返していた。

第66話『Dream and happy』後編(前書き)

最近更新遅くてすみません() () m

第66話『Dream and happy(後編)』

その頃の私は、いつも暗がりでも周りを傍観していた。

ぼんやりと黒板を眺める。

簡単に幼稚な方程式、尊敬の念など抱けるはずもない稚拙な解説。

教室の隅で、私はいつも独りだった。

独りなのは家でも同じで、必要以上に頭が回り、全てのものを冷めた目で見る私に、両親が抱いたのは嫌悪の感情。

子供らしい感情など一切見せなかつたあの頃の私は、きっと彼らからすると『気持ち悪い子供』だったのだろう。

そんな私に夢を与えたのは、図書館で見つけた、棚から落ちていた一冊の本だった。

超弦理論………物理学の定説にすらなりうる可能性をもっておきながらも、今だに完成はしていないその理論に残る謎に、私は魅入られてしまった。

それからの私は、以前にも増して内向的になる。

学校にもろくに行かず図書館に入り浸り、独学で高等学校卒業程度認定試験を通り、所謂飛び級で大学へと入学した。

16歳で中途編入した私は、当然ながら周囲からは奇異の目で見られたがそんなことは気にも止めない。

そんな私に訪れた死は、突然の出来事だった。

いつものように研究室に入り浸っていたその時、突如胸に激痛が走った。

「……………恐らくは、狭心症による心筋梗塞。」

その時研究室には私一人しかいなくてね。
気付いたときには此処にいたの。」

そんな朽木の話の聞くと七瀬は、

「殴り殺されるよりは幾分ましだと思っぜ」

「確かにそうかもしれないわね。」

でも、偶発的な分理不尽なことこの上ないわよ」

「そうかもな。」

自分に原因がないって言うのは、流石に酷い」

「……私はただ、自分のやりたいことの為に努力をしていただけ
……でも、それすら世界は許してくれなかった」

「……人生なんてそんなもんだろ。」

理不尽なんてそこらへんに転がってる。

俺達の場合はそれがたまたま死に繋がっただけ」

そんなやり取りをすると、朽木は伏し目がちに言う。

「……優しくないのね」

「これでも自分では優しくしてるつもりなんだがな」

「しおりんだけ特別扱い？」

「特別扱いも何も、俺がお前に関根と同じ接し方したら、なんか同情してるみたいになって気分悪いだろ？」

あの娘はこの世界で日常を過ごしてるだけ。

生きてた時に残した悔いを清算しようとしてるお前とは、同じ扱いは出来ない」

核心をつく言葉に、朽木は思わず苦笑いをした。

……この世界に来た人間は、全員が生前の人生に後悔や理不尽な死への怒りを抱いている。

そしてその中には、どこにでもある日常や、送ることの出来なかつ

た青春の日々を過ごす者も少なくはない。

「……………私のように悔いなく生きることには価値を見いだすか。相楽くんのように、日々のありふれた日常に価値を見いだすか。はたまた、ゆりのように『神への復讐』という夢物語のような幻想に価値を見いだすか。」

意外にこの世界にも選択肢は結構あるみたいね」

しみじみと言うと、朽木は虚無感を感じさせるような表情を見せた。

「……………でも、そんな日常も、結局は私達の人生じゃない。」

私は死んだの。

誰にも必要とされることなく、何も得れないままに……………それが私の人生なのよ」

「……………そうだな。」

もう俺達の人生は終わってる。

……………振り返ってみると、やさぐれてた生前の自分が情けなくて、生きてるだけで不幸に思えて……………誰にも必要とされない自分が消えたことになんて、誰も感傷もしてくれないんだって思うと、寂しいし悲しい」

「この世界にいる人達なら、分かってくれると思ってたんだけどね。」

成仏なんてしたくないと思ってるなら、皆私に賛同するべきなのよ」

頑なに世界を呪い続ける朽木。

その姿を見て、七瀬の瞳には同情とも軽蔑ともとれる色が見える。

「……………だから、あいつらが平和ボケして成仏しないように、『Angel Player』使って騒動を起こしたのか？」

……………誰かに賛同して欲しかったから……………独りが寂しかったから……………」

「……………敵わないわね……………何でも見透かされてそう」

凶星をつかれた様子で言い、彼女はため息をつく、

「……………生きてたときも命を落としてからも、世界は変わらず不平等で不条理。」

……………私の居場所なんて、どこにもない」

失望と絶望の入り混じった呟き、そんな言葉に対して、七瀬は一切の同情を見せない。

「お前、何か勘違いしてないか？」

「え？」

間の抜けた顔を見せる彼女に対し、七瀬は続ける。

「敢えて他人と関わろうとしなかったのは誰だ？」

居場所を見つけようとしなかったのは誰だ？

……………自分を変えることを拒んだ癖に、『世界が変われ』って言う

のは筋違いだろ」

「じゃあ、あなたは自分から孤独を選んだって言いたいのか？」

「まあな。」

「……やろうと思えば、お互いに同情するぬるま湯みたいな居場所くらい、いつでも作れた。」

でも、そういう場所が嫌で養護施設を出てボクシングを始めたのは俺自身だ」

遠慮も同情もないその言葉に朽木は、

「……本当に、しおりん以外には優しくないわね」

そう返した彼女は、爽やかな微笑を七瀬に向ける。

「でも、多分間違っていないんでしょうね……」

同じように夢を追っているながら、自分のように孤独を恨むことなく生きた彼は、朽木には大きな存在に思える。

（……もし、生きてた間に相楽くんに出会えていたら……自分の選んだ道に、後悔なんてしなかったんだろうなあ）

そんなことを考えながら、彼女はしばしの間七瀬を見詰めていた。

第67話『Good-bay Days』前編(前書き)

更新遅くてすみません() () m

第67話『Good bay Days（前編）』

翌日 音楽室

ガルデモのメンバーが新曲の練習をする中、七瀬はそれの演奏に聞き浸っていた。

すると、急にひさ子が演奏を止める。

「ストップ！」

「こらユイ、そんなヨレヨレのリズムで続けるな」

「えー!?!」

「ユイ、歌うか弾くかどっちかに専念した方がいいんじゃないの？」

ひさ子に同意するように入江も言つと、

「ああ、そりゃ言ってる。

今のまんまじゃ酷すぎるわ」

「そんな〜……相楽先輩」

入江に続き関根も声をあげると、ユイは端で見ていた七瀬に擁護を求め。

しかし、七瀬が彼女を擁護する様子は見れない。

「素人の俺に聞くなよ。」

……まあ、強いて言うのなら、関根達の言う通りじゃね？」

すると、ひさ子がポンとユイの頭を叩く。

「ほら、さっさんもそう言ってるんだろ？」

「岩沢さん弾きながら歌ってましたよ？」

「そりゃ岩沢はどっちも上手かったからだよ」

ユイの反論に対して、ひさ子がハッキリと言う。

「うう……あたしだって頑張ってますよお。」

皆言うことキツすぎますよ。

ライブだってちゃんと盛り上がってるじゃないですか？」

「でも、今回は新曲だぜ？」

そんな話し合いを続けていると、

「ん？」

不意に音楽室の扉が開かれ、ひさ子が振り向くと、奏が音楽室に入室する。

『天使！？』

驚くガルデモメンバーを気に止めることもなく、奏はツカツカとユ

イに歩み寄り、彼女を指差す。

「お前のギターのせいでバンドが死んでいる」

『……………』

じばしの沈黙の後、ひさ子が声をあげる。

「一瞬にして今のバンドの弱点を見抜いた!？」

「やっぱりただ者じゃない!？」

「音が分かるのよ」

「……………悪い、同意しかねる」

関根、入江の発言に続き、七瀬は引き攣った顔で口を開く。

「そんなあ!？皆は気付いていないと思ってたのに」

「誰かこいつシバき倒した方がいいんじゃないか」

七瀬が呆れ果てた様子で言うが、反応を見せることもなく、奏はユイからギターを取り上げた。

「……………という訳で、しばらくそのギターは没収させてもらう」

彼女が音楽室を後にした途端、ユイは膝から崩れ落ち、他の面子は彼女に駆け寄る。

「ちょっとユイ!？」

「大丈夫か？」

関根やひさ子がユイに声をかける中、七瀬は廊下を覗き、駆けて行く奏の後ろ姿を見詰める。

「……一体何しに来たんだ？」

訝しむような表情で呟くと、彼はガルデモメンバーに向き直る。

「……調度いいし、とりあえずユイのギター無しで練習したらどうだ？」

そんな七瀬の提案に、なんとかユイを立たせたひさ子達は賛成するが、ユイは不満をあらわにしていた。

ユイのギター無しでの練習開始から数分後。

「そうそう、ギター無しだと全然よれないじゃん」

入江が言うが、ユイは不満げな表情を見せる。

「でも、サウンドが薄っぺらくないですか？

リズムギターいるっしょ？」

「じゃ、サイドギターもう一人入れようか？」

ひさ子が尋ねると、ユイは声を荒げた。

「うう……あたしが言いたいのは！

やっぱバンドはヴォーカルがギター背負って歌うのが絵面的に一番痺れるでしょって話じゃコラア！」

「っ！？こいつ……」

「うわあ、こいつひさ子さんにキレた！？」

ユイの暴拳にひさ子苛つき関根が驚く中、ユイは一同の反応を無視し、天使を追うように駆け出した。

「やっぱギター取り返して来る！」

「あ、おい！」

「こらユイ！」

ひさ子の制止を振り切り教室を飛び出すと、ユイは走り去って行った。

「……やれやれ……ちよつと様子見てくる」

立ち上がると、七瀬はけだるい様子でドアに手をかける。

対してひさ子、関根、入江の三人は、

「ああ、頼むよ」

「気をつけてね」

「できれば、ギターも取り返してあげて下さいね」

それぞれで声をかけ、彼を送り出した。

中庭

「お、いたいた」

ユイの向かった方角に足を進めると、その姿は直ぐに視界に入った。ただでさえ戦線の制服は目立つのだから、それを改造しているユイを見つけてるのは容易いことだ。

「おーい、ゆ」

呼びかけようとした瞬間、彼は植え込みへと引きずり込まれた。

「のあ！？何だ？」

取り乱す七瀬に対し顔を覗かせたのは奏だ。

「……………静かにして」

口を押さえられ言われると、小さく頷いて了解の意を示す。

すると、彼女は手を話し、

「……………見て」

言ってユイのいた方向を見る。

「……………一体何があるってんだよ」

ぼやきながら七瀬を見ると、そこにはユイと一緒に音無の姿があった。

「……………音無……………何やってんだアイツ？」

「……あの子の未練を晴らそうとしているわ」

訝しむような表情を浮かべる七瀬に対し、奏は答えた。

それを聞くと、七瀬は彼女に尋ねる。

「……何で俺に、そんなこと教えるんだ？」

当然の疑問だろう。

奏達がユイを成仏させるのなら、戦線の一員である七瀬にそれを教えるのは不可解な行動だ。

しかし奏は、

「……無理矢理じゃない。

岩沢さんと同じよ。」

それなら、相楽くんは邪魔をしないでしょっ？」

率直な意見を述べると、奏は七瀬の瞳をじっと見詰める。

対して七瀬は、小さく頷いて同意した。

(……………岩沢か……………確かに、アイツは幸せそうだったな。

ああいう消えかたなら……………)

消えていった岩沢の姿を脳裏に浮かべ、七瀬はしばしの間、音無達の姿を眺めていた。

第68話『Good bay Days』(中編)『前書き』

毎度更新遅くてすみません(|) m

第68話『Good bay Days(中編)』

音楽室

「……………う……………遅いなあ」

関根が落ち着かない様子でいると、

「やつほー、皆暇してる？」

ドアを開き、朽木が顔を出した。

「く、クツチー!?!」

当然ながら関根は驚きの声をあげるが、

「何よ、人をオバケみたいに」

「だ、だって、反省室に閉じこもってるんじゃないの？」

「別に嚴重に閉じ込められてた訳じゃないし、私が出て来てもそんなに驚くことじゃないでしょ？」

応えると、彼女は適当な椅子に腰掛けた。

「あれ？七瀬さんとユイがないわね」

ふと彼女の漏らした言葉を聞いた途端、関根が反応する。

「……な、『七瀬くん』!？」

「あら、親しい間柄なんだから、名前で呼ぶくらいおかしいことじゃないでしょ？」

言われると、関根はヒクヒクと引き攣る笑顔で、

「こ、この間戦った相手を親しいって表現するのはどうかと思うけど?」

「別に直接殴り合ったわけでもないし、そこまで敬遠することじゃないわよ。」

それに……」

「それに?」

「私と七瀬くん、結構お似合いだと思わない」

「はあ!？」

驚きを隠せない様子で関根が声をあげると、朽木は不敵な笑みを浮かべていた。

学園内、中庭

「ジャーマンスープレックスだあ！！」

ぐふっ！？」

勢い良く地面にたたき付けられると、音無はユイにジャーマンスープレックスをかけられた状態で必死に声をあげる。

「1・2・3！カンカンカン、試合しゅっりょー！」

次の瞬間、ユイが歓声をあげるが、音無はグツタリと芝生の上で大の字に倒れる。

すると、その顔を彼にとって予想外の人物が覗き込む。

「相楽っ！？」

「……お前、傍から見るとバカに見えるぞ」

呆れた様子で言われると、音無は引き攣った笑顔で応えた。

「あははは……まあ、色々あつてな。

……で、相楽は何でここに？」

「立華から話聞いてな」

「え……じゃあ、手伝ってくれるのか？」

「まあ、相当困ってる時だけな」

そんなやり取りをすると、二人ははしゃぎ続けるユイに視線を向け、小さくため息をついた。

渡り廊下

七瀬達は自販機の前で一服すると、次に何をするかを話し合う。

「次はサッカーにすつか」

「何だ、プロレスだけじゃなくサッカーもやりたいのかよ」

音無の台詞を聞くと、七瀬が面倒そうに言う。

すると音無は、彼と同じような表情を見せながらも、

「一対一のPKでいいよな？」

ユイに呼びかける。

しかし、

「やだよ。」

五人抜きのだリブルシュートじゃなきゃ」

ユイが駄々をこねるように声をあげた。

途端に七瀬は彼女と音無に背を向け歩き出す。

「そっか、頑張れよ〜」

「待て待て！さっき手伝ってくれろって言っただろっ？」

「やっつけられるか。」

大体、『相当困ってる時』って言ったろ」

「そう言わずに、メンバー探しだけでも手伝ってくれよ」
言われると、七瀬は小さくため息をついていた。

学習棟C棟、男子トイレ

七瀬達は日向、野田、藤巻、TKの四人を集めると、彼等に天使からだと言って一通の手紙を渡す。

すると、野田がそれを受け取り、

「……女一人にも勝てぬのに、男を名乗るとは片腹痛し」

「おお、片腹痛しなんてよく読めたな。

アホが直ったか？」

ふと藤巻が言うが、七瀬と日向がそれを否定する。

「ご丁寧にルビ振ってあるぞ。
読めなかったらアホどころの騒ぎじゃねえ」

「いや、仮にルビ振ってなくても、アホでも読めるよ」

そんな二人の言葉を気にかけることなく野田は続ける。

「スポーツマンシップに則りその女々しき根性叩き直してくれる。

放課後サッカー場にて待つ。

天使……………だと」

野田が怒りに震えていると、音無が彼の手から手紙を取る。

「……………訳の分からん内容だな。

これホントにアイツが書いたのか？」

「天使が渡してきたって言ってんだから、書いたのもアイツだろ」

日向の疑問に対し、七瀬が応える。

すると、それに続き音無が一同への説得を始め、最終的には何とか彼等をその気にさせることに成功した。

同時刻、女子寮

「……それで、何であんなこと言ったんだ？」

ひさ子が問い掛けると、朽木は微笑みで返す。

「何でって、本当に好きだからに決まってるじゃない」

「……………へ？」

「良く考えてみなさいよ。」

顔もいいし、身体は引き締まってるし、何より男らしくて素敵じゃない」

そんな発言に対し、ひさ子は間の抜けた顔を見せる。

「……………まさかとは思っけど、本当に惚れたの？」

「嘘でいいままでやらないわよ。」

……………まあ、確かにしおりんには差を付けられてるけど、それだって積極的にアピールすれば、巻き返せるわよ」

「……………」

言いかけて、ひさは口をつぐむ。

すると、朽木は聞かずとも彼女の言おうとするところを理解している様子で、ベッドに座り背を向けた状態で応える。

「……………」

相手の好みだとか、一緒にいた時間だとか、どう頑張っても巻き返すことができないことくらい

「じゃあ、何で」

「どうせ負けるなら、全力出し切って負けたいわよ」

「クッチー……………」

振り向くこともなく語るその後ろ姿に、ひさは既視感を覚える。

（何か、こんな背中、どこかで……………ああ、岩沢だ）

分野は違えど、一度想いを寄せたものに一途になれる。
そんな共通点が、二人の姿を重ね合わせていた。

野球場

夕方までユイのやりたかったことに付き合つと、七瀬と音無は疲労の見える足取りで帰路を辿っていた。

「本当にこんなんで上手くいくのか？」

「さあな。やってみなきゃ分からないよ」

「『さあな』って、お前が始めたことだろ？」

二人がそんなやり取りをしていると、

「ん？」

物憂いな様で街灯に寄り掛かる関根に気付き、七瀬は足を止めた。

「どうした関根？」

声をかけられると、彼女はハッと我に返り、

「あ、さっさん……と音無さん」

ついでのように呼ばれると、音無は空気を察した様子で苦笑する。

「えっと……俺は席外そうか？」

音無のそんな問い掛けに対し、七瀬は呆けた顔で、

「ん？いや、別にいいけど」

そんな七瀬に対し、音無は呆れた様子で囁きかける。

「……………おい、ちょっとは空気読めよ」

「？」

「いいから、俺は先に帰るから、少し関根と話してから寮に戻れよ」

言い残すと、音無はその場を後にした。

第69話『Good bay Days』(後編) (前書き)

更新のろまでホントにすいませんm () m

第69話『Good bay Days（後編）』

「……ねえ」

しばしの沈黙を破り関根が声をかける。

「ん？」

「……さっさんはさ……い、今好きな人とかいる？」

問い掛けられると、七瀬は間の抜けた表情を浮かべ、

「何だ藪から棒に」

「いや、何となく気になったからさ……」

そんなやり取りで二人の会話は再び途切れる。

（……何か話しにくいな）

いつもとは違う微妙な空気に、七瀬は多少気まずい様子で、

「とりあえず、今はないかな。」

「……お前はどうかんだよ？」

「……いや、私はその……」

言いかけて吃ると、関根は赤らんだ表情でもじもじとしている。

彼女らしからぬそんな態度に、七瀬は小首を傾げていた。

「……………?」

「……………」

しばしの間沈黙が続くと、関根は何か覚悟を決めた様子で口を開いた。

「い、いるよ。」

……………その…好きな人」

それを聞くと、七瀬は間の抜けた表情を浮かべる。

一方で関根は耳の先まで赤くなり、取り乱したようにごまかした。

「べ、別に深い意味じゃないからね!!」

「『深い意味』って何だよ?」

「えっと、その……………それは……………」

彼女が俯いて黙り込むと、七瀬はその空気に耐え切れない様子で顔をしかめた。

「……………何かさ」

「ん?」

不意に七瀬が口を開くと、関根は小首を傾げる。

「俺達と一緒にいるときって、こう……もっとスカッとした感じで、楽しくなかったか？」

何も考えずに口にされたその言葉を聞いて、関根はしばし俯く。

「そ、そうだよな。」

……いつもみたいにふざけて笑い合ってる方が楽しいよね」

「……………関根」

「あはは……………ごめんね変なこと言って。」

……………それじゃ、私もう寮に戻るから」

「あ、うん……………気をつけて帰れよ」

関根の後ろ姿を見送ると、七瀬は去り際の彼女の空虚な笑顔を思い出し、大きくため息をついた。

……何で彼女はあんな笑顔を見せたのだろうか。
胸に残るモヤモヤとした感情に戸惑い、七瀬は考え込む。

昨日関根の見せた笑顔が脳裏を離れず、音無の手伝いをするはずだった今日も彼は呆けたままだ。

そいしていると、

「お前がやりたかったことだろ？
最後まで頑張れよ！」

結局はホームランを打つことを諦めてしまっユイに、音無は声をあげた。

「ホームランなんて冗談みたいな夢だよ。

ホームランが打てなくても、こんなにいっぱい身体動かせたんだから、もう十分だよ。

毎日部活みたいで、楽しかったよ

言ったでしょ？私、身体動かせなかったから……だから、スゲー楽しかった」

「じゃあ、もう全部叶ったのか？」

「叶っ？何が？」

「その……身体が動かせなかったときにしたかったこと」

「あ……もう一個あるよ」

「何？」

「結婚」

「え？」

「女の究極の幸せ。」

でも、家事も洗濯もできない。

それどころか、一人じゃなんにもできない。

迷惑ばかり掛けて……こんなお荷物……誰が、貰ってくれるかな？

神様って酷いよね？

私の幸せ、全部奪っていったんだ」

震える小さな背中を見て、音無と七瀬は後悔する。

自分達の軽はずみな行動は、触れるべきではないものに触れてしまった。

「……そんなこと……ない」

「じゃあ先輩、私と結婚してくれますか？」

その問い掛けに答えることができず、音無達は黙り込んだ。

しかし、

「俺がしてやんよ!」

後ろから響いた声に音無が振り向くと、そこにはグラウンドの入り口に立つ日向と、少し離れた場所からフェンス越しに見守る多真の姿があった。

「……日向」

音無が間の抜けた表情を浮かべていると、多真は悲しげに微笑し彼を黙らせる。

そして、日向はユイに歩み寄って行く。

「俺が結婚してやんよ!」

「……これが、俺の本気だ!」

「……そんな……先輩は本当のあたしを知らない」

「……現実が……生きてたときのお前がどんなでも、俺が結婚してやんよ!」

もしお前が、どんなハンデを抱えてても」

「……ユイ歩けないよ?立てないよ?」

「どんなハンデでもつつたろ!」

歩けなくても、立てなくても……もし子供が産めなくても……それでも、俺はお前と結婚してやんよ！

ずっとずっと、側にいてやんよ。

ここで出会ったお前は、ユイの偽物じゃない……ユイだ。

どこで出会っていたとしても、俺は好きになっていたはずだ。

また60億分の1の確率で出会えたら、そんな時また、お前が動けない身体だったとしても、お前と結婚してやんよ」

その言葉を聞き、ユイが目尻に涙を浮かべた。

そんな彼らを見て、七瀬と音無は顔を見合わせる。

「……結局、俺達が頑張ってもダメだったってことだな」

「俺達じゃどうにもならない願いもあるんだよなあ……」

そんなやり取りをして、日向達に視線を向ける。

「……出会えないよ。」

ユイ、家で寝たつきりだもん」

「……俺は、野球やってるからさ。」

ある日、お前ん家の窓をパリーッンって打った球で割っちまうんだ。

それを取りに行くとき、お前がいるんだ。
……それが出会い。

話するとき、気があってさ。
何時しか毎日通うようになる。
介護も始める。

そういうのはどうだ？」

「……うん……ねえ？そんなときはさ、私をいつも一人でさ、頑張っ
て介護してくれた私のお母さん……楽しんであげてね」

「……まかせろ」

「……良かった」

そんな二人のやり取りを聞き、七瀬と音無は目を逸らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7113o/>

Angel Beats ~ Heaven Stair ~

2011年10月26日02時30分発行